

パウロの ヘブル人への手紙

<https://ichthys.com/Hebrews-Home-Page.htm>

ロバート・D・ルギンビル博士著

2 章



内容

第 2 章:御子の受肉の目的	3
I. イントロ.....	3
II. 翻訳.....	5
III. 要約と意識	7
IV. 節ごとの注解.....	9
一節 - 三節前半	9
三節(後半) - 四節.....	20
五節	25
六節~八節(前半).....	28
八節(後半)	34
九節	37
十節	47
十一節.....	56
十二-十三節.....	60
十四-十五節.....	63
十六節.....	79
十七節.....	83
十八節.....	87

パウロのヘブル人への手紙

<https://ichthys.com/Hebrews-intro.htm>

ロバート・D・ルギンビル博士著

第 2 章：御子の受肉の目的

アウトライン

- I. イントロ
- II. 翻訳
- III. 要約と意識
- IV. 節ごとの注解

I. イントロ

前章では、パウロがイエス・キリストの神性を疑いの余地なく示すことで、キリストが天使よりも優れておられることを決定的に証明しました。過去における真理の告知([ヘブル 1 章 1 節](#))とは対照的に、イエスはご自身が神のことばであり([1 章 2 節 a](#))、世界の創造者であり([1 章 2 節 b](#); [1 章 10-12 節](#))、すべてを保ち続ける方であり([1 章 3 節](#))、神の御子そのものであり([1 章 2 節](#))、父の完全な姿の表現です([1 章 3 節](#))。また、十字架における勝利([1 章 3 節 b](#))によって、イエスはすべての名にまさる名を受けられました([1 章 4 節](#))。そのため、天使という被造物たちは、父から「彼を礼拝せよ！」と命じられているのです([1 章 6 節](#))。天使たちは、人類の救いのために神が遣わした奉仕者ですが([1 章 14 節](#); [1 章 7 節](#)参照)、御子こそが実際に私たちの救いを成し遂げられた方です([1 章 3 節 b](#))。イエスは来るべき王であり([1 章 8-9 節](#))、父によって天の最高の座、つまり右の座に着かされ、すべての敵が御足の下に置かれる時を待っておられます([1 章 13 節](#))。それは、キリストが「王の王、主の主」として現れるときです。

第二章：御子の受肉の目的

I. イントロ

このようにしてパウロは、私たちの主の神性と、その神性に基づく天使たちに対する優越を確立したうえで、次に、「なぜ主が私たちを罪から救うために人間とられたのか」という説明に進みます。本来これはどのクリスチャンも理解しているべき内容ですが、エルサレムの信者たちはそれを心に保つことを怠り、信仰から離れかけていました。救われるのは信じる者だけです([ヨハネ 3 章 18 節](#))。そのためパウロは、まるで新しい信者に語るかのように、イエスが人間とならなければならなかった理由、神の計画の中で私たちの役割、メシヤが最初の来臨で十字架の霊的死によって成し遂げた贖いを思い起こさせます。これらの基本的な真理を忘れることは、霊的に非常に危険だからです([ヘブル 2 章 1-4 節](#))。永遠の王国に救いの希望を置き、その相続者とされているのは天使ではなく、人である信者です([2 章 5-8 節](#))。そしてメシヤこそが究極の相続人であり、私たちはみな、その方にあつて自分の相続分を与えられています。それゆえにこそ、私たちの主は人とならなければなりません。私たちが救われ、こうして父が、その愛する御子に信仰を置くすべての者のために備えておられる、このすばらしい相続にあずかるようになるためには、ほかに道はなかったのです([2 章 9-18 節](#))。

第 2 章はまた、ヘブル書全体で展開されていく重要なテーマ、イエス・キリストの大祭司職([2 章 17 節](#))を取り上げています。この新しい祭司職は、律法に代わる新しい契約の基盤です。主が完全ないけにえをささげ、私たちの大祭司となるためには、罪のために死ぬことのできる「真の人間」ととならなければなりません。第 2 章は、律法という影が、救い主メシヤという実体によってどのように成就し、置き換えられたのかを説明するための土台を築いています。救いは一度限りで完全に成し遂げられ、それは御子を信じることを選ぶすべての者に与えられるのです。

II. 翻訳

(1) それゆえ、この理由のために、私たちは聞いた事柄[教え]に、いっそう注意を払わなければならない。そうでなければ、私たちは[進路から]押し流されてしまうからである。(2) というのは、天使を通して語られた言葉(すなわち律法)が効力を持ち、すべての違反と不従順が正当な報いを受けたのであれば、(3a) これほど偉大な救いを[命の御言葉であられるご自身からの救いを]なおざりにするならば、どうして私たちはのがれることができようか(3b)……この[救い]は、主によって初めに語られ、[主を個人的に]聞いた者たち(すなわち、教会初期・紀元 30 年代後半に主を直接聞いた前の世代)によって伝えられ、そして(紀元 50 年代後半の教会の)私たちに対しても、(4) 神ご自身が、しるしと不思議とさまざまな力ある業、そして御心に従った聖霊の分配(すなわち、霊の賜物)によってあかしされたので、確かなものとされたのである。(5) というのは、神が来るべき世界を服従させられたのは、天使たちに対してではないからである。(6) ある箇所、誰かが証して、次のように言っている。

「人とは何者であろうか、あなたがこれを心に留められるとは。
あるいは、人の子とは何者であろうか、あなたがこれを顧みられるとは。
(7) あなたは彼を、しばらくの間、天使より低くされ、彼に栄光と誉れの冠を授けられた。あなたは彼を、あなたの御手のすべての業の上に立てられ、(8a) 万物をその足の下に服従させられた。」(詩篇 8 篇 4-6 節)

万物を彼に服従させられた以上、神は彼に服従していないものを何一つ残さなかったのである。しかしながら、今のところ、私たちはまだ万物が彼に服従しているのを見ていない。(9) しかし私たちは今、イエスを見るのである。すなわち、死の苦しみのゆえに栄光と誉れの冠を授けられた方、一時的に「天使より低くなられた」方、神の恵みによって、私たちすべてのために死を味わわれた方である。(10) というのは、万物がその方のために存在し、また万物がその方を通して存在している方[父]が、苦難を通して、彼らの救いの創始者、すなわち多くの子らを栄光へ導いた方[私たちの主イエス・キリスト]を完全なものとされたのは、[父に]ふさわしいことであったからである。(11) というのは、聖とする者も、聖とされる者たちも、すべて一人の[父]から出ているからであり、この理由のために、[キリスト]は彼らを兄弟と呼ぶことを恥とはされない。(12) 彼はこう言っておられる。「わたしはあなたの名を、わたしの兄弟たちに告げ知らせ、会衆のただ中で、あなたをほめたたえるであろう。」(詩篇 22 篇 22 節) (13) また、別のとこ

ろで、「わたし[もまた]は、彼[父]に信頼を置く」(イザヤ 8 章 17 節)さらに別のところで、「見よ、わたしと、神がわたしに与えてくださった子らである」(イザヤ 8 章 18 節)と言っておられる。(14)それゆえ、「これらの子ら」(すなわち父によってキリストに与えられた信者たち:13 節)が血と肉とを持っているので、彼[キリスト]もまた、非常によく似た形で(すなわち、処女懐胎であり罪がなかった点のみが同一ではないが)同じものを受けられた。それは、彼の死を通して、死の力を持つ者、すなわち悪魔を無力にし、(15)死の恐れによって一生涯奴隷となっていた者たちを、[神へと]和解させるためであった。(16)確かに、彼が助けておられるのは天使たちではなく、アブラハムの子孫(すなわち信じる人類)である。(17)それゆえ、神に関わる事柄において、憐れみ深く忠実な祭司(すなわち双方から信頼される仲介者)となり、人々の罪を贖うために(すなわち、神の義なる裁きを宥めるため、ご自身の血によって象徴的にそれらを「覆う」ことができるように)、彼はすべての点で兄弟たちと同じようにならなければならなかったのである。(18)というのは、彼ご自身が試みに遭い、苦しめられたからこそ、試みに遭っている者たちを助けることができるのである。(ヘブル 2 章 1-18 節)

III. 要約と意識

私たちが救われるためには、イエス・キリストが人間となられ、律法の動物の犠牲のような「象徴」ではなく、私たちの罪のための「実際の贖い」を成し遂げる必要がありました。

以上述べてきたことの重要性、すなわち、キリストの神性が絶対的に証明され、さらにその人性においても、あらゆる点で御使いたちに勝っておられるという事実を踏まえるならば、あなたがこれらの危険な考えに手を出していることを悔い改め、また、すでにキリストによって成就された象徴である律法へと立ち戻ろうとしていることを悔い改めることがきわめて重要です。そうしなければ、キリストから完全に離れ去り、背教に陥る危険があるからです。そもそも律法でさえ、天使を仲介者として与えられたものであり、キリストはそれらの天使にも無限にまさっています。そして、あの「影」である律法であっても、破れば厳しい裁きを受けました。まして今や救い主として明らかに示されたキリストを拒むことが、どれほど深刻なことでしょうか。神の御子による実際の救いを軽んじていながら、誰が神のさばきから逃れることを望めるでしょうか。この救いの良い知らせは、まず主ご自身によって語られ、次に主を直接聞いた人々によって、私たちの時代にまで確かなものとして伝えられました。さらに父なる神ご自身が、しるしと不思議と力ある御業、そして聖霊の賜物の分配によって、この救いを証ししてくださいました。これらは天使を介した律法とは違い、神から直接与えられた祝福です。

また、千年王国においてキリストの統治を分かち合うのは御使いたちではなく、私たちであると聖書は述べています。聖書は、神が従わせたのは御使いたちではなく「この世界を私たちに従わせた」と証言しているからです。(詩篇 8 篇 5-7 節)。しかし、この世界が人に完全に従うということは、まだ全面的には実現していないことは明らかです。すなわち、私たちすべてを救うために、イエス・キリストは、しばらくの間、御使いたちよりも低いものとなられて世に来られ、死を受けられる必要がありました。そして、その十字架における勝利のゆえに、私たちは今、主があらゆる御使いにまさって、栄光と誉れの冠を授けられておられるのを見ています。私たちが救われるためには、万物の存在理由であり、また万物を成り立たせている方である御子を、苦しみを通して完全な救いの創始者とすることが、父なる神にとってふさわしいことでした。キリストは、私たちを救いへと導き入れてくださる「先駆者」となられました。私たちも、そして救い主である方も、——その方はご自身の血によって私たちを買

第二章：御子の受肉の目的

Ⅲ. 要約と意識

い取り、私たちを聖なる者とされた方であり、また私たちはその方によって聖とされた者ですが——いずれも同一の天の父に属しています。このゆえに、救い主は私たちをご自分の兄弟と呼ぶことを恥とはされません。これは聖書が前もって預言しているとおりであり、そこでは、主が私たちを花嫁として愛しておられること([詩編 22 章 22 節](#))、今や主に属する者となった私たちが主に信頼を置いていること([イザヤ 8 章 17 節](#))、そして私たちが永遠に一つとされること([イザヤ 8 章 18 節](#))が語られています。

私たちが人間である以上、私たちが救われるためには、イエスもまた人とならなければなりません。すなわち、ご自分の人としての体において私たちの罪を負い、私たちのために贖いの代価を支払うためです。私たちは、主が私たちの代わりに受けてくださったその霊的な死を通して救われました。イエスが私たちのために死を味わわれたことによって、悪魔が持っていた「死への恐怖」という力は打ち砕かれました。私たちはそれによって、本来であれば希望のないまま直面せざるをえなかった肉体の死への恐れ、すなわちサタンが私たちに対して持っていた支配の力から救われ、解放されました。このようにしてキリストが救い出されたのは、天使たちだったのでしょうか。いいえ、そうではなく、私たち人間です。そして、私たちの大祭司、すなわち私たちのためにご自身を犠牲としてささげる、憐れみ深く忠実なお方となられるために、永遠の昔から神であられたイエスは、私たちと同じように、真の人間とならなければなりません。それは、罪のための完全なささげ物となられるためです。単なる儀式的・象徴的な犠牲ではなく、私たちのために暗闇の中で霊的な死を遂げ、その血によって実際に私たちの罪を償われるお方となるためでした。主は霊的な死に至る前に、極限まで試され、私たちのすべての罪のために計り知れない苦しみを受けられました。それゆえ主は、ご自身の血、すなわち霊的な死によって買い取られたこの救いを、私たちに与えるにふさわしい究極の助け手であられます。さらに、すでに救われた私たちを、今もあらゆる面で助けることができになります。なぜなら主ご自身が、人間の苦しみがどのようなものであるかを、身をもって知っておられるからです。その意味でも、主は私たちの完全な執り成し手でもあられます([ローマ 8 章 34 節](#); [第一ヨハネ 2 章 1-2 節](#))。

IV. 節ごとの注解

一節 - 三節前半

(1) **それゆえ**、この理由のために、私たちは聞いた事柄[教え]に、いっそう**注意を払わなければならない**。そうでなければ、私たちは[進路から]**押し流されてしまう**からである。(2) というのは、天使たちを通して語られた言葉(すなわち律法)が効力を持ち、すべての違反と不従順が正当な報いを受けたのであれば、(3a) **これほど偉大な救いを[命の御言葉であられるご自身からの救いを]なおざりにするならば、どうして私たちはのがれることができようか。**(ヘブル 2 章 1~3 節前半)

それゆえ：

「それゆえ」とは、注意を払う必要が生じた理由を指しており、それはパウロが第 1 章で彼らに書き送った内容によって暗示されている状況のことです。いかなるキリスト教会であっても、イエス・キリストが神であり、万物の創造主であり、宇宙を支えておられる方であり、また世の罪を支払われた十字架の勝利によって神の御子であることが確証された方である、という事実を、改めて説明される必要は本来ありません。したがって、キリストがあらゆる点において御使いよりも優れておられることも、当然理解されているはずで、ましてや、全キリスト教世界における最初の教会、すなわち使徒たちの教会であり、聖霊が最初に、しかも独自で奇跡的な形で、そこにいるすべての信者に与えられたエルサレムの教会であれば、なおさらのことです。

しかし、この手紙がエルサレムに届いた時点では、それからすでにほぼ三十年近くが経過しており、状況は大きく変化していたようです。最初の世代の、御霊に満たされた多くの信者たちは、サウロによって主導された迫害のために各地へと散らされ(使徒行伝 8 章 1-4 節)、すでにその地を離れていました。また、間違いなく主のみもとへと召された者たちも多くいたことでしょう。さらに、新しく加わった人々もいましたが、その中には、信仰の深さに疑問のある者たちも少なからず含まれていたと思われます。彼らがエルサレムに引き寄せられた理由はさまざまであり、必ずしも真の霊的成長を求めた結果であったとは限りませんでした。本来、もし霊的成長こそが真の目的であるなら、エルサレムへ巡礼する必要はありませんでした。神は、東地中海一帯の諸教会において、使徒の教えと御霊の特別な賜物を通して、前例のない成長をもたらしておられたからです。それにもかかわらず、エルサレムはキリスト教世界の最初の中心地であったため、ある種の自然な吸引力を持ち続けていました。そしてそれは、御霊による歩

第二章：御子の受肉の目的

IV. 節ごとの注解

一節-三節(前半)

みよりも感情に動かされやすい信者たちにとってだけでなく、偽りの教えにとっても同様でした。事実、当時のキリスト教世界の中心であったエルサレムは、偽りの教えが拠点構えるのに最も理にかなった場所でもあったのです。

これら新しく加わった人々が持ち込んだ否定的影響、すなわちグノーシス主義と、もう一つの要因である「古いもの」への引力、つまり使徒の時代が終わりに近づき、かつての奇跡的出来事の「花火」のような印象的な記憶が次第に薄れていく中で、伝統的な礼拝形態に戻りたいという願望とが結びついた結果、エルサレム教会全体の霊的生活に、明らかな下降・後退の流れが生み出されていました。確かに、なお信仰に堅く立ち続けていた強い信者たちが存在していたことは疑いありませんし、残っていた少数の使徒たちと共に、妥協しなかった長老たちもいたことでしょう。それでもなお、教会全体における否定的な傾向はもはや明白であり、ついには、御霊ご自身が介入する必要がある段階にまで至っていました。その結果として、御霊はパウロを任命し、この非常に鋭い書簡を書かせることになったのです。

注意を払うか、それとも押し流されるか：

なおイエス・キリストにつながり続けようとしていたエルサレムの信者たちにとって、選択はこれでした。すなわち、「今、注意を払う」か、それとも「押し流される」か、という選択です。これは、ラオデキヤの時代に生きる今日の信者たちが、非常によく似た圧力や誘惑に直面しているのと同じ状況です。パウロの書簡を受け取る以前には、その選択を迫られているという必要性は、パウロがここで明確にしたほどには明らかではありませんでした(あるいは、この会衆の多くが意識的にその現実から目を背けていたのかもしれない)。しかしパウロはここで、霊的衰退という問題にレーザーのような鋭い焦点を当て、その重大さをはっきりと示しています。

この時点で、エルサレムの信者たちは重大な岐路に立っていました。彼らは長い間、霊的に後退し続けており、その結果として、「人の悪巧みから出る、いわゆるあらゆる教えの風に吹き回され、巧みで狡猾な欺きによって、進路を外され、押し流されてしまふ」([エペソ 4 章 14 節](#))状態に置かれていました。しかし、パウロのこの書簡は、無知を理由とするいかなる言い訳も完全に取り除きました。『ヘブル人への手紙』を聞いた後で、なお前進するどころか、さらに後退し、背教へと進んでいくとすれば、それはもはや外的要因によるものではなく、全面的に彼ら自身の意志によるものであり、何一つ弁解の余地はなくなるのです。

第二章：御子の受肉の目的

IV. 節ごとの注解

一節-三節(前半)

当時のエルサレムの信者たちが直面していた問題は、グノーシス主義という悪霊的影響をもつ思想に不用意に関わることであり、あるいは当時、神殿で不信仰な人たちが実践していた、硬直した規則絡みの誤った律法適用へと引き戻されることであり、いずれの場合であっても、進むべき道自体はすでに明白でした。すなわち、すべての偽りの教えと霊的妥協を投げ捨て、改めて霊的成長に献身し直すことです。パウロが彼らを招いているのは、まさにこのような、神の御言葉の根本的な真理を思い起こすことによってもたらされる霊的回復です。当時において、これほど重要なことは他になく、それは今日においても全く同じです。なぜなら、後退の道もまた、当時も今も非常に明確だからです。霊的成長を怠ることは、霊的な無防備状態を生み出し、その結果として、多くの場合、背教(すなわち信仰の死)か、あるいは死に至る罪(主ご自身による、不名誉な形でのこの世からの取り去り)へと至ります。『ヘブル人への手紙』に込められた、この明確な呼びかけに応答しなかった場合、その時代の信者が期待できた最良の結果でさえ、霊的成長のない停滞と、急激な墮落との間に挟まれた、きわめて不安定な惰性状態に留まることにすぎませんでした。悪魔の世界体系とその手法が現実存在する以上、最良の状況下においてさえ、キリスト者の人生において同じ場所に留まり続けることは、ほとんど不可能です。圧力が強まる時——当時のエルサレムがまさにそうであり、また将来、艱難期が始まる時には私たちの時代も同様ですが——現実的な選択肢は、霊的成長か、霊的後退かの二つしかありません。キリスト者の生において、立ち止まっていることは非常に難しいことです。

「天使を通して語られた御言葉」について：

ここでパウロが言う「御言葉」とは、モーセの律法を指しています。聖書を読んできた人であればよく知っているように、モーセはシナイ山において、また他の機会にも、主ご自身と直接語り合いました(例えば、[出エジプト記 3 章 4-9 節](#); [34 章 32 節](#)、また出エジプト記全体を通して繰り返し見られます)。

人がその友と語るように、主はモーセと顔を合わせて語られた… (出エジプト記 33 章 11 節前半)

確かに、モーセは主との対話の後、その栄光を受けて顔が輝き、その輝きが次第に消えていくのが見えないように、顔に覆いを掛けました([出エジプト記 34 章 33-35 節](#); [第二コリント 3 章 13-18 節](#))。しかし、『出エジプト記』には「御使い(天使)」についての言及は一切ありません。では、この文脈において言われている「御使い」とは、いったい何を意味しているのでしょうか。

第二章：御子の受肉の目的

IV. 節ごとの注解

一節-三節(前半)

あなたがたは、御使たちによって伝えられた律法を受けたのに、それを守ることをしなかった」。(使徒行伝 7 章 53 節)

それでは、律法はなんであるか。それは違反を促すため、あとから加えられたのであって、約束されていた子孫が来るまで存続するだけのものであり、かつ、天使たちをとおし、仲介者の手によって制定されたものにすぎない。(ガラテヤ 3 章 19 節)

ヘブル語では、「天使」を表す語はマラーク(malach)であり、この語は天上的な存在である天使だけでなく、人間の使者を指しても用いられます(例:[創世記 32 章 3 節](#))。同様に、ギリシヤ語ではアンゲロス(ἄγγελος)という語が用いられますが、これは私たちの英語「angel」の語源であり、世俗ギリシヤ語においてはもっぱら「使者」という意味で用いられます。この語は、七十人訳聖書(LXX、紀元前 3 世紀の旧約ギリシヤ語訳)において、ヘブル語のマラークを翻訳するために使用されています。上に挙げた二つの箇所、すなわち[使徒行伝 7 章 53 節](#)および[ガラテヤ 3 章 19 節](#)、そして本書[ヘブル 2 章 2 節](#)の文脈においても、「御使たち」という表現は、モーセが同時に複数の天使的存在と会っていたことを意味しているのではありません。そのような出来事があったとは、聖書のどこにも記されていません。実際、聖書に記録されているモーセへの神の顕現において登場する「使者」は、常にただ一人です。それは、主の使いと呼ばれるお方でした。

(2) ときに主の使は、しばの中の炎のうちに彼に現れた。彼が見ると、しばは火に燃えているのに、そのしばはなくならなかった。(3) モーセは言った、「行ってこの大きな見ものを見、なぜしばが燃えてしまわないかを知ろう」。(4) 主は彼がきて見定めようとするのを見、神はしばの中から彼を呼んで、「モーセよ、モーセよ」と言われた。彼は「ここにいます」と言った。(出エジプト記 3 章 2-4 節)

この箇所が明確に示しているように(そして私たちがこれまで何度も確認してきたとおり)、「主の使い」とは、一般にクリストファニー(Christophany)と呼ばれるもの、すなわち受肉以前の主イエス・キリストの顕現です。¹ したがって[使徒行伝 7 章 53 節](#)、[ガ](#)

¹ 特に、[聖書の基礎 1「神について」II.C.3.「旧約聖書におけるキリストの顕現」](#); [聖書の基礎第 4 部 A「キリストについての研究」I.5.b.「旧約聖書におけるイエス・キリストの顕現」](#); および[「出エジプト記 14 章—パロの心を頑なにすること」19-21 節の解説にある「主の使い」](#)の項を参照してください。

第二章：御子の受肉の目的

IV. 節ごとの注解

一節-三節(前半)

[ラテヤ 3 章 19 節](#)、そして[ヘブル 2 章 2 節](#)に出てくる「御使たち」とは、実際には三位一体のうちの可視的なお方として、主ご自身がモーセに現れた顕現を指しています。これらの箇所では複数形が用いられているのは、出エジプトの過程全体、また聖書最初の五書、すなわちモーセの律法(五書)が与えられる過程において、このような顕現が繰り返し起こったためです。

このような言い回しは、パウロが読者たちに対して発している、決してさりげないとは言えない重要な注意喚起なのです。それは、受肉された御子とその新しい契約が、主が人となられ、私たちの罪のために死に、復活し、昇天し、父の右において栄光を受けられる以前に与えられた律法よりも、はるかに優れているということを思い起こさせるものです。しかしそれだけではありません。この表現は同時に、その律法が与えられた当時、仲介者であるモーセの背後に立ち、彼と語っていたのが誰であったのかを、彼らに思い出させるはずのものでもありました。それは他でもない、主であり救い主であるイエス・キリストご自身です。ところが、この手紙の受取人である信者たちは、まさにその方の十字架を軽んじ、また、その方の栄光あるご人格を、ご自身が創造された天使たちよりも劣るものとして扱っていました。パウロは、その矛盾と重大さを、この表現によって鋭く浮き彫りにしているのです。

どうして私たちはのがれることができようか：

ここでパウロは、修辞学で言うところの *a fortiori* (ア・フォルティオリ:ましてや) 論法を用いて、彼らの背信がいかほど極めて危険なものであるかを、読者に強く突きつけています。すでに御子が御使いたちに比べて比較にならないほど優れておられることを確立したうえで、パウロは問いかけます。すなわち、「御使いたちを通して語られた間接的な律法の言葉でさえ、その違反には恐るべき刑罰が科されたのに、今や父なる神が直接語りかけておられる御子そのものを退けたなら([ヘブル 1 章 1-2 節](#))、どうして災いを免れることができるか」と。

モーセ五書に親しんでいる者であれば、律法違反に対する数多くの厳罰の例を容易に思い起こすことができます。たとえば、安息日に薪を集めていた男が石打ちにされた例([民数記 15 章 32-36 節](#))、冒瀆を行った者が石打ちにされた例([レビ記 24 章 10-16 節](#))、また律法全体にわたって定められている数多くの刑罰規定([申命記 13 章 1-13 節](#), [4-6 節](#), など)です。律法の重要な規定を軽んじ、「<主に逆らって>故意に」罪を犯すこと([民数記 15 章 30 節](#))は、厳しい報復を招きました。もし、将来来られるメシヤを指し示す影にすぎなかった教えですらそのようであったなら、実際に私たちの罪を負ってくださった救い主そのものを軽んじることが、比較にならないほどはるかに深

第二章：御子の受肉の目的

IV. 節ごとの注解

一節-三節(前半)

刻であることは明らかです。しかし、この教会が置かれていた現状は、まさにそこだったのです。パウロはこの単純でも逃れようのない論理によって、彼らに自分たちの事実上の背教と正面から向き合わせます。もし律法の基準で裁かれるなら、彼らはキリストの血を軽んじた罪により、即座に石打ちにされてもおかしくない立場にありました。しかも皮肉なことに、彼らはそのキリストに対する罪を、まさにキリストを証していたはずの律法を、不信仰な者たちが歪めて用いていた形に戻ることによって犯していたのです([ヨハネ 5 章 39-40 節](#))。

律法は、正しく用いられるなら良いものです([第一テモテ 1 章 8 節](#))。もし律法によって救いが得られるのであれば、それを守るだけで十分だったはずですが([ガラテヤ 3 章 21 節](#))。しかし、誰一人として律法を完全に守ることはできず、律法によって義とされる者はいません([ガラテヤ 2 章 16 節](#))。それは私たちが皆罪人であるからです([ローマ 7 章 9-23 節](#))。そのため、律法の義の要求を完全に満たす救い主が必要でした([ローマ 8 章 1-4 節](#))。その救い主を脇に置き、救う力のない律法を選び取ることは、かつて信じていた者にとって考える限り最悪の取引です。この書簡を受け取った人々の中で、なお信仰の火が完全には消えていなかった者たちに向けて、パウロが発する「どうして逃れられると思うのか」という問いは、彼らの心の奥底に直接迫り、神に喜ばれる悔い改めと立て直しをもたらすことを目的としているのです。

そこで、たとい、あの手紙であなたがたを悲しませたとしても、わたしはそれを悔いていない。あの手紙がしばらくの間ではあるが、あなたがたを悲しませたのを見て悔いたとしても、今は喜んでいる。それは、あなたがたが悲しんだからではなく、悲しんで悔い改めるに至ったからである。あなたがたがそのように悲しんだのは、神のみこころに添うたことであって、わたしたちからはなんの損害も受けなかったのである。神のみこころに添うた悲しみは、悔いのない救いを得させる悔改めに導き、この世の悲しみは死をきたらせる。(第二コリント 7 章 8-10 節)

この章の 1 節で、パウロはこの教会の霊的状态を「押し流される」と表現しましたが、3 節では、その真理とキリストに対する怠慢な態度を、「これほど大きな救いを軽んじる」と表現しています。不信仰に至る過程はゆっくり始まることが多いですが、放置すれば必ず加速していきます。漂流はやがて意図的で急速な後退へと変わります。悪魔は、許されている範囲であらゆる妨害を用いて、信者が前進するのを止めることに長けています。一度勢いが止まると、漂流は避けられません。その段階で、悪魔は全人類を捕らえるために用意されたこの世の制度と誘惑を総動員します。霊的戦いにおける

第二章：御子の受肉の目的

IV. 節ごとの注解

一節-三節(前半)

自らの立場を忘れ、狭い道からそれで滅びへ至る広い道へと近づき始めた信者は、格好の標的となります。キリスト者の歩みには、立ち止まることはほとんど不可能です。前に進まなければ、やがて後退し始めます。その結末は、「死に至る罪」か(信仰を保ったままでも、極めて悪い証しをした場合に、主によってこの世から取り除かれること：[第一ヨハネ 5 章 16 節](#)；[第一コリント 5 章 4-5 節](#)；[11 章 29-30 節](#)；[第一テモテ 1 章 20 節](#)参照)、あるいは背教、すなわち信仰の喪失です。²

岩の上に落ちたのは、御言を聞いた時には喜んで受け入れるが、根が無いので、しばらくは信じていても、試練の時が来ると、信仰を捨てる人たちのことである。(ルカ 8 章 13 節)

グノーシス主義的な源流からこれらの信者たちが受けていた試みや誘惑は、現代において信者たちが受けている世俗的誘惑に相当します。また、彼らが律法主義に迎合するよう圧力を受けていたことによる患難や迫害は、今日の信者たちが、目に見える教会のさまざまな生ぬるい形態に迎合するよう感じている圧力に相当します。まもなく到来する艱難期においては、誘惑と迫害の水準は、これまでに見られたあらゆるものをはるかに超えて、指数関数的に激化することになります。

いったん、光を受けて天よりの賜物を味わい、聖霊にあずかる者となり、また、神の良きみ言葉と、きたるべき世の力とを味わった者たちが、そののち墮落した場合には、またもや神の御子を、自ら十字架につけて、さらしものにするわけであるから、ふたたび悔改めにたち帰ることは不可能である。(ヘブル 6 章 4-6 節)

もしわたしたちが、真理の知識を受けたのちにもなお、ことさらに罪を犯しつづけるなら、罪のためのいけにえは、もはやあり得ない。ただ、さばきと、逆らう者たちを焼きつくす激しい火とを、恐れつつ待つことだけがある。(ヘブル 10 章 26-27 節)

パウロがこの会衆に対して、ここや前後の文脈で与えているこれほど厳しい警告にもかかわらず、私たちは一つの重要な事実を見失ってはなりません。それは、彼がこのように語っているのは、改革や悔い改め、回復が不可能だからではなく(これらの箇所を誤って読む多くの人がそう結論づけてしまいましたが)、まさにその逆であり、これらの

² [パート 3B「ハマルティオロジー\(罪の研究\)」第 IV.7 節「背教と死に至る罪」](#)を参照のこと。

第二章：御子の受肉の目的

IV. 節ごとの注解

一節-三節(前半)

信者たちが心から主に立ち返り、過去に長年努力して築いてきたものを失わないためなのです(ヘブル 10 章 32-36 節)。

(9)しかし、愛する者たちよ。こうは言うものの、わたしたちは、救にかかわる更に良いことがあるのを、あなたがたについて確信している。(10)神は不義なかたではないから、あなたがたの働きや、あなたがたがかつて聖徒に仕え、今もお仕えて、御名のために示してくれた愛を、お忘れになることはない。(ヘブル 6 章 9-10 節)

自分自身の置かれている状況の現実を認識することは、霊的回復において常に最初の一步です。そして、その認識こそが、パウロがこの深く愛していた教会に対してもたらそうとしているものです。個人的な罪に陥ったとき、回復のためには、まず自分自身の誤りを認め、真実を受け入れなければならないように、霊的生活全体の歩みにおいても同じことが言えます。すなわち、船の進路方向を転換し、再び正しい航路——主により近づいていく航路——に戻すためには、まず現在の進路が誤っていること、すなわち、神の御言葉を最優先とせず、グノーシス主義や律法主義といった偽りに注意を向けてきた結果、主から離れて漂流してしまっているという現実を認める必要があります。これは、私たちの救いを確かなものとする道とは正反対の方向です。

もし最初の確信を、最後までしっかりと持ち続けるならば、わたしたちはキリストにあずかる者となるのである。(ヘブル 3 章 14 節)

愛する者たちよ。それだから、あなたがたはかねてから心がけているように、非道の者の惑わしに誘い込まれて、あなたがた自身の確信を失うことのないように心がけなさい。(第二ペテロ 3 章 17 節)

よく注意して、わたしたちの働いて得た成果を失うことがなく、豊かな報いを受けられるようにしなさい。(第二ヨハネ 1 章 8 節)

これほど偉大な救い：

(1)わたしはまた、御座にいますかたの右の手に、巻物があるのを見た。その内側にも外側にも字が書いてあって、七つの封印で封じてあった。(2)また、ひとりの強い御使が、大声で、「その巻物を開き、封印をとくのにふさわしい者は、だれか」と呼ばわっているのを見た。(3)しかし、天にも地にも地の下にも、この巻物

第二章：御子の受肉の目的

IV. 節ごとの注解

一節-三節(前半)

を開いて、それを見ることのできる者は、ひとりもいなかった。(4)巻物を開いてそれを見るのにふさわしい者が見当たらないので、わたしは激しく泣いていた。(5)すると、長老のひとりがわたしに言った、「泣くな。見よ、ユダ族のしし、ダビデの若枝であるかたが、勝利を得たので、その巻物を開き七つの封印を解くことができる」。(黙示録 5 章 1-5 節)

もしわたしたちが、この世の生活でキリストにあって単なる望みをいただいているだけだとすれば、わたしたちは、すべての人の中で最もあわれむべき存在となる。(第一コリント 15 章 19 節)。

しかし、神に感謝することに、事実はそうではありません。私たちは小羊の血によって救われ、罪から贖われ、死者の中からの確かな復活を約束されています。このイエス・キリストにある恵みによる救いは、まさに「かくも偉大な」救いです。この世において、これより大きなものはなく、今後も決してあり得ません。それゆえ、この救いをいかなる理由であれ危険にさらすことは、最大の愚行です。いかなる圧力も、誘惑も、代価も、死や恥辱、投獄の脅しも、イエス・キリストにある永遠のいのちと、その将来の栄光に比べれば、考慮にさえ値するものではありません。

わたしは思う。今のこの時の苦しみは、やがてわたしたちに現されようとする栄光に比べると、言うに足りない。(ローマ 8 章 18 節)

(17)なぜなら、このしばらくの軽い患難は働いて、永遠の重い栄光を、あふれるばかりにわたしたちに得させるからである。(18)わたしたちは、見えるものではなく、見えないものに目を注ぐ。見えるものは一時的であり、見えないものは永遠につづくのである。(第二コリント 4 章 17-18 節)

「人生は短い——人はやがて死ぬ」という言葉があります。不信者はこれを皮肉な冗談のように笑いますが、その真実を心に受け止めることはせず、本能的に目を背けています。しかし私たち信者は、その意味を深く理解しています。イエス・キリストなしには、彼にあるこのかくも偉大な救いなしには、復活と永遠のいのちという祝された希望なしには——すなわち、キリストの花嫁としての将来の栄光なしには——人生は本当に無意味だからです。

空の空。いっさいは空である。(伝道者の書 1 章 2 節)

第二章：御子の受肉の目的

IV. 節ごとの注解

一節-三節(前半)

世的な視野に立つ不信者にとって、ソロモンの人生観は完全に正確です。この地上の人生が真の意味を持つのは、信者にとってのみです。それは、信者だけが、近づく墓を越えた希望を持っているからです。不信者にとっては、すべての希望が死とともに消え去ります。イエス・キリストなき人生が、いかに空虚であることでしょうか。ですから、この上なく高価な代価で私たちを買い取ってくださった主から離れるように導く教えや運動、人々と関わることは、信者にとって正気の沙汰ではありません。そのような漂流を放置すれば、その帰結は、この「かくも偉大な救い」を失うことにほかなりません。

(10) その時わたしは、大きな声が天でこう言うのを聞いた、「今や、われらの神の救と力と国と、神のキリストの権威とは、現れた。われらの兄弟らを訴える者、夜昼われらの神のみまえて彼らを訴える者は、投げ落された。(11) 兄弟たちは、小羊の血と彼らのあかしの言葉とによって、彼にうち勝ち、死に至るまでもそのいのちを惜しまなかった。(黙示録 12 章 10-11 節)

過去の時代の信者たちには、いくらかの言い訳が許されたかもしれません。しかし、パウロの時代のエルサレムの信者たちは、メシヤを自分の目を見た者たちであり、あるいは実際に見た人々からその証言を受けた者たちでした。もし彼らが聖霊の降臨を直接見ていなかったとしても、私たちと同じく、聖霊の祝福された内住の働きにあずかっていたことは確かです。彼らは、メシヤを指し示す影としての教えが今や明確に解き明かされた旧約聖書を持っていただけでなく、新約聖書のかなりの部分もすでに与えられていました。そして、それらの聖書は、教会における使徒・預言者・教師たちによって教えられ、解き明かされていたはずで、その時代の地上のすべての信者の中で、この教会ほど新しい契約の祝福を受けていた集団はありませんでした。ところが、本来であれば絶えず喜びの源であるべきその祝福が、多くの者によって軽んじられ、古いものへと戻ろうとする態度に置き換えられていました。さらには、一部の者は悪霊的な代用品にさえ心を向けていました。旧約の契約の下では、そのような腐敗した行動は容赦なく切り捨てることを要求するものでした。それではなおのこと、どれほど厳しい懲らしめを受けるにふさわしかったことでしょうか。自分たちの行いによって、御子——すなわち父のことばであり、またその使者であり、「律法の御使いたち」(パウロと同時代の人々がそのように誤解していたように) やグノーシス的な作り事をはるかに超えておられるお方——を、ほとんど否もうとしていた者たちは。しかもそれは、彼らを罪から買い取って自由にしてくださった方、さらには十字架におけるその御わざさえも否むことになる行為だったのです。

第二章：御子の受肉の目的

IV. 節ごとの注解

一節-三節(前半)

もしあなたがたが、いたずらに信じないで、わたしの宣べ伝えたとおりの言葉を**固く守っておれば**、この福音によって救われるのである。(第一コリント 15 章 2 節)

(11) 次の言葉は確実である。「もしわたしたちが、彼と共に死んだなら、また彼と共に生きるであろう。(12) **もし耐え忍ぶなら**、彼と共に支配者となるであろう。もし彼を否むなら、彼もわたしたちを否むであろう。(13) たとい、わたしたちは不真実であっても、彼は常に真実である。彼は自分を偽ることが、できないのである」。(第二テモテ 2 章 11-13 節)

…もしわたしたちが、望みの確信と誇とを最後まで**しっかりと持ち続けるなら**、わたしたちは神の家なのである。(ヘブル 3 章 6 節後半)

もし最初の確信を、最後まで**しっかりと持ち続けるならば**、わたしたちはキリストにあずかる者となるのである。(ヘブル 3 章 14 節)

聖書において、救いには三つの側面があります。第一に、私たちは信じたときに救われます。第二に、この地上の生において信仰に留まり続ける中で、私たちは救われ続けています。そして第三に、主が再び来られるとき、あるいは主が私たちを御もとに迎えてくださるとき、私たちは最終的に救われるのです。したがって、信じる者について「すでに救われた」と言うことは正しく(例：[ローマ 8 章 24 節](#); [エペソ 2 章 8 節](#); [第二テモテ 1 章 9 節](#))、「今なお救われつつある」と言うことも正しく(例：[ルカ 13 章 22 節](#) ~; [第一コリント 1 章 18 節](#), [15 章 2 節](#); [第二コリント 2 章 15 節](#))、さらに「やがて救われる」と言うこともまた正しいのです(例：[マタイ 10 章 22 節](#), [24 章 13 節](#); [ローマ 5 章 9-10 節](#); [第一コリント 3 章 15 節](#); [第一ペテロ 1 章 5 節](#), [1 章 8-9 節](#), [2 章 2 節](#); [ヘブル 9 章 28 節](#))。

(3) ほむべきかな、わたしたちの主イエス・キリストの父なる神。神は、その豊かなあわれみにより、イエス・キリストを死人の中からよみがえらせ、それにより、わたしたちを新たに生れさせて生ける望みをいだかせ、(4) あなたがたのために天にたくわえてある、朽ちず汚れず、しばむことのない資産を受け継ぐ者として下さったのである。(5) あなたがたは、終りの時に啓示さるべき**救にあずかる**ために、信仰により神の御力に守られているのである。(第一ペテロ 1 章 3-5 節)

第二章：御子の受肉の目的

IV. 節ごとの注解

三節(後半)-四節

しかし、この到来する救いは信じる者のためのものに限られています。すなわち、終わりまでイエス・キリストを信じ続ける者だけがその対象なのです。なぜなら、救われるのは信じる者**だけ**だからです。

彼を信じる者は、さばかれない。信じない者は、すでにさばかれている。神のひとり子の名を信じることをしないからである。(ヨハネ 3 章 18 節)

救いは、この地上の生において、かつて深く愛していた救い主を退けることによって、自らを永遠のいのちにふさわしくない者に見なすようになった人々に与えられるものではありません。これこそが、漂流と後退、さらには加速する霊的退行によって、当時のエルサレム教会の頭上に重く垂れ下がっていた深刻な危機だったのです。

(20)彼らが、主また救主なるイエス・キリストを知ることにより、この世の汚れからのがれた後、またそれに巻き込まれて征服されるならば、彼らの後の状態は初めよりも、もっと悪くなる。(21)義の道を心得ていながら、自分に授けられた聖なる戒めにそむくよりは、むしろ義の道を知らなかった方がよい。(22)ことわざに、「犬は自分の吐いた物に帰り、豚は洗われても、また、どろの中にくろがって行く」とあるが、彼らの身に起ったことは、そのとおりである。(第二ペテロ 2 章 20-22 節)

三節(後半) - 四節

(3b)……この[救い]は、主によって初めに語られ、[主を個人的に]聞いた者たち(すなわち、教会初期・紀元 30 年代後半に主を直接聞いた前の世代)によって伝えられ、そして(紀元 50 年代後半の教会の)私たちに対しても、(4)神ご自身が、しるしと不思議とさまざまな力ある業、そして御心に従った聖霊の分配(すなわち、霊の賜物)によってあかしされたので、確かなものとされたのである。³(ヘブル 2 章 3 節後半—4 節)

上の翻訳については、簡単な検討が必要です。多くの翻訳は、この箇所を完全に誤解し、その結果として危険な誤訳をしています。たとえば、次のような訳です。

³ 翻訳に関する注釈については、[『ヘブル書:序論』第 1.4 節「ヘブル書 2 章 3 節に対する異論」](#)を参照のこと。

第二章：御子の受肉の目的

IV. 節ごとの注解

三節(後半)-四節

…この救いは、初めに主によって語られ、それを聞いた人たちによって、私たちに確証されました。(ヘブル 2 章 3 節後半/NKJV)

しかし、実際のギリシヤ語の語順に即して適切に組み替えると、次のようになります。

…この救いは、最初に主によって[主から／主を通して]語られ、それを聞いた人々によって[証言され]、そして神の奇跡的な証言によって——[すなわち、四節にあるとおり、パウロをはじめとする者たちの権威を確立するためのわざによって——]私たちの時代において確認されたのです。(ヘブル 2 章 3 節後半)

事実、ギリシヤ語本文は、主が語られたことと、使徒たちがそれを聞いたこととの間に区切りを置いていません。すなわち、「最初に」起こったのは、彼らが主の語られたことを証言したという出来事なのです。これは極めて重要な点です。なぜなら、ここで問題となっているのは単なる伝承ではないからです。救いの教えは、天使や使徒によって媒介されたものではなく、キリストご自身によって直接伝えられたものなのです(ちょうど[ヘブル 8 章 6 節](#), [9 章 15 節](#), [12 章 24 節](#)において、キリストが「仲介者」として描かれるのと同様です)。さらに第二に、救いのメッセージは「私たちの時代において」、単に他の使徒たちの証言によってだけではなく、神が行われた奇跡によって確認されました。これらの奇跡は、パウロをはじめとする使徒たちの権威を確立するために与えられたものです。このように、ギリシヤ語本文によれば、語り手はイエス・キリストご自身であり、前の世代の使徒たちは、伝承としてではなく、直接主から受けた救いの言葉を証言した聞き手なのです。そして福音の「確認」は、「それを聞いた人々」によってなされたのではなく、神が用いられた奇跡的なしるしによって、特にパウロの働きを通して、パウロの時代においてなされたのです([使徒行伝 13 章 10-12 節](#), [14 章 8-10 節](#), [16 章 18 節](#), [16 章 25-26 節](#), [19 章 11-13 節](#), [20 章 9-12 節](#); [第一コリント 2 章 4 節](#); [第二コリント 12 章 12 節](#); [ローマ 15 章 18-19 節](#)参照)。

どの救いか：

これまで前の節で語られてきた救いについてのすべての事柄は、エルサレム教会の信者たちにとって決して「目新しい話」であったはずはありません。むしろ、その正反対です。御子はみことばであり、御父のメッセージであり、また使者そのものです。そしてその方は、これらの信者たちが実際に歩いていた同じ通りを歩き、彼らがなお留まっているその神殿の境内で教えておられました——まるで、御子がすでに来られ、彼らの罪のために死なれたことなど、なかったかのように振る舞っているかのようです。しか

第二章：御子の受肉の目的

IV. 節ごとの注解

三節(後半)-四節

し、それだけではありません。教会時代最初のペンテコステ、すなわち聖霊が集まっていた信者たちに奇跡的に注がれた出来事も、エルサレムで起こりました。さらに、主ご自身によって任命され、聖霊によって特別な賜物と力を与えられた使徒たちが、この「これほど大きな救い」、この「良き知らせ」、この「福音」の最初の教師たちであったのです。

この真理は、どこかの奥の部屋に隠されていたのではありません。第一世代の信者たちによって公に宣べ伝えられ、多くのしるしと不思議によって証しされ、最初の殉教者たちの血によって刻まれ、そしてこの時点ですでにローマ世界の半分にまで広がっていました。異邦人たちが信仰に入れられたという知らせも、すでに数十年にわたって定期的にエルサレムへと届けられていたのです。この信仰の言葉、この福音、この救いのメッセージは、すでにこの時点で文書としても記され、新約聖書の半分以上が地中海世界の諸教会に行き渡っていました。そして、すべての靈感された書が最初の「母なる教会」に備えられていなかったと考えることは、ほとんど想像しがたいことです。この教会にいた個々の信者たちは、伝統や空想を選び取ることで事実上、神の御子と、御子の血によって与えられた「かくも偉大な救い」とを故意にないがしろにしています。そのような怠慢について、彼らはおそらく、それ以前にもそれ以後にも存在したいかなる信者の集団よりも、弁解の余地が少なかつたように思われます。

(10) **この救い**については、あなたがたに対する恵みのことを**預言した**預言者たちも、たずね求め、かつ、つぶさに調べた。(11)彼らは、自分たちのうちにいますキリストの霊が、**キリストの苦難とそれに続く栄光とを、あらかじめあかした**時、それは、いつの時、どんな場合をさしたのかを、調べたのである。(12)そして、それらについて調べたのは、自分たちのためではなくて、あなたがたのための奉仕であることを示された。それらの事は、天からつかわされた聖霊に感じて**福音をあな****あなたがたに宣べ伝えた人々によって、**今や、あなたがたに告げ知らされたのであるが、これは、御使たちも、うかがい見たいと願っている事である。(第一ペテロ 1 章 10-12 節)

私たちはすでに上の箇所において、ペテロが初期のこれらの日々を第三者の視点から描写していることを見ました。しかし、明らかに彼自身が「福音をあなあなたがたに宣べ伝えた人々」の一人であったのです。したがって、同様の言い回しが本書簡の文脈において、パウロによって用いられているからといって(すなわち、「主から、それを聞いた者たちによって最初に語られた」という表現ゆえに)、ヘブル人への手紙の著者をパ

第二章：御子の受肉の目的

IV. 節ごとの注解

三節(後半)-四節

ウロではないとして退ける根拠は存在しません。⁴ ペテロが上で述べているとおり、この「これほど大きな救い」は旧約聖書においても預言されており、十字架以前の信者たちにも、また十字架以後の信者たちにも知られていました。ただし、御子が世に来られ、実際に私たちの罪のために死なれる以前においては、それは影の中に包まれていたのです。ところが、御子がそれを成し遂げられた今、エルサレムの信者たちは、特別な特権によって独自に啓示され、証明され、示され、教えられてきた救いの本質的真理を堅く保たなかったことにより、霊的な不正について二重の責任を負う立場に置かれていました。この「これほど大きな救い」についての真理——私たち信者が何よりも大切にすべき真理——は、使徒たちによる特別啓示として、**まず**エルサレムの信者たちに与えられ、その後イスラエル全体へ、さらに異邦人へと伝えられていったのです。

(46) 言われた、「こう、しるしてある。キリストは苦しみを受けて、三日目に死人の中からよみがえる。(47)そして、その名によって罪のゆるしを得させる悔改めが、**エルサレムからはじまって**、もろもろの国民に宣べ伝えられる。(ルカ 24 章 46-47 節)

ただ、聖霊があなたがたにくだる時、あなたがたは力を受けて、**エルサレム**、ユダヤとサマリヤの全土、さらに地のはてまで、わたしの証人となるであろう」。(使徒行伝 1 章 8 節)

さらに御父は、「しるしと不思議、またさまざまな力の働き、そして御自分の御心に従って分け与えられた聖霊の賜物」によって、使徒たちの語った言葉の真実性を証明されました。使徒行伝は、まさにそのような出来事に満ちています。

(37) もしわたしが父のわざを行わないとすれば、わたしを信じなくてもよい。(38)しかし、もし行っているなら、たとえわたしを信じなくても、**わたしのわざを信じるがよい**。そうすれば、父がわたしにおり、また、わたしが父におることを知って悟るであろう」。(ヨハネ 10 章 37-38 節)

パウロのこの注意喚起を聞いたとき、エルサレムの個々の信者たちが、自分たちが実際に目を見た多くの出来事、あるいは年長の信者たちから間接的に聞いてきた数々の証しを思い起こし、それらを助けとして、少なくとも信仰を再び燃え立たせるようになることが望まれていました。というのも、これらの奇跡の本来の目的は、弱くなった

⁴ そしてパウロの場合、彼はもちろん最初の福音宣教者の一人ではなく、当初はむしろ真理に反対する者でありました(『ヘブル書:序論』第 1.4 節「[ヘブル書 2 章 3 節に対する異論](#)」を参照してください)。

第二章：御子の受肉の目的

IV. 節ごとの注解

三節(後半)-四節

信仰を支えることにあったからです。実際、エルサレム教会の霊的漂流の中心にあったのは「忘却」であったように思われますが、これは決して珍しい現象ではありません。

(1) ああ、愚かなガラテヤ人よ。だれがあなたがたを惑わしたのか。あなたがたの目の前で、十字架につけられたイエス・キリストが、はっきりと描き出されたではないか。(2) わたしはただこの一つのことを知りたい。あなたがたは律法の行いによって御霊を受けたのか、それとも聞いて信じることによって受けたのか。(3) あなたがたはそんなにも愚かなのか。御霊によって始まったのに、今は肉によって完成しようとしているのか。(ガラテヤ 3 章 1-3 節)

しかし、ガラテヤやエルサレムの信者たちの目にあるちりを、私たちがあまりにも激しく非難する前に、今日の目に見える教会に属する大多数の信者たちの目にある梁について考える必要があります。もし私たち自身はその例外であるならば、すべての栄光は神に帰されるべきです。しかしパウロが同様の文脈で語っているとおりです。「高ぶった思いをいだかないで、むしろ恐れなさい。もし神が元木の枝を惜しまなかったとすれば、あなたを惜しむようなことはないであろう。」([ローマ 11 章 20-21 節](#))。私たちは信仰によって立っていますが([ローマ 11 章 20 節](#); [第二コリント 1 章 24 節](#))、それはその信仰を保ち続ける限りにおいてです。

(11) これらの事が彼らに起ったのは、他に対する警告としてであって、それが書かれたのは、**世の終りに臨んでいるわたしたち**に対する訓戒のためである。(12) だから、立っていると思う者は、倒れないように気をつけるがよい。(第一コリント 10 章 11-12 節)

一世紀のこれらのユダヤ人信者たちにとって、残された時間はわずかでした。エルサレムがローマ軍に包囲され、やがて完全に滅ぼされるまで、ほとんど十年も残されていなかったのです。しかし、霊的な意味において、この状況は、今日「世の終わりに臨んでいる」私たち、すなわち「世の終わりが来ている」者たちと、それほど違うでしょうか([第一コリント 10 章 11 節](#))。私たちにとっても、同様に時間は残されていません。この書簡がエルサレム教会にもたらしたどのような前向きな応答があったとしても、それが都と国を滅亡と荒廃から救うには不十分であったことは確かです。その破壊は預言されており([ルカ 19 章 41-44 節](#))、また神殿というつまずきの石を取り除くために必要であったのかもしれませんが。というのも、それにもかかわらず、今日に至るまで、多くの目に見える教会が、律法とその付随物(あるいは、ローマ・カトリックのような形で歪められた律法主義)と致命的な結びつきを保ち続けているからです。

第二章：御子の受肉の目的

IV. 節ごとの注解

五節

同様に、艱難期も定められた時に必ず到来します(問題はその正確な時期のみです)。ラオデキヤ時代に生きる私たち信者のうち、真理に対して前向きである者たちは、どれほど信仰や献身が大きくとも、その到来を防ぐことはできませんし、どの国であれ、自分たちの国を救うこともできません。しかし、私たちは、愛する救い主を栄光ある形であがめる生き方をする機会が与えられていることについては、絶対的な確信を持つことができます。そして、それが神の御心ならば、自分自身や愛する者たちの命が守られる結果につながることもあるでしょう。エルサレム教会の中で、この警告の書簡を受け取った一部の人々に、そのような結果がもたらされたかどうかは分かりません。しかし、この勧告に耳を傾けなかった者たちの多くが、包囲戦の中で滅びたであろうことは確かです。それ以上に恐ろしいこと——それははるかに深刻ですが——は、これらの切実な警告を完全に無視し、肉体の死に先立って信仰そのものを失ってしまうことでした。

これらの出来事は、わたしたちに対する警告であって、彼らが悪をむさぼったように、わたしたちも悪をむさぼることのないためなのである。(第一コリント 10 章 6 節)

五節

というのも、神は、来たるべき世界を御使いたちに従属させたのではないからです(ヘブル 2 章 5 節/NKJV)。

というのも：

ここで用いられているギリシヤ語の接続詞 gar(ガル、「というのも」)は、これから述べられることが、すでに述べられた事柄の説明であることを示しています。すなわち、パウロがこれまで批判してきた——すなわち、グノーシス派の人達が天使に心を奪われ、これらの「奉仕する霊たち」を、私たちの主であり主人であられるイエス・キリスト、すなわち諸々の王の王、諸々の主の主よりも高く置くという、まったく不適切な姿勢——その全体を受けての説明であるということです。パウロは、これからの章でエルサレム教会が再び陥っていた律法主義と死んだ形式主義の誤りを詳細に論じていくこととなりますが、その前にまず、人間こそが神のご計画の中心であることを明確に示します。というのも、サタンの反逆によって天使界で始まった戦いは、神の御心により人間を通して解決されることになっているからです。そして、何よりも、ただ一人完全な人間であ

第二章：御子の受肉の目的

IV. 節ごとの注解

五節

る主イエス・キリストを通して、十字架において勝利が確定し、モーセの律法が影として示していた真理が成就したのです。

来たるべき世界：

この語句(「来たるべき世界」)は、永遠を指しているのではなく、メシヤの千年王国を指しているのです。ここで「世界」と訳されているギリシヤ語 oikoumenē(オイクメネ)は、英語に音写される“ecumene(エキュメネ)”と同様に、常に「人の住む世界(居住された世界)」という意味を持ちます。(マタイ 24 章 14 節; ルカ 2 章 1 節, 4 章 5 節, 21 章 26 節; 使徒行伝 11 章 28 節, 17 章 6 節, 17 章 31 節, 19 章 27 節, 24 章 5 節; ローマ 10 章 18 節; ヘブル 1 章 6 節; 黙示録 3 章 10 節, 12 章 9 節, 16 章 14 節)。この語(oikoumenē)に、mello(メッロ) の分詞(これは、始まろうとする行為を表す標準的な動詞です)を組み合わせることによって、ここで述べられている「世界」は現在の世界ではなく、将来の世界、すなわち、私たちの主イエス・キリストが再臨される際に始まる、祝福に満ちた千年の統治を指すことが示されるのです。この千年王国については、たとえば次のように詩篇に記されています。

(6)「わたしはわが王を聖なる山シオンに立てた」と。(7)わたしは主の詔をのべよう。主はわたしに言われた、「おまえはわたしの子だ。きょう、わたしはおまえを生んだ。(8)わたしに求めよ、わたしはもろもろの国を嗣業としておまえに与え、地のはてまでもおまえの所有として与える。(9)おまえは鉄のつえをもって彼らを打ち破り、陶工の作る器物のように彼らを打ち砕くであろう」と。(10)それゆえ、もろもろの王よ、賢くあれ、地のつかささらよ、戒めをうけよ。(11)恐れをもって主に仕え、おののきをもって(12)その足に口づけせよ(すなわち、御子に敬意と忠誠を表しなさい)。さもないと主は怒って、あなたがたを[その不遜なふるまいのため]道で滅ぼされるであろう、その憤りがすみやかに燃えるからである。すべて主に寄り頼む者はさいわいである。(詩篇 2 篇 6-12 節)

なぜなら、キリストはあらゆる敵をその足もとに置く時までは、支配を続けることになっているからである。(第一コリント 15 章 25 節)

その口からは、諸国民を打つために、鋭いつるぎが出ていた。『彼は、鉄のつえをもって諸国民を治める』(詩篇 2 篇 9 節)。また、全能者なる神の激しい怒りの酒ぶねを踏む。(黙示録 19 章 15 節/NIV)

このように、千年王国とは、神がイスラエルに与えられた約束がメシヤによって成就

第二章：御子の受肉の目的

IV. 節ごとの注解

五節

する時代です。⁵ 神は、サタンが始めた戦いを天使ではなく人間を通して解決することをお定めになり、主イエスは天使ではなく「人」としてお生まれになり、私たちを罪から贖われました。十字架のゆえに、信じる私たちは義とされ、神の子とされ([ローマ 8 章 14 節](#); [ガラテヤ 4 章 6 節](#))、墮落した天使たちの座を一对一で置き換える存在となります。神は、この栄光に満ちたご計画を成就することによって、サタンに対する義なる裁きを示されると同時に、「神は不公平だ」と唱えるサタンの冒瀆的な主張も完全に論破されます。神は、私たち人類には—ご自身の愛する御子の霊的死という想像を絶する大きな代価をもって—和解の道を備えてくださいましたし、もし反逆した天使たちが和解を受け入れる意志を示していたなら、彼らにも同じ和解をお与えになったはずなのです。⁶

最初のアダムが悪魔の攻撃によって墮落してしまったのに対し、最後のアダムであるキリストは、十字架においてサタンに対する勝利を得られました。その結果、罪深い人類は贖われ、やがて来たる栄光の御国の到来が保証されたのです。主が再臨されるとき、第一のアダムが墮落によって失ってしまった地上支配は、最後のアダムが十字架によって取り戻されたことが明確に示され、サタンの支配には決定的な終止符が打たれます。さらに、その勝利は、完全なる王であるキリストの統治のもとで千年の間続く平和と繁栄の御国において、完全な形で実現します。この千年王国の完璧な環境と完全な王の統治は、神の恵み・憐れみ・愛・慈善がいかなるものかを全ての者に鮮明に示します。この真反対に対比するものとして、歴史上最も恐るべき時代——悪魔の子である反キリストが世界を支配する艱難期——があるのです。これら両者の対比を通して、神の御国と悪魔の殺人的で利己的な世界王国との違いが、誰の目にも明らかに示されることとなります。

万軍の主は言われる、彼らはわたしが手を下して事を行う日に、わたしの者となり、わたしの宝となる。また人が自分に仕える子をあわれむように、わたしは彼らをあわれむ。(マラキ書 3 章 17-18 節)。

復活した信者たちは、私たちの主の千年王国の統治に共にあずかることとなります([マタイ 25 章 19-23 節](#); [ルカ 22 章 28 節](#); [第一コリント 6 章 3 節](#); [ローマ 8 章 17 節](#); [第二テモテ 2 章 12 節](#); [黙示録 1 章 6 節](#), [2 章 26-27 節](#), [3 章 21 節](#), [20 章 4-6 節](#))。

⁵ 『[『イスラエルの再集結と粛清』](#)については、『[来たる艱難期 第 6 部](#)』[I.6](#)を参照(未翻訳)

⁶ これらの事柄については、『[サタンの反逆 \(Satanic Rebellion\)](#)』シリーズで詳しく扱われています。とくに SR 5:『[さばき・回復・そして置き換え](#)』(Judgment, Restoration, and Replacement)をご参照ください。

第二章：御子の受肉の目的

IV. 節ごとの注解

六-八節(前半)

一方、ついに諸国の荒野から再び集められたイスラエルは、大いなる王の座所となり、世界の歴史において、いかなる国にも授けられたことのない祝福を享受することになります⁷。この千年王国は、イエス・キリストの二つの来臨によって成し遂げられた二重の勝利に、神による力強い感嘆符を打つものとなります。すなわち、悪魔の子による直接統治のもとで起こる人類史上最悪の時代である艱難期と、神の御子ご自身による完全な統治のもとでの絶対的に最良の時代である千年王国とを、鮮やかに対比させるのです。その「来たるべき世界」におけるすべての祝福は、イエス・キリストに従うことを選んだ私たちのために取って置かれています。これに対して、当時も今も、そしてまもなく来たる艱難期においても、天使たちに従うことを選ぶ人々については、彼らが主と救い主を拒むことによって、実際には誰に仕えているのかについて、疑いの余地はまったくなくなります。

(8)次に悪魔は、イエスを非常に高い山に連れて行き、この世のすべての国々とその栄華とを見せて言った、(9)「もしあなたが、ひれ伏してわたしを拝むなら、これらのものを皆あなたにあげましょう」。(10)するとイエスは彼に言われた、「サタンよ、退け。『主なるあなたの神を拝し、ただ神にのみ仕えよ』(申命記 6 章 13 節)と書いてある」。(マタイ 4 章 8-10 節)

六節～八節(前半)

(6)ある箇所、ある人がこう証ししています。「人とは何ものなのでしょう。あなたがこれを心に留められるとは。人の子とはいったい何ものなのでしょう。あなたがこれを顧みてくださるとは。(7)あなたは、人を御使よりわずかの間低いものとし、これに栄光と誉れの冠をかぶらせ、(8)万物を彼の足の下に置かれました。」(詩篇 8 篇 4-6 節) (ヘブル 2 章 6～8 節前半/新改訳IV)

詩篇 8 章 4～6 節の引用について:

詩篇 8 篇は、人間が神の創造された世界の管理者として、神の御心に従ってその中で奉仕するという、人類全体の本来の位置づけを描いています。したがって、この詩篇がヘブル書 2 章において、パウロによって引用されていることから分かるのは、この詩篇が究極的には「最後のアダム」である私たちの主、救い主イエス・キリストのうちに預言的成就を見いだすということです。

⁷ 来たる艱難期第 6 部 の III.『イエス・キリストの千年王国統治』を参照してください。

第二章：御子の受肉の目的

IV. 節ごとの注解

六-八節(前半)

それにもかかわらず、アダムからモーセに至るまで、死は支配していた。アダムの違反と同じ種類の罪を犯さなかった者たちに対してさえもである。アダムは、やがて来られる方——すなわちイエス・キリスト、「最後のアダム」——の型なのである。(ローマ 5 章 14 節/NKJV)

アダムにあってすべての人が死んでいるのと同じように、キリストにあってすべての人が生かされるのである。(第一コリント 15 章 22 節)

聖書に「最初の人アダムは生きたものとなった」と書いてあるとおりである。しかし最後のアダムは命を与える霊となった。(第一コリント 15 章 45 節)

[ヘブル 2 章 6 節](#)に「ある人が」と記されていますが、この詩編 8 篇の作者はもちろんダビデです。パウロがこの表現を用いて引用を導入しているのは、無知によるものではなく、読者を引き込むためであり、この引用を予期させ、その作者が誰で、引用がどこから来ているのかを自分で見抜かせるためなのです。この引用が少しも「謎解き」ではないという事実は、彼の読者がこれをダビデの詩編として即座に認識できたという自負を、一瞬にして、パウロが何をしているのかの気づきへと変えたことでしょう。すなわち、「私があなたがたに語っていることは、聖書を知っている者にとってはあまりにも明らかなことなのです。あなたがたが今この箇所を思い出しているように、以前にも思い出すべきでした」というわけです。⁸

(11)このことについては、言いたいことがたくさんあるが、あなたがたの耳が鈍くなっているので、それを説き明かすことはむずかしい。(12)あなたがたは、久しい以前からすでに[これらの事柄を教えることができる]教師となっているはずなのに、もう一度神の言の初歩を、人から手ほどきしてもらわねばならない始末である。あなたがたは堅い食物ではなく、乳を必要としている[幼子に戻ってしまっ

⁸ この箇所は、KJV(欽定訳)が正しく、NIV や ESV などの近代訳(これらはより多く、より優れたギリシヤ語写本にアクセスしていたにもかかわらず)が誤っている、という非常に稀な例のひとつを成しています。詩編 8 篇 6 節から始まる箇所<7 節の終り>にある「あなたは彼をあなたの御手のわざの上に置かれました」(KJV の “and didst set him over the works of thy hands”)という文は、ヘブル書の当該箇所にも存在しているのですが、ネストレ=アーランド版その他の批判版ギリシヤ語新約聖書に従う多くの近代訳では、この句が誤って省かれてしまっています。しかし、この文言は、ギリシヤ語新約聖書写本の中でも最良と評価される二つの写本——すなわち[X]アレフ(シナイ写本)と[B]パチカン写本——にしっかりと存在しており、したがってヘブル 2 章 7 節の本文や翻訳には当然ながら含まれるべきものです。<口語訳、新改訳IV、新共同訳にも含まれていません>

第二章：御子の受肉の目的

IV. 節ごとの注解

六-八節(前半)

ている]。(13)すべて乳を飲んでいる者は、幼な子なのだから、義の言葉(すなわち、どのように正しく生きるべきかという教え)を味わうことができない。(14)しかし、堅い[靈的]食物は、善悪を見わける感覚を実際に働かせて訓練された[靈的]成人の取るべきものである。(ヘブル 5 章 11-14 節)

これに反して、完全な自由の律法(すなわち、聖書 — 心を映し出す完全な鏡)を一心に見つめてたゆまない人は、[ただ]聞いて忘れてしまう人ではなくて、実際に行う人である。こういう人は、その行いによって(すなわち、学び信じた真理に従って歩むことにおいて)祝福される。(ヤコブ書 1 章 25 節)

ギリシヤ文学の読者であれば、「環状構造(ring composition)」という語に馴染みがあるでしょう。これは、多くの古代著者がある主題や論点に立ち返り、いわばその周りに「輪を描く」ようにして、強調・高揚・反復を行うという手法を指しています。パウロは、この書簡の冒頭から同様の手法を用いており、ヘブル書の終わりに至るまで、程度の差こそあれ継続していきます。彼はまず、救い主としてのご自身の人性において、また来たるべき王として、御子が天使たちにまさっておられることを語ることから始めました。次に 2 章の冒頭では、パウロは視点を私たち——キリストによって救われた人間——へと移し、これらの者たちこそ、主にふさわしい敬意を払い、主に対する信仰によって得た「この偉大な救い」をしっかりと覚えているべきだと促します。そして今、私たちが検討している引用箇所において、彼は一見すると人類一般について語っているように見える聖句を引用することにより、主が私たちと信仰によって結ばれておられることに焦点を当てています。しかしパウロは、この箇所が実は完全にメシヤ的であり、御子が私たちを救うために真の人性を取られたという事実、そしてその必要性を語っていることを示すのです——そしてそれは天使たちではなく、私たちのためなのです(ゆえに私たちは、主にあるゆえに天使にまさる立場を共有しているということです)。

詩篇第 8 篇は、人間が神の驚くべき御業と比べれば、また天使たち(詩篇 8 篇 5 節)と比べても、いかに小さく取るに足らない存在であるにもかかわらず、神が人間を心にかけて、顧み、祝福してくださっていることを称える、ダビデによる賛歌です。それにもかかわらず——いや、まさにそのような取るに足らない存在であるにもかかわらず——神は人間を、この地とそのすべてのものの支配者としてお立てになりました。これは、私たちが創造主に対して最高の賛美をささげてしかるべき理由です(詩篇 8 篇 9 節; 同 1-2 節参照)。人間が「天使よりも低く」造られたのは(詩篇 8 篇 5 節)、神とサタンとの間に生じた葛藤を解決するためでした。第一には、悪魔とその追従者たちに代わる者として人間が選ばれたからであり、第二には、アダムとエバが墮落し、その結果

第二章：御子の受肉の目的

IV. 節ごとの注解

六-八節(前半)

としてすべての子孫が墮落へと巻き込まれた後、神がご自身から離反したすべての者に対して、和解と救いの道を——それを受け入れる意志のある者すべてに対して——提供しうる憐れみを示すためであり、そのために神は、ご自身にとって可能な限り最高の代価、すなわち御子の霊的死を支払われたのです。

墮落の結果として、人類は創造の際に与えられた主権の大部分を失ってしまい([第二コリント 4 章 4 節](#); [第一ヨハネ 5 章 19 節](#)参照)、最初の人間を罪へと誘惑した悪しき者にそれを譲り渡しました([ルカ 4 章 6 節](#); [ヨハネ 12 章 31 節](#), [14 章 30 節](#), [16 章 11 節](#))。しかし、私たちの世界に対する権威が、完全に失われたわけではありませんでした([エペソ 2 章 2 節](#)参照)⁹。そして、イエス・キリストの勝利によって、その権威は原理的にはすでに取り戻されており——そしてほどなく、エデンで想定されていた以上の度合いで、実際に取り戻されることとなります([黙示録 20 章 1-4 節](#))。イエス・キリストは、悪の勢力との戦いにおいて、十字架で勝利を収める勝利者であることが、常に定められていました。また、天地創造を最初に開始された時から、一度として変わるものなかつた神の完全なご計画において、イエスは常に「最後のアダム」、すなわち 万軍の王の王、主の主として予定されておられました。創造も、人類史も、そしてすべての事柄が最終的に永遠の祝福のうちに解決されるその全体——復活、千年王国、そして永遠状態の到来——は、まさに**このお方のために**定められていたのです。

わたしに求めよ、わたしはもろもろの国を嗣業としておまえに与え、地のはてまでもおまえの所有として与える。(詩篇 2 篇 8 節)

したがって、パウロが詩篇第 8 篇を引用することによって、([ヘブル 2 章 1-3 節](#)にある)救われた私たちと救い主との間に、強力な結びつきが示されます。すなわち、「万物」をその足もとに置かれた方——そして今後も置かれる方、また初めからそう定められておられた方——という、原型的な人間(対型 archetype)であられるお方に、父が万物を従わせておられるという事実によってです。これは、歴史の最終章が書き終わられるその時まで続くのです([第一コリント 15 章 27-28 節](#))。さらにパウロは、この結びつきを、人間／人類および預言的称号としての「人の子」とが「御使いたちよりもしばらくの間低くされた」と描写されている文脈の中で示しています([詩篇 8 章 5 節](#); [ヘブル 2 章 7 節](#))。パウロの意図は次の事柄を明らかにすることにあります。なぜ御子が人間にならなければならなかったのか。なぜ初臨で栄光をおびずに来られなければならなかったのか。なぜそれが私たちを救うために絶対に必要であったのか。そして、御子に

⁹ [聖書の基礎 2A「天使論」II.6.「サタンの世界支配の限界」](#)および、[II.6.5.「サタンの世界支配に対する制限」](#)参照。

第二章：御子の受肉の目的

IV. 節ごとの注解

六-八節(前半)

おける(力の面での)天使の優位性が一時的であった理由などです(ヘブル1章で述べられたように、復活・昇天後のキリストがあらゆる点で天使より優れておられることは否定の余地がありません)。さらに重要なのは、この「優位性の転換」が、私たちにも復活の時に起こるということです。というのも、「来たらんとする世界(=来るべき世)」を支配させる相手として神が従わせたのは 天使ではなく([ヘブル2章5節](#))、真の人間である『人の子』だからです。そして、私たちはこの方と結ばれているゆえに、同じくその統治にあずかる者となるのです。そして、私たちがその方と結ばれていることによって、「その方が来られる時にその方のものとなる」([第一コリント15章25節](#))ことは、私たちもまた同様であり、すなわち、私たちイエス・キリストを信じる者は、自らの復活の時から、そして主の千年王国における支配の全期間を通して、その権威を共にする者となるのです。(マタイ25章19-23節; [ルカ22章28節](#); [第一コリント6章3節](#); [ローマ8章17節](#); [第二テモテ2章12節](#); [黙示録1章6節](#), [2章26-27節](#), [3章21節](#), [20章4-6節](#))。

信仰の導き手であり、またその完成者であるイエス(すなわち「アルファでありオメガである方」)を仰ぎ見つつ、走ろうではないか。彼は、**自分の前におかれている喜びのゆえに、恥をもいとわないで十字架を忍び、神の御座の右に座するに至ったのである。**(ヘブル12章2節)

私たち信者は、キリストの喜びであり、その心の楽しみであり、その体であり、その花嫁です。主は私たちをこれほどまでに愛してくださったので、主ご自身が栄光そのもの([ヨハネ1章14節](#); [ヘブル1章3節](#); [第一ヨハネ1章5節](#))、すなわち世の光([ヨハネ1章4-9節](#), [8章12節](#), [9章5節](#))、永遠の神([ヨハネ1章18節](#); [ローマ9章5節](#); [テトス2章13節](#); [ヘブル1章8節](#); [第一ヨハネ5章20節](#))であられるにもかかわらず、私たちを救うために人間となられたのです。そして御父は、私たちをこれほどまでに愛してくださったので、永遠の祝福を与えるために、ただひとりの愛する御子を犠牲にされ、私たちの罪を取り除くために、私たちに代わってその御子を裁かれました。——それこそが、私たちが救われ得る唯一の方法だったのです。

神はそのひとり子を賜ったほどに、この世を愛して下さった。それは御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである。(ヨハネ3章16節)

まことに、私たちがどれほど小さく取るに足りない者であったとしても、天の御父が「私たちを顧みておられる」ことは確かであり、これは本当に驚くべきことです。私たちへの御配慮の、これ以上に大いなる証拠はありません——すなわち、御父が御子をお

第二章：御子の受肉の目的

IV. 節ごとの注解

六-八節(前半)

与えになり、永遠に神の子とされるために、私たちの身代わりとして裁かれることを許されたという事実こそが、その証拠です。死と闇と墓、そして火の湖から私たちを救い出すために、私たちの尊い救い主はご自身の血によって贖われましたが、その御業によって、墮落の時に大きく失われたこの世界の統治権も、私たちのために取り戻してくださいました。しかも、私たちが再びこの世界を統べ治める時は、今や非常に近づいています(ローマ 8 章 19-23 節)。その時、私たちは一つの教会として、すなわち神の御子・人の子なる方の花嫁としてよみがえり、この世界を造られ、またこの世界がそのために造られた御方と共に立ち、永遠にわたって万物を治める共同統治者として加えられるのです。

わたしたちを、その父なる神のために、御国の民とし、祭司として下さったかに、世々限りなく栄光と権力ががあるように、アマメン。(黙示録 1 章 6 節)

(26)勝利を得る者、わたしのわざを最後まで持ち続ける者には、諸国民を支配する権威を授ける。(27)彼は鉄のつえをもって、ちょうど土の器を砕くように、彼らを治めるであろう。それは、わたし自身が父から権威を受けて治めるのと同様である。(28)わたしはまた、彼に明けの明星を与える。(黙示録 2 章 26-28 節)

勝利を得る者には、わたしと共にわたしの座につかせよう。それはちょうど、わたしが勝利を得てわたしの父と共にその御座についていたのと同様である。(黙示録 3 章 21 節)

(9)彼らは新しい歌を歌って言った、「あなたこそは、その巻物を受けとり、封印を解くにふさわしいかたであります。あなたはほふられ、その血によって、神のために、あらゆる部族、国語、民族、国民の中から人々をあがない、(10)わたしたちの神のために、彼らを御国の民とし、祭司となさいました。彼らは地上を支配するに至るでしょう」。(黙示録 5 章 9-10 節)

第七の御使が、ラッパを吹き鳴らした。すると、大きな声々が天に起って言った、「この世の国は、われらの主とそのキリストとの国となった。主は世々限りなく支配なさるであろう」。(黙示録 11 章 15 節)

第二章：御子の受肉の目的

IV. 節ごとの注解

八節(後半)

また見ていると、かず多くの座があり、その上に人々がすわっていた。そして、彼らにさばきの権が与えられていた。また、イエスのあかしをし神の言を伝えたために首を切られた人々の霊がそこにおり、また、獣をもその像をも拝まず、その刻印を額や手に受けることをしなかった人々がいた。彼らは生きかえって、キリストと共に千年の間、支配した。(それ以外の死人は、千年の期間が終るまで生きかえらなかつた。)これが第一の復活である。この第一の復活にあずかる者は、さいわいな者であり、また聖なる者である。この人たちに対しては、第二の死はなんの力もない。彼らは神とキリストとの祭司となり、キリストと共に千年の間、支配する。(黙示録 20 章 4-6 節)

八節(後半)

「万物を彼に服従させて下さった」という以上、服従しないものは、何ひとつ残されていないはずである。しかし、今もなお万物が彼に服従している事実を、わたしたちは見ていない。(ヘブル 2 章 8 節後半)

服従しないものは、何ひとつ残されていない:

イエス・キリストは「最後のアダム」([第一コリント 15 章 45 節](#); [ローマ 5 章 14 節](#), [15 節](#)参照)であり、もともとアダムに委ねられていた人類本来の目的([創世記 1 章 26-30 節](#); [ルカ 3 章 38 節](#)参照)を成就される、典型的・原型的な神の御子です。本節においてパウロは詩篇 8 篇を、まず第一に、そして何よりも、(本来アダムにも適用はされるものの)初めのアダムにではなく、また(少なくとも部分的には私たち全人類にも適用されるもの)人類全体にではなく、このアダムが解決すべく創造された闘争において勝利を得られた「そのお方」に関するものとして解釈しています。勝利者として、キリストは人類のために世界の支配権を取り戻されました([詩篇 2 篇 8 節](#); [ヨハネ 19 章 28-30 節](#); [コロサイ 2 章 15 節](#))。そして、この回復された主権こそが、私たちの文脈の節でパウロが述べているものなのです。すなわち、父なる神は、キリストが十字架で勝利されたことへの報いとして、人としてのキリストを世界全体の正式な支配者としてお立てになったのであり、キリストが昇天において栄光のうちに御父の御前に現れられた際、天においても地においても、私たちの「万物の王」「主の主」であるお方に完全な主権が与えられていないものは一つもなかつたのです。

(20)この[力]を、神(すなわち御父)はキリストのうちに働かせて、キリストを死人の中からよみがえらせ、天上の[領域]において御自分の右に着座させられま

第二章：御子の受肉の目的

IV. 節ごとの注解

八節(後半)

した。(21)すべての支配や権威、力、主権、また名づけられるいかなる名の上にも一この世だけでなく、来たるべき世においても一はるかに上に置かれてです。(22)そして、神(すなわち御父)は、**すべてのものを**キリストの足の下に**従わせ**、キリストを教会のために万物の上に立つかしらとしてお与えになりました。(23)この教会はキリストのからだであり、すべてをあらゆる仕方で満たす方の満ち満ちているところです。(エペソ 1 章 20-23 節/NKJV 直訳)

この「**すべてのものを従わせる**(subordination of all things)」には、もちろん、教会および未救済の人類だけでなく、選ばれた天使と墮落した天使をも含みます。したがって、パウロが我々の文脈で引用し、御霊によって解釈した詩篇第 8 篇は、人類の地上における支配権が、人の子、すなわち神の御子の新たな摂政のもとで回復されることを予告しているだけでなく、その委任を天と地の「すべてのもの」へと拡大し、イエスがすべてのもの、すなわち天使にも人間にも主であられることを、主が私たちすべての者のために獲得された勝利によって、改めて示しているのです。これこそが、私たちがその成就を息をのんで待ち望んでいる約束なのです。

まだ私たちは「万物が彼に服従している」事実を見ていない：

(1)主はわが主に言われる、「わたしがあなたのもろもろの敵をあなたの足台とするまで、わたしの右に座せよ」と。(2)主はあなたの力あるつえをシオンから出される。あなたはもろもろの敵のなかで治めよ。(3)あなたの民は、あなたがその軍勢を聖なる山々に導く(すなわち勇ましい勝利)日に心から喜んでおのれをささげるであろう。あなたの若者は朝の胎から出る露のようにあなたに来るであろう(すなわち、新しく復活した軍勢)。(4)主は誓いを立てて、み心を変えられることはない、「あなたはメルキゼデクの位にしたがってとこしえに祭司である」。(5)主はあなたの右におられて、その怒りの日に王たちを打ち破られる。(6)主はもろもろの国のなかでさばきを行い、しかばねをもって満たし、広い地を治める首領たちを打ち破られる。(創世記 3 章 15 節を参照)(7)彼は道のほとりの川から飲んで飲み、それによって、そのこうべをあげるであろう。(詩篇 110 篇 1-7 節)

主は、上に引用されたメシヤについての詩篇が語っているとおり、いまや万物の主であり支配者でおられますが、「今もなお万物が彼に服従している事実を、わたしたちは見ていません」。私たちの救い主に原理的にはすでに属しているこの「立場上の従属」が、実際に行われるようにするには、艱難期の終わり、すなわち復活とハルマゲド

第二章：御子の受肉の目的

IV. 節ごとの注解

八節(後半)

ンの戦いの後になります—そこには、私たちキリストの教会も参加するのです。¹⁰ しかし、それは再臨までは起こりません。「その時」までご自身の正当な支配権を行使するのを控えるよう、父なる神から定められているのです。ちょうど、当時の人たちが「枝の主日 (Palm Sunday)」に、主を王として歓呼して迎えた際(マタイ 21 章 9 節, 15 節、マルコ 11 章 9-10 節、ルカ 19 章 37-38 節、ヨハネ 12 章 13 節)に、栄冠の前に十字架がなければならないという原則をことごとく誤解し、そのすぐ後に「十字架につけろ」と叫んだように、<パウロが書簡を送る当時の>エルサレム教会もまた、同じように墮落してしまっていたように見受けられます—次に引用される反逆そのものにまで至ってはいなかったにせよ、危険なほど近いところまで来てしまっていたのです。

(3) まず次のことを知るべきである。終りの時に[真理を]あざける者たちが、あざけりながら出てきて、自分の欲情のままに生活し、(4)「主の再臨の約束はどうなったのか。先祖たちが眠りについてから、すべてのものは天地創造の初めからそのままであって、変ってはいない」と言うであろう。(第二ペテロ 3 章 3-4 節/NKJV)

主がご自身の千年王国を治めるために来られるその「再臨」は、私たちのために今なお待たされています。すなわちそれは、教会に「異邦人の数が満ちる」まで加えられ、その時まで待たれているということです(ローマ 11 章 25 節)。その結果、教会時代の私たち信徒すべて、すなわちユダヤ人も異邦人も含むキリストの花嫁全体が、一人も欠けることなく救われるためなのです(ヘブル 11 章 39-40 節)。しかし、この待つ必要のあるこの御国の到来の遅延は、彼ら信者が律法へと逆戻りすること(あるいは、グノーシス派がしていたように「他のこと」に走ること)の言い訳にはなりませんでした。

(11) 私たちは、あなたがた一人ひとりが最後まで同じ熱心さを示して、あなたがたの望んでいることが完全に実現するようになってほしいと願っています。

(12) 私たちは、あなたがたが怠惰になるのではなく、信仰と忍耐を通して約束されたものを受け継ぐ人たちに倣ってほしいのです。(ヘブル 6 章 11-12 節/NIV)

¹⁰ [「来たる艱難期第六部」.I.4.e.「この働きにおける復活した教会の参与」](#)を参照してください。

九節

ただ、「[しばらくの間]、御使たちよりも低い者となられた」イエスが、死の苦しみのゆえに、栄光とほまれとを冠として与えられたのを見る。それは、彼が神の恵みによって、すべての人のために死を味わわれるためであった。(ヘブル 2 章 9 節)

この書簡全体を通して、パウロはエルサレム教会が抱えていた二つの問題に向き合わなければなりません。一つは律法主義であり、もう一つはグノーシス主義です。彼は、あるときは律法主義の誤りに注意を向け、またあるときはグノーシス主義の誤りに注意を向けながら、それぞれを正す教えを語っています。これら二つの誤りは、これまで見てきたように互いに重なり合う部分があり、実際のところ、すべての誤った教えは同じ源から出て、同じ目的に向かっていきます。そのため、両者を同時に扱うことは決して不可能ではありませんでした。

第九節において、パウロはメシヤの勝利という中心的な事実を改めて思い起こさせています。メシヤは、私たちが罪から救うというはっきりした目的のために、人として来られた際にのみ、御使たちよりも「しばらくの間」低い立場に身を置かれました。これは第一の来臨の期間に限られたことであり、永続的なものではありません。この事実は、キリストがすべての御使いに完全にまさっておられるお方であることを明確に示すものであり、御使いを過度に重視していたグノーシス主義者たちの考えを正面から否定します。同時にこの教えは、律法主義者たちにも強い問いかけを行っています。というのも、メシヤの勝利と栄光は、律法の行いによって得られたものではなく、キリストご自身がへりくだり、十字架で命を捧げられたその犠牲によって成し遂げられたからです。十字架の業はすでに完了していました([ヨハネ 19 章 28 節から 30 節](#))。それにもかかわらず、彼らが再び律法に戻ろうとしていたことは、この十字架の意味を軽んじる行為にほかなりませんでした。

上に示した[ヘブル 2 章 9 節](#)の訳を、多くの一般的な翻訳と比べてみる読者であれば、この訳が、パウロ特有の「挿入的(括弧的)な語り方」を正しく反映していることに気づくでしょう。すなわちパウロは、強調したい主題をあえて後に回し、その間に説明を差し挟むという書き方をよく用います(「序論」¹¹で述べたとおりです)。この方法は、注意深く読めばギリシヤ語では十分にわかりますが、英語では同じようには伝わりにくい

¹¹ [パウロの『ヘブル人への手紙』書簡「序論」I.2 節「文体\(Style\)」](#)を参照してください。

第二章：御子の受肉の目的

IV. 節ごとの注解

九節

傾向があります。パウロがこの手法を用いている、もう一つの顕著な例は、ローマ人への手紙に見られます([ローマ 2 章 12 節から 16 節](#))。また、ローマ書とヘブル書には、もう一つ重要な共通点があります。それは、どちらの書簡においても、是正されるべき二つの異なる立場の人々を、バランスを取りながら論じなければならないという点です。ヘブル書においてパウロが向き合っているのは、グノーシス主義者と律法主義者ですが、ローマ書では、異邦人信者とユダヤ人信者という二つのグループが、それぞれ別の仕方では是正を必要としていました。そして、ローマ書がまず「無法(律法軽視)」への批判から始まり、ユダヤ的背景を持つ読者たちの同意を引き出したかと思うと、すぐに律法主義の行き過ぎを正す議論へと移行していくのと同じように、ヘブル書においても、パウロは最初にグノーシス的思想を厳しく批判します。しかし実際には、この書簡全体の主眼は、エルサレムの教会が、十字架と恵みから離れ、すでに時代遅れとなった儀式やモーセの律法へと後戻りしている問題に向けられています([ヘブル 8 章 13 節](#); [ヘブル 7 章 12 節](#)参照)。

両方の書簡において、パウロは、どちらの立場の人々にも決して「一息つく余地」を与えないよう、非常に注意深く書いています。どちらか一方を特に強調して論じている場面であっても、もう一方に由来する誤りや行き過ぎについても、機会あるごとに繰り返し指摘し続けています。ヘブル人への手紙第 2 章でも、まさに同じことが行われています。キリストが「**しばらくの間**、御使いたちよりも低くならなければならなかった」という事実は、逆に言えば、キリストが本来も今も御使いたちよりはるかに優れておられることを暗に示しており、これはグノーシス的な誤りに対する反論となっています。しかし、この章全体の中心的な主張は、神の御子が人の子とならなければならなかったこと、すなわち、永遠の神性に加えて真の人間性を身に帯びる必要があったという点にあります。それは、この世の罪を取り除くためでした。「**栄光とほまれとを冠として**」という表現は、神であり人であるイエス・キリストが、すでに勝利を成し遂げられたことを意味しています。これは、律法によって影のように予告されていた贖いが、すでに十字架によって完全に成就したことを明確に示しています。その結果、律法はもはやその役割を終え、時代遅れのものとなったのです。この点で、この箇所は律法主義に対する強い是正のメッセージにもなっています。

死ゆえに栄光とほまれとを冠として受けられたことについて:

カルバリの十字架において、私たちのために主が受けられた死は、肉体的な死ではなく、霊的な死でした。すなわち、十字架上の第六の時から第九の時までの三時間にわたる暗闇の間に、主は私たちすべての罪のために裁きを受けられたのです。肉体的な死は、その勝利が完全に成し遂げられた後、主自らのご意思によって御霊をお渡し

第二章：御子の受肉の目的

IV. 節ごとの注解

九節

になった時に起こりました(マタイ 27 章 50 節; マルコ 15 章 37 節; ルカ 23 章 46 節; ヨハネ 19 章 28 節から 30 節)¹²。聖書全体を通して、キリストの霊的な死は、その苦しみと直接的に同一視されています(詩篇 22 篇 15 節; イザヤ 53 章 11 節から 12 節など)。人類のあらゆる罪一つ一つについて裁きを受けるというその苦しみは、きわめて激しく、深刻なものであったことは明らかです(ヘブル 2 章 10-18 節; 13 章 12-13 節)。しかし、まさにその苦しみを通してこそ、イエスは全人類に対して救いへの道を開かれたのです(ローマ 5 章 15-21 節)。

この罪に対する偉大な勝利の結果として、私たちの主は「栄光と誉れをもって冠せられた」のです。ここで「冠せられる」と訳されているギリシヤ語は、「王冠」や「王権の冠」を意味する ディアデーマ(ギリシヤ語 δ ι α δ η μ α diadēma)ではありません(その種の冠も、たとえば黙示録 19 章 12 節に見られるように、主はすでに数多く受けておられます)。ここで用いられている語は、競技や試合における勝者、また政治的・軍事的英雄に与えられる報奨の冠である ステファノス(ギリシヤ語 σ τ ε φ α ν ο ς stephanos)です。私たちの主が、闇の中で私たちの罪のために裁かれたこと、そのことによる勝利のすべて、また真の人間性を取られたこと、反対と困難の中で耐え抜かれた苦難に満ちた生涯と奉仕、さらに十字架に至るまでくぐり抜けられた数々の試練、その一切は、完全に功績に満ちたものです。こうした主の功績ゆえに、主は父なる神から最も高い御名と、すべての栄光と誉れをお受けになりました。そして、私たちのために成し遂げられたこの功績ある死ゆえに、私たちは自分自身のいかなる功績とも無関係に、救いを賜ったのです。それはただ神の恵みによるものであり、完全に恵みに基づくものです(ローマ 3 章 24 節, 4 章 16 節, 5 章 2 節, 9 章 16 節, 11 章 6 節)。

(8)あなたがたの救われたのは、実に、[神の]恵みにより、[キリストに対する]信仰によるのである。それは、あなたがた自身から出たものではなく、神の賜物である。(9)決して行いによるのではない。それは、だれも誇ることがないためなのである。(エペソ 2 章 8-9 節)

ところが、本来なら感謝して当然であるはずなのに、エルサレム教会の相当数の人々は、律法に立ち返って自分の救いを成し遂げようとしたり(律法主義者)、目に見えない悪霊の勢力との戦いに関わることで「神を助けよう」としたりしていました(グノーシス主義者)。そのいずれも、信仰を通してのみ与えられる恵みに反する態度でした。

¹² 聖書の基礎第 4 部 A『キリストについての研究』II.5.「キリストの霊的な死」を参照してください。

第二章：御子の受肉の目的

IV. 節ごとの注解

九節

(15)しかし、恵みの賜物は罪過の場合とは異なっている。すなわち、もし[アダム]ひとりの罪過のために多くの人が死んだとすれば、まして、神の恵みと、ひとりの人イエス・キリストの恵みによる賜物とは、さらに豊かに多くの人々に満ちあふれたはずではないか。(16)かつ、この賜物は、ひとりの犯した罪の結果とは異なっている。なぜなら、[前者の神の]さばきの場合は、ひとりの罪過から、[全てを]罪に定めることになったが、[後の]恵みの場合には、多くの人の罪過からく罪過にもかかわらず/NKJV>、[一人の犠牲によって、全てを]義とする結果になるからである。(ローマ 5 章 15-16 節)

キリストがどのようにして、すべての人間のあらゆる罪のために死に、私たちの身代わりとして罰せられ、苦しみを受け、私たちが救われるようにして下さったのかということは、神ご自身を思い巡らすことと同じほど、畏敬の念を抱かせると同時に、人間の理解をはるかに超えた、測り知れない神秘です(ローマ 11 章 33 節)¹³。しかし、私たちは、神が成してこられたこと、また今も成しておられることによって、神がおられることを知っています(ローマ 1 章 18-20 節)。それと同じように、イエスがご自身の血によって、私たちのすべての罪の代価を完全に支払って下さったことも、私たちは確かに知っています。なぜなら、私たちの救いは、あの暗闇の三時間の間に、主が私たちのために成し遂げて下さった十字架の御業に全面的に基づいているからです(ローマ 5 章 8 節, 10 章 6-13 節)。私たちは罪人ではありますが、それでもなお、ただ**信じることによって**御父によって義とみなされます。すなわち、キリストの血によって、私たちのすべての罪のために成し遂げられたキリストの霊的な死によって、私たちは義と宣告されるのです(ローマ 3 章 28 節; ガラテヤ 2 章 16 節, 3 章 24 節)。

主はわが主に言われる、「わたしがあなたのもろもろの敵をあなたの足台とするまで、わたしの右に座せよ」と。(詩篇 110 篇 1 節)

この節から分かるように、主が復活と昇天の後に父なる神の右の座に着かれたことは、私たちのために十字架において成し遂げられた、死に対するその功績ある勝利の結果です。このため、救い主は「多くの冠をかぶっておられる」と言われているのです(黙示録 19 章 12 節)。確かに、万物は本質的に、主がどのようなお方であるかという理由によって、もともと主のものであります。しかしそれに加えて、主が十字架において勝利を収められた結果として、父なる神は、その勝利によって獲得された相続の一部として、すべての御使いの名にまさって高い「名」をキリストにお与えになり(ヘブル 1 章 4-

¹³ [聖書の基礎第 4 部 A 「キリストについての研究」 II. 「イエス・キリストの救いの御業」](#)を参照してください。

第二章：御子の受肉の目的

IV. 節ごとの注解

九節

[5節](#)参照)、また天にあるものも地にあるものも、すべてをその報いとしてキリストの御手に委ねられました。

(7)わたしは主の詔をのべよう。主はわたしに言われた、「おまえはわたしの子だ。きょう、わたしはおまえを生んだ。(8)わたしに求めよ、わたしはもろもろの国を嗣業としておまえに与え、地のはてまでもおまえの所有として与える。(詩篇 2 篇 7-8 節)

(20)神(すなわち、御父)はその力をキリストのうちに働かせて、彼を死人の中からよみがえらせ、天上においてご自分の右に座せしめ、(21)彼を、すべての支配、権威、権力、権勢の[はるか]上におき、また、この世ばかりでなくきたるべき世においても唱えられる、あらゆる名の上におかれたのである。(22)そして、(神は)万物をキリストの足の下に従わせ、彼を万物の上にかしらとして教会に与えられた。(23)この教会はキリストのからだであって、すべてのものを、すべてのもののうちに満たしているかたが、満ちみちているものに、ほかならない。(エペソ 1 章 20-23 節)

(9)それゆえに、神は彼[キリスト]を高く引き上げ、すべての名にまさる名を彼に賜った。(10)それは、イエスの御名によって、天上のもの、地上のもの、地下のものなど、あらゆるものがひざをかがめ、(11)また、あらゆる舌が、「イエス・キリストは主である」と告白して、栄光を父なる神に帰するためである。(エペソ 2 章 9-11 節) (参照. [イザヤ 45 章 23 節](#); [ローマ 14 章 11 節](#))

私たちは今のところ、栄光を受けられた主イエスをこの目で見ることはできません([第一ペテロ 1 章 8 節](#); [ヘブル 11 章 27 節](#); [第一テモテ 6 章 16 節](#)参照)。しかし主は、神であると同時に人としても栄光を受けられ、サタンに対する勝利を成し遂げ、私たちを罪から解放してくださいました。そして、これから先に待っているすべては、まさに栄光に満ちたものです([イザヤ 9 章 5-7 節](#); [マタイ 25 章 31 節](#); [黙示録 1 章 12-16 節](#), [19 章 11-16 節](#), [20 章 11 節](#)参照)。私たちは、その栄光を主と共に分かち合う者となります。なぜなら私たちは、キリストの体である教会に属し、主の栄光に満ちた花嫁とされているからです([第二コリント 11 章 2-3 節](#); [エペソ 1 章 22-23 節](#), [5 章 22-33 節](#); [黙示録 19 章 7-14 節](#), [21 章 2-4 節](#), [21 章 9 節](#)~, [22 章 17 節](#)参照)。私たちは、キリストの血によって立てられた新しい契約の相続人であり([マタイ 26 章 28 節](#); [マルコ 14 章 24 節](#); [ルカ 22 章 20 節](#); [第一コリント 11 章 25 節](#); [使徒行伝 20 章 32 節](#), [26 章 18 節](#)参照)、イエス・キリストに属する者として、永遠に失われることのない栄光の相続

第二章：御子の受肉の目的

IV. 節ごとの注解

九節

を受ける者とされています(マタイ 5 章 5 節, 19 章 29 節, 25 章 34 節; ローマ 8 章 17 節; ガラテヤ 3 章 29 節, 4 章 7 節; エペソ 1 章 11 節, 1 章 14 節, 1 章 18 節, 3 章 6 節, 5 章 5 節; コロサイ 1 章 12 節, 3 章 24 節; テトス 3 章 7 節; ヘブル 1 章 14 節, 6 章 12 節, 6 章 17 節, 9 章 15 節, 11 章 7 節, 11 章 9 節; ヤコブ 2 章 5 節; 第一ペテロ 1 章 4 節, 3 章 7 節, 3 章 9 節, 5 章 3 節; 黙示録 21 章 7 節)。

「しばらくの間、御使いたちよりも低くなられた」ということについて:

すでに述べてきたように、「しばらくの間、御使いたちよりも低くなられた」という表現を正しく理解するためには、私たちの救い主がもともと御使いたちよりはるかに高いお方であったことを前提としなければなりません。主イエスは、私たち人間の創造主であるだけでなく、御使いたちの創造主でもあるからです。したがって、この言葉の中には、当時のグノーシス派の考え方を根底から覆す意味が含まれています。彼らは、イエスを御使いたちと本質的に同等の存在であるかのように考えていましたが、実際にはイエスは御使いたちよりはるかに優れたお方であり、しかも彼らを創造された方です。この表現は、その誤った理解を完全に打ち砕くものです。同時にこれは、律法主義者たちに対する厳しい叱責でもあります。彼らは、キリストがすでに律法を成就されたにもかかわらず、あたかもそれがなされていないかのように律法へと逆戻りしていました。その姿勢は、栄光に満ちた征服者としてのメシヤしか認めようとせず、まだ栄光を受けていない「人の子」として来られ、ご自身の血によって私たちの罪を贖われた救い主を受け入れなかった不信仰なユダヤ人たちと同じ道を歩むことにほかなりません(ガラテヤ 5 章 11 節; ヘブル 11 章 26 節参照)。

父なる神が「彼をしばらくの間、天使よりも低い者とされた」のは、私たちの主イエス・キリストが、救いのための神のご計画を成し遂げるために、それが唯一の方法だったからです。すなわち、真の、完全な人間としてのみ、イエスはその人間の体において世の罪を負うことができました。それは、人間が墮落の後に、私たちが救われるための唯一の道でした。それゆえ、詩篇 8 篇 5 節が人類一般、すなわち神の子とされたすべての人間について語っていることは確かですが、その中心的な意味は、パウロがここで用いている通りです。すなわち、この箇所は何よりもまず、神の子であった方が人の子とされたお方であることを指しています。滅びから逃れ、永遠のいのちを得るために、私たちに代わってなされるべきことを実際に成し遂げることができた、ただ一人の人間——それが、信仰によって私たちが救われる根拠となった主イエス・キリストなのです。

第二章：御子の受肉の目的

IV. 節ごとの注解

九節

(1)こういうわけで、今やキリスト・イエスにある者は罪に定められることがない。(2)なぜなら、キリスト・イエスにあるいのちの御霊の法則は、罪と死との法則からあなたを解放したからである。(ローマ 8 章 1-2 節)

神が人間となられ、神性が真の人性を取られたことは、なんと驚くべきことでしょうか。……それは、私たちを救うためでした。これによって、神はこの被造物と永遠にご自身を結びつけられました。受肉の重大さと、それによって可能となった犠牲の重大さは、この地上にある限り、完全に理解することはできません。被造世界はただ一つだけであり、今も、そして永遠にそうです。完全なご計画もただ一つだけであり、イエス・キリストこそがその計画、そのロゴスです。彼は、私たちのために十字架上で霊的な死を遂げ、ご自身の血によってすべての代価を支払われた方です。それは、彼が人間となることを進んで受け入れ、「彼をしばらくの間、天使よりも低い者とされた」者としてこの世を歩み、私たちすべてのために永遠の救いを成し遂げられるまで、そうされることによって可能となったのです。

信仰の導き手であり、またその完成者であるイエスを仰ぎ見つつ、走ろうではないか。彼は、自分の前におかれている喜びのゆえに、**恥をもいとわな**いで十字架を忍び、神の御座の右に座するに至ったのである。(ヘブル 12 章 2 節)

それは、神の恵みによって、主がすべての人のために死を味わうためです。：もし神のご計画に名があるとすれば、それは「恵み」です。恵みとは、これまで何度も述べたように、魔法ではありません——にもかかわらず、あまりにも多くのキリスト教諸教派(ましてやカルトは言うまでもなく)が、この語をあたかも魔法であるかのように用いています。恵みとは、簡潔に言えば、神の好意です。そして神の好意とは、神ご自身とその真理を求めるすべての人に、神が自由に与えられるものです。それは、その願いが、神が備えられた方法によって、すなわち**信仰を通して**表されるときです。言い換えれば、私たちすべてに与えられている神のかたちを用い、御子であり私たちの主イエス・キリストを通して神を選び、神に信頼することによってです。

したがって、恵みは行いによって得られるものではありません([ローマ 4 章 4 節](#); [ガラテヤ 2 章 16 節](#); [エペソ 2 章 8-9 節](#))。

(30)では、わたしたちはなんと言おうか。義を追い求めなかった異邦人は、義、すなわち、信仰による義を得た。(31)しかし、義の律法を追い求めていたイスラエルは、その律法に達しなかった。(32)なぜであるか。**信仰によらないで**、行いによって得られるかのように、追い求めたからである。彼らは、つまずきの石につま

第二章：御子の受肉の目的

IV. 節ごとの注解

九節

ずいたのである。(33)「見よ、わたしはシオンに、つまずきの石、さまたげの岩を置く。それにより頼む者<彼を**信じる**者/NKJV>は、失望に終ることがない」と書いてあるとおりである。(ローマ 9 章 30-33 節)

したがって、神の好意を得ようとして行いに励むことは、かえって確実に神の怒りを招く道となります。神の恵み、すなわち神の好意を得るために、「神のために何かをしよう」と考える人は——まるで神が**私たちの**助けを必要としておられるかのように、実際にはその逆であるにもかかわらず——自分自身を、神から与えられる真の恵みの及ぶ範囲の外に置いてしまっているのです。

(5) モーセは、律法による**義を行う**人は、その義によって生きる、と書いている。(レビ記 18 章 5 節)(6)しかし、**信仰による**義は、こう言っている、「あなたは心のうちで、だれが天に上るであろうかと言うな」。それは、キリストを引き降ろすことである。(7)また、「だれが底知れぬ所に下るであろうかと言うな」。それは、キリストを死人の中から引き上げることである。(8)では、なんと言っているか。「言葉はあなたの近くにある。あなたの口にあり、心にある」。この言葉とは、わたしたちが宣べ伝えている**信仰の**言葉である。(ローマ 10 章 5-8 節)

父なる神は、キリストを地上に遣わすためにも、また彼を死者の中からよみがえらせるためにも、だれの助けも必要とされませんでした。また、罪のために死ぬこと、どのような罪であれ、そのために死ぬことは、いかなる人間にとっても、考えることさえ最も不可能なことでした。私たちは、まったく無力で、望みもなく、その状態に完全に置かれていました——イエス・キリストが来て、私たちの不可能な状況から救い出してくださるまでは。彼は、私たちのために死を受けることによって、闇と恐れと死とを、光と喜びと命とへ変えてくださいました。すなわち、世の罪のために死ぬという霊的な死を、ご自身に引き受けられたのです。それこそが、わたしたちが永遠の断罪から救われるための、唯一の道でした。それゆえ、神が私たちの助けを必要としておられると考えることは、きわめて大きな傲慢さです。しかしそれは、律法主義とグノーシス主義の本質であり、またそれは、これら二つの忌まわしい運動において、真の作者であり発起者である神に取って代わろうとすることと、ほとんど変わりありません。この二つの運動は、これまでも常にそうしてきましたが、それは、それらを鼓舞する悪魔をまねることによるものです。

(6)わたしたちがまだ弱かったころ、キリストは、時いたって、不信心な者たちのために死んで下さったのである。(7)正しい人のために死ぬ者は、ほとんどいないであろう。善人のためには、進んで死ぬ者もあるいはいるであろう。(8)しか

第二章：御子の受肉の目的

IV. 節ごとの注解

九節

し、まだ罪人であった時、わたしたちのためにキリストが死んで下さったことによって、神はわたしたちに対する愛を示されたのである。(ローマ 5 章 6-8 節)

救われていない人間ほど、ふさわしくない存在はありません。それでも父なる神は、御子を遣わし、私たちすべてのために死なせてくださいました。神がそうされる必要は、まったくありませんでした。そもそも、私たちを、また天使を、そしてこの世界を創造される必要すらなかったのです。しかし神は、そうされました。私たちのために。神は愛によって、そうされました([ヨハネ 3 章 16 節](#))。それは、神がご自身を私たちと分かち合うためにできる唯一の方法であり、同時に、私たちが私たち自身であり続けるための方法でもありました。すなわち、神のかたちを与えられ、永遠について自ら決断する責任を負う者としてです。そしてそれを成し遂げるために、父と子と聖霊が払われた代価は、御国が来る前のこの時代において、私たちが決して完全に理解することのできないほど、大きなものでした。

(14)わたしたちは、父が御子を世の救主としておつかわしになったのを見て、そのあかしをするのである。(15)もし人が、イエスを神の子と告白すれば、神はその人のうちにいまし、その人は神のうちにいるのである。(16)わたしたちは、神がわたしたちに対して持つておられる愛を知り、かつ信じている。神は愛である。愛のうちにいる者は、神におり、神も彼にいます。(第一ヨハネ 4 章 14-16 節)

裁きが完了した後まで、主は肉体的には生きておられましたが、十字架上の三時間の闇の中で、私たちのすべての罪のために裁きの激しい代価を支払ってくださった主の行為は、「死」と呼ばれます。それには二つの理由があります。第一に、それは、いかなる人間にとっても考えることのできる中で、これ以上に恐ろしいものがないからです。第二に、聖書において「死」とは分離を意味しており、私たちの罪のために裁きを受けておられた間、私たちの主イエスは、その人間の本性において「父から切り離された状態」にあられたからです。すなわち、世のすべての罪がその人間の体に注ぎ出されたとき、そうでなければならなかったのです(神は聖であり、罪と直接に接することができないからです。参照：[出エジプト 3 章 5 節](#), [15 章 11 節](#); [レビ記 11 章 44-45 節](#), [21 章 8 節](#); [詩編 22 篇 3 節](#), [29 篇 2 節](#), [30 篇 4 節](#), [93 篇 5 節](#), [99 篇 9 節](#); [イザヤ 6 章 3 節](#), [43 章 15 節](#), [55 章 5b-9 節](#), [57 章 15 節](#); [使徒行伝 3 章 14 節](#); [黙示録 4 章 8 節](#))。¹⁴

¹⁴ その裁きは、聖霊の働きを通してのみ、初めて可能となりました([ヘブル 9 章 14 節](#))。聖書の基礎第 4 部 A「キリストについての研究」II.5.f.2「キリストのバプテスマ: 聖霊の役割」を参照してください。

第二章：御子の受肉の目的

IV. 節ごとの注解

九節

これは「霊的な死」でした。それは、これまでに誰かが経験したどのような肉体の死よりもはるかに苦しいものであり、しかも無限の度合いにおいてそうでした。私たちの罪のために裁きを受けるのに必要であった父との分離は、私たちには比較の枠組みすら持ちえないほどの、きわめて大きな犠牲を成していたのです。

私たちの主がすべての人の罪を負われたことは、「キリストの血」とも呼ばれます。それには二つの理由があります。第一に、それは、主が耐えられた恐るべき霊的な死を表すために、これ以上に直接的で生々しい表現がないからです。第二に、この「血」という表現は、罪のための主の霊的な死を、過去の動物犠牲と意図的に結びつけているからです。これらの犠牲は、その出来事を象徴し、前もって示すために定められました。¹⁵ 律法の下におけるすべての動物犠牲、さらに律法以前のものさえも、私たちを罪から救うために、メシヤが耐え忍ばれることになる霊的な死を象徴するものでした。そのため、イエスは「神の小羊」と呼ばれているのです(ヨハネ 1 章 29 節, 36 節; 第一ペテロ 1 章 19 節; 黙示録 5 章 6-13 節, 6 章 1 節, 7 章 9-10 節, 13 章 11 節, 14 章 1 節, 22 章 1 節; 参照: [イザヤ 53 章 7 節](#); [使徒行伝 8 章 32 節](#))。

しかし、この手紙が最初にエルサレムで受け取られたとき、これらの犠牲が象徴し、前もって示していた事柄はすべて、すでに成就していました。すなわち、主の来臨、主の死、そして復活、昇天、さらに着座によって成就しており、それらはすべて、多くの旧約の預言通りのものでした(参照: [ルカ 24 章 25-27 節](#); [ローマ 3 章 21-22 節](#))。それはまた、律法そのものから与えられていた保証でもあり、律法の目的がすでに果たされ、したがって今やそれは時代遅れとなったことを示していました([ヘブル 8 章 13 節](#); 参照: [ヘブル 7 章 12 節](#))。ところが、エルサレムの信徒たちは「聞くことに鈍く」なっており([ヘブル 5 章 11 節](#), [6 章 12 節](#))、イエス・キリストについてのこれらの初歩的な教えさえ忘れてしまっていました。そのため、まだ乳離れしていない者のように、乳を必要とする状態にあったのです([ヘブル 5 章 12 節](#), [6 章 1 節](#))。

その翌日、ヨハネはイエスが自分の方にこられるのを見て言った、「見よ、**世の罪を取り除く神の小羊**。(ヨハネ 1 章 29 節)

彼は、わたしたちの罪のための、あがないの供え物である。ただ、わたしたちの罪のためばかりではなく、**全世界の罪のため**である。(第一ヨハネ 2 章 2 節)

¹⁵ [聖書の基礎第 4 部 A「キリストについての研究」II.4.「キリストの血」](#)を参照してください。

第二章：御子の受肉の目的

IV. 節ごとの注解

十節

イエス・キリストは、これまでに生きた、またこれから生きるすべての人間一人ひとりのために死なれました(ヨハネ 3 章 16-18 節, 12 章 47 節; [第二コリント 5 章 14-15 節](#); [第一テモテ 2 章 4-6 節](#), [4 章 10 節](#); [第一ヨハネ 4 章 14 節](#))。¹⁶ 彼は、人類全体の罪のために、その代価のすべてを支払われました。したがって、ここでパウロが、キリストは「**私たち**すべてのために死なれたのである」と言っていることは、確かに真実です。なぜなら、イエスは「すべての人の救い主である。とりわけ信じる者たちの救い主である」からです([第一テモテ 4 章 10 節](#))。しかし、パウロがこの段階でこのような言い方をすることによって、「**私たち**」、すなわち信じる人間を再び議論の中に引き戻し、論を一巡させて閉じています。すなわち、イエス・キリストに属する**私たちは**、キリストとの**私たちの**結合によって、彼のうちにあるもの、また彼が持つておられるすべてと、彼がどのような方であるかとを分かち合っているのです。それゆえ**私たちは**、すべてのグノーシス的教えに反して(参照:[第一コリント 6 章 3 節](#))、天使たちにまさるキリストの卓越性をも分かち合います。また、律法の血の犠牲によっては不可能であったこと、すなわち彼の血によって義とされた者として([ローマ 8 章 1-3 節](#))、**私たちは**、十字架における彼の死への勝利ゆえに、彼の支配をも分かち合うことになるのです。

もし、ひとりの罪過によって、そのひとりをとおして死が支配するに至ったとすれば、まして、あふれるばかりの恵みと[義認を通して]義の賜物とを受けている者たち(すなわち、**私たち信者**)は、ひとりのイエス・キリストをとおし、[永遠の]いのちにあつて、さらに力強く**支配する**はずではないか。(ローマ 5 章 17 節)

十節

なぜなら、万物の帰すべきかた、万物を造られたかたが、多くの子らを栄光に導くのに、彼らの救の君を、苦難をとおして**全うされた**のは、彼に**ふさわしい**ことであったからである。(ヘブル 2 章 10 節)

ふさわしい:

この表現は、聖書において一般的な言い方ではありません。神は神であるがゆえに、ご自身の望まれることを何でも行うことができになります。しかしパウロは、エルサレムの信徒たちにキリストの犠牲を説明するにあたり——あるいは、実際には改めて説

¹⁶ 聖書の基礎第 3 部 B 「罪論」 III.2.4 「贖罪の普遍性」、および [聖書の基礎第 4 部 A 「キリストについての研究」 II.3. 「無制限の贖罪」](#) を参照してください。

第二章：御子の受肉の目的

IV. 節ごとの注解

十節

明し直す中で——父なる神の行為を正当化する必要を感じています。それはおそらく、彼らが行動によって、単に忘れっぼいだけでなく、律法に戻ることによって真理を妥協しようとする姿勢を示してきたからであり、さらに、十字架に対してどこか気まぐさを感じていることさえ明らかにしてきたからでしょう。これは、私たちが知っているとおり、主の時代のユダヤ人たちにとっても問題でした。彼らはメシヤを切望していましたが、苦難のしもべについて預言が語っていたことを受け入れようとはしなかったのです(例:[イザヤ 52章 13-15節](#), [53章 1-12節](#))。

信仰の導き手であり、またその完成者であるイエス(すなわち、アルファであり、オメガである方)を仰ぎ見つつ、走ろうではないか。彼は、自分の前におかれている喜びのゆえに、**恥をもいとわないで十字架を忍び**、神の御座の右に座するに至ったのである。(ヘブル 12章 2節)

私たちの主は、受けた「恥」によって、私たちを救うために遣わされた使命を途中で投げ出すことはありませんでした。それゆえ私たちも同様に、「キリスト者」と呼ばれることから来る、この世的などのような恥であっても——もともとこの語は侮蔑の言葉でしたが——それを「退け」、いかなる代価を払うことになろうとも、主の足跡に従う決意を固く持つべきなのです(参照:[黙示録 13章 10節](#), [14章 12節](#))。¹⁷

(24)信仰によって、モーセは、成人したとき、パロの娘の子と言われることを拒み、(25)罪のはかない歓楽にふけるよりは、むしろ神の民と共に虐待されることを選び、(26)**キリストのゆえに受けるそりを**、エジプトの宝にまさる富と考えた。それは、彼が報いを望み見ていたからである。(ヘブル 11章 24-26節)

(12)だから、イエスもまた、ご自分の血で民をきよめるために、門の外で苦難(すなわち、主の十字架での死)を受けられたのである。(13)したがって、わたしたちも、**彼のはずかしめを身に負い**、営所の外に出て、みもとに行こう(すなわち、同じように、私たちもこの世よりも、神を選ぶことによってそうしよう)ではないか。(ヘブル 13章 12-13節)

したがって、父なる神が、愛する御子を霊的な死の苦しみに引き渡し、私たちの代わりに裁かれたという行為は、決して思いつきで行われたものではありません。もし、私たちが救われるために、また救いのための神の計画が実現されるために、ほかにどの

¹⁷ [ペテロ・シリーズ#36の脚注#9](#)を参照下さい<未翻訳>

第二章：御子の受肉の目的

IV. 節ごとの注解

十節

ような方法でもあり得たなら、十字架は必ず避けられていたはずで

すなわち、神のかたちを与えられた人間や天使が、それを用いて、サタンとその使いたちのように神に背くのではなく、また不信者のように神に立ち返ることを拒むのでもなく、感謝をもって主と共にいることを選ぶ永遠が、ほかの方法によって実現できたのであれば、十字架は必要なかったということです。

そして少し進んで行き、うつぶしになり、祈って言われた、「わが父よ、もしできることでしたらどうか、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。しかし、わたしの思いのままにではなく、みこころのままになさって下さい」。(マタイ 26 章 39 節)

「アバ、父よ、あなたには、できないことはありません。どうか、この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしの思いではなく、みこころのままになさってください」。(マルコ 14 章 36 節)

「父よ、みこころならば、どうぞ、この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしの思いではなく、みこころが成るようにしてください」。(ルカ 22 章 42 節)

しかし、ほかに道は**ありません**でした(そして、上で聖霊によって記された主の言葉は、**私たちが**このことを理解するために語られたものです)。ほかの道があり得るはずもありませんでした。すべての者に神のかたちが与えられたという事実そのものが、ある者たちはそれを用いて神に応答するのではなく、神に逆らうことを選ぶようになる、ということの意味していたからです。それゆえ、イエス・キリストの犠牲は、常に父なる神の計画の中心にありました。そしてそのために、父が御子を私たちのために苦しみと死に服させられたこと——それは、私たちへの大きな愛ゆえに、主ご自身が同意されたことであり、「彼の前に置かれていた喜び」のゆえでした([ヘブル 12 章 2 節](#); 参照:[ヨハネ 3 章 16 節](#))——は、まさに「ふさわしい」ことであつたのです。……たとえ、まったく恩知らずなある人々が、主がかかられたその十字架と、そこで主が受けられた霊的死の苦しみを恥じていたとしてもです。しかしまさに主のその苦しみによって、彼らは火の池から救われたのです。

「全うされた」について:

ここで用いられているギリシヤ語の不定詞 テレイオーサイ(τ ε λ ε ι ὠ σ α ι / teleiōsai)は、「完成させる」という意味を持ち、ギリシヤ語の形容詞 テレイオス(τ ε λ ε ι ο ς / teleios、「完全な」)から来ています。この語は新約聖書における重

第二章：御子の受肉の目的

IV. 節ごとの注解

十節

要な用語であり、常に、一時的で不完全なものすべてと対比して、完全で永遠なものを見据えています。そのため、この語根は、霊的成熟を指す語として、聖書の中で最も頻繁に用いられている表現です(マタイ5章48節, 19章21節; ヨハネ17章23節; 第一コリント14章20節; コロサイ3章14節, 4章12節; ヘブル5章14節, 6章1節前半; 第一ペテロ1章13節, 第一ヨハネ4章12節, 17節, ヤコブ2章22節, 3章2節)。

しかしわたしたちは、円熟している者(成熟した者たち=テレイオイ[τελειοι / teleioi])の間では、知恵を語る。この知恵は、この世の者の知恵ではなく、この世の滅び行く支配者たちの知恵でもない。(第一コリント2章6節)

(12)わたしがすでにそれを得たとか、すでに完全な者になっている[自分の走るべきコースを終えた](テテレイオーマイ[τετελειώμαι / teteleiōmai])とか言うのではなく、ただ捕えようとして追い求めているのである。そうするのは、[この賞を得るために、私は]キリスト・イエスによって捕えられているからである。(13)兄弟たちよ。わたしはすでに捕えたとは思っていない。ただこの一事を努めている。すなわち、後のものを忘れ、前のもの[前にあるコース]に向かってからだを伸ばしつつ、(14)目標を目ざして[競争を]走り、キリスト・イエスにおいて上に召して下さる神の賞与を得ようと努めているのである。(15)だから、わたしたちの中で全き人たち(テレイオイ[τελειοι / teleioi])は、そのように考えるべきである…(ピリピ3章12-15節前半)

(2)わたしの兄弟たちよ。あなたがたが、いろいろな試練に会った場合、それをむしろ非常に喜ばしいことと思いなさい。(3)あなたがたの知っているとおりに、信仰がためされることによって、忍耐が生み出されるからである。(4)だから、なんら欠点のない、完全な(テレイオン[τελειον / teleion])、でき上がった(テレイオイ[τελειοι / teleioi])人となるように、その忍耐力を十分に働かせるがよい。(ヤコブ1章2-4節)

信じる者である私たちの「完成」は、私たちの主イエス・キリストの模範に従い、霊的成熟に至るまでそれを忠実に歩むことに、全面的に基づいています(第一ペテロ2章21節)。主は言うまでもなく、あらゆる点で完全な生を歩まれました。しかし、本性において不完全である私たちが目指している「完全さ」あるいは「完成」とは、霊的成長に関わるものです。すなわち、聖霊の力と神の言葉の真理によって、主にならって、私たちすべてに与えられている使命を成し遂げることです。この機会が私たちに与えられたのは、人の子がご自身の使命を完全に成し遂げられた、その結果にほかなりません。

第二章：御子の受肉の目的

IV. 節ごとの注解

十節

主は、常に父の御心にへりくだって従い、神のご計画の勝利が完全に達成されるまで、その身を委ねられたのです。

(28) そののち、イエスは今や万事が終った(テテレスタイ[τ ε τ ε λ ε σ τ α ι / tetélestai])ことを知って、「わたしは、かわく」と言われた。それは、聖書が全うされるためであった。(29)そこに、酢いぶどう酒がいっぱい入れてある器が置いてあったので、人々は、このぶどう酒を含ませた海綿をヒソプの茎に結びつけて、イエスの口もとにさし出した。(30)すると、イエスはそのぶどう酒を受けて、「**すべてが終った(テテレスタイ[τ ε τ ε λ ε σ τ α ι / tetélestai])**」と言われ、首をたれて息をひきとられた。(ヨハネ 19 章 28-30 節)

したがって、十字架において、私たちのための主の大いなる犠牲を通して、神の計画全体は「完成させられました」。そして、イエス・キリストがロゴス(λόγος / lógos)、すなわち神のご計画そのものである以上、父なる神が「**彼を完成させる**」こと、つまり、その計画自体を彼において完成に至らせることは、「ふさわしい」ことでした。それは、私たちの罪が贖われ、すでに「**終わった!**」と宣言された救いの勝利が達成されるための、唯一の方法によってでした。すなわち、イエス・キリストが霊的な死を遂げられ、それによって私たちのすべての罪のための贖いを完全に成し遂げられた、そのことによってです。

苦難をとおして：

主の人間としての生涯は、そのすべてが困難なものでした。神が人の体を取り、人の本性を帯び、神であると同時に真の人となられたことが、どれほどの犠牲であったのか、私たちには想像することさえできません。神が、このことを私たちのために行われたという事実は、驚きを超えるものです。そして、単なる人間である私たちには、御子にそのようなことをさせるために、御父がどれほどの代価を払われたのかを理解する手がかりすらありません。なぜなら、神であると同時に人となれることによって、イエスはご自身を二度と切り離すことのできない形でこの被造物と結びつけ、さらに、そのために死ぬことに身を委ねられたからです。それと同時に、御子が十字架で裁きを受けられるという出来事は、御父と御霊をもその裁きに深く関わらせるものとなったのです。

神はそのひとり子を賜ったほどに、この世を愛して下さった。それは御子を信じる者がひとりも[永遠に]滅びないで、永遠の命を得るためである。神が御子を世につかわされたのは、世をさばくためではなく、御子によって、この世が救われるためである。(ヨハネ 3 章 16-17 節)

第二章：御子の受肉の目的

IV. 節ごとの注解

十節

私たちすべてと同じように、誕生において人としての霊がその人の体の中に創造された後、私たちの主の地上での生涯は、そのすべてが実に困難なものでした。罪の性質を持たずに生まれたイエスは(それが処女懐胎・処女降誕の目的でした)、私たちのための犠牲が神に受け入れられ、その結果として私たちに救いをもたらすものとなるために、十字架に至るまで、そして十字架においても、完全な無罪性を絶対に保ち続けなければなりませんでした。罪の巧妙さを理解するようになったクリスチャンであれば誰でも、この必要性そのものが、果たすべき務めとして、いかに途方もなく重いものであったかが分かります。しかも主は、歴史上のどの人間にもまさって、目に見える勢力からも([ヘブル 12 章 3 節](#))、目に見えない勢力からも([マタイ 4 章 1-11 節](#); [マルコ 1 章 12-13 節](#); [ルカ 4 章 1-13 節](#))、計り知れないほど激しい悪魔的攻撃を受けながら、それを成し遂げなければなりませんでした。さらに主は、子として、兄弟として、また共同体の一員として、求められたすべてのことにおいて、一切欠けたところなく、完全な責任を果たす生涯を送らねばなりませんでした。また主は、最も重要な務めである宣教に備えるため、わずかな時間の一秒一秒、力の一滴一滴をも、完璧な方法で用いながら生きなければなりませんでした。そして、その宣教をあらゆる点で完全に成し遂げられた後、私たちすべてのための霊的な死に先立つ七つの裁判という試練を耐え忍ばねばなりませんでした。¹⁸ それらは、不当な扱い、中傷、嘲り、身体的虐待に満ちたものでした(例:[イザヤ 52 章 14 節](#))。さらに、そのすべてを耐え抜き、ほかのどの人間も耐えられなかったほどの苦しみを受けて十字架につけられ、虐待を受けた後、カルバリに闇が下ったとき、主は、御自分を拒む者たちの罪をも含め、すべての人間のあらゆる罪を負い、そのために裁かれなければなりませんでした。それは、彼の犠牲が神の義を満たし、私たちが救われるためでした。そして、このすべてを、主はご自身の神性の助けによらず、人として成し遂げられたのです。¹⁹ **これこそが**、私たちの愛する主イエスが「完成させられた」苦しみであり、その苦しみを通して、主は霊的な死の燃える闇へと進み、私たちすべてを救うことによって、永遠の命への門を私たちのために開いてくださったのです。²⁰

それゆえ、わたしは彼に大いなる者と共に物を分かち取らせる。彼は強い者と共に獲物を分かち取る。これは彼が死にいたるまで、自分の魂をそそぎだし、と

¹⁸ [聖書の基礎第 4 部 A「キリストについての研究」I.5.k「キリストの裁判」](#)を参照してください。

¹⁹ [聖書の基礎第 4 部 A「キリストについての研究」5.e「位格的結合とケノーシス」](#)を参照してください。

²⁰ [聖書の基礎第 4 部 A「キリストについての研究」II.4.「キリストの血」](#)、および [II.5.「キリストの霊的な死」](#)を参照してください。

第二章：御子の受肉の目的

IV. 節ごとの注解

十節

がある者と共に数えられたからである。しかも彼は多くの人の罪を負い、とがある者のためにとりなしをした。(イザヤ 53 章 12 節)

神はわたしたちの罪のために、罪を知らないかたを罪とされた。それは、わたしたちが、彼にあって神の義となるためなのである。(第二コリント 5 章 21 節)

さらに、わたしたちが罪に死に、義に生きるために、十字架にかかって、わたしたちの罪をご自分の身に負われた。その傷によって、あなたがたは、いやされたのである。(第一ペテロ 2 章 24 節)

なぜなら、万物の帰すべきかた、万物を造られたかたが、多くの子らを栄光に導くのに、**彼らの救の君**を、苦難をとおして全うされたのは、彼にふさわしいことであったからである。(ヘブル 2 章 10 節)

「私たちの救いの創始者」について：

私は、この節の残りを次のように訳しました。「……万物が彼のために存在し、また彼を通して存在しているその方、すなわち、彼らの救いの創始者であり、多くの子らを栄光へと導いた**彼**、[すなわち私たちの主イエス・キリスト]」。この訳を一般的などの標準訳と比べても、ここにあるギリシヤ語本文の理解には広く問題があることが分かります。十字架の御業を通して「多くの子らを栄光へと導いた」のは、**イエス・キリスト**ご自身だからです。この点で混乱が生じるのは、ギリシヤ語において非常によく見られる、代名詞の省略という原則が十分に理解されていないためです。簡単に言えば、ここでイエス・キリストを指している「彼」という語は、それが意味されていることが分かる以上、文中に明示されていなくても理解できる、ということです。実のところ、その「彼」は原文の手紙には存在していました。これは、新約聖書の古代ギリシヤ語写本の中でも最も重要なものとされるシナイ写本を参照することで確認でき、そこには確かにその語が記されています。

上に述べた点は重要です。なぜなら、この章全体の文脈は、私たちの主イエス・キリストと私たちとの関係を扱っているからです。すなわち、神の子が人の子となられ、その大いなる犠牲を通して、多くの「息子や娘」、すなわちご自身のからだ、ご自身の花嫁、ご自身の教会を救い出された、ということです。したがって、神のご計画の創始者である父が「多くの子らを栄光へと導いた」と言うことも、確かに可能ではあります。しかし一方で、それはこの節が実際に語っている内容ではありません。さらにもう一つ、パウロがこの箇所を実際にこのように語っているのは、救われた人間とイエスとの本質的な

第二章：御子の受肉の目的

IV. 節ごとの注解

十節

結びつきを強調するためです。すなわち、私たちは彼のために存在し、また彼によって存在している、ということです（「万物が彼のために存在し、また彼を通して存在している」）。

人間は、偶然の産物でも、出来事に対する後づけの反応でもありません。神のご計画は、私たちが創造されたという事実の上に成り立っています。というのも、イエスはロゴスであり、すなわち神のご計画そのものであり、存在するすべてのもののかしら石だからです（[エペソ 2 章 20 節](#)）。そして主は、**私たちと一つとなられ、私たちの罪のために**死なれることによって、神のご計画を実現させる十字架の勝利を勝ち取られました。救いを必要とする人間がいなければ、十字架も必要ありませんでした。したがって、神の計画は、始まりから出来事を追う歴史的な観点だけでなく、目的論的な観点からも見られるべきです。すなわち、その計画の「最終目的」は何か、ということです。それは、新しいエルサレム、キリストの花嫁です（[マタイ 9 章 15 節](#), [25 章 1-13 節](#); [マルコ 2 章 19 節](#); [ルカ 5 章 34 節](#); [ヨハネ 3 章 29 節](#); [第二コリント 11 章 2-3 節](#); [エペソ 1 章 22-23 節](#), [5 章 22-33 節](#); [黙示録 19 章 7-14 節](#), [21 章 2-4 節](#), [21 章 9 節](#)~, [22 章 17 節](#)）。すなわち、永遠において新しいシオンの山に集められた神の家族全体が（[黙示録 19 章 7 節](#), [21 章 2 節](#), [21 章 9 節](#), [22 章 17 節](#); 参照:[ヘブル 12 章 22 節](#)）、完全な一致のうちに、父と子を永遠に礼拝することです。この目標が達成されるためには、「歴史」が必要でした。すなわち、神から与えられたかたちを通して、神の権威を受け入れるか拒むかを選ぶ能力を持つ天使と人間を創造するという完全な計画です。その結果として、ある天使たちの反逆が不可避となり、また自由意志を与えられた人間の避けがたい墮落に続いて、その反逆を解決するために、人間を死から贖い出すという、神ご自身の側における犠牲の過程が必然となったのです。

私たちすべてが息をのんで待ち望んでいる永遠という完全な結果が実現されるためには、神が人性にあずかれる必要がありました。しかし、神が人性にあずかれることこそ、そもそも初めから神の計画の本質でした。私たちは、イエス・キリストによって救われ、永遠に彼に属する者とされました。しかし同時に、私たちは、永遠に彼に属する者となるために、イエス・キリストによって救われたのです。私たちは、彼の勝利の戦利品であり、言葉では言い尽くせないほど愛されている花嫁です。そして、私たちが彼と一つになることこそ、創造の背後にあり、歴史の背後にあり、神の計画そのものの背後にある、すべての目的なのです（[詩編 2 章 8 節](#); [第一コリント 8 章 6 節](#); [15 章 27-28 節](#); [エペソ 1 章 20-23 節](#); [ピリピ 2 章 9-11 節](#); [コロサイ 1 章 16-20 節](#); [ヘブル 12 章 2 節](#); 参照:[ローマ 11 章 36 節](#); [第一コリント 8 章 5 節](#); [11 章 12 節](#)）。私たちの文脈の節が断言しているとおおり、私たちは「彼のために」存在しており、「彼によって」創造され

第二章：御子の受肉の目的

IV. 節ごとの注解

十節

ました。ここで意図されているのは、御子のために計画を立てられた父ではなく、イエス・キリストご自身です。そして、主が真の人として、なることにおいて、生きることにおいて、耐え忍ぶことにおいて、また苦しむことにおいて——霊的な死と、それに先立つすべてのことを含めて——耐え抜かれたことを通して、その計画が成功裏に成し遂げられた結果、私たちは彼によって勝ち取られ、永遠に彼に属する者となったのです。私たち、すなわち彼の花嫁である私たちは、**彼**が「栄光へと導いた」息子たち、娘たちです。それは、永遠の命へ、そして来たるべき新しい天と新しい地における、あらゆる栄光に満ちた祝福へと導かれた、ということです。

これこそが、私たちの救い主が「私たちの救いの創始者」という、栄光に満ち、価値ある称号を名乗るにふさわしい理由です。ここで用いられているギリシヤ語 アルケーゴン(ἀρχηγόν / archegón)は、arch-(「先頭に立つ」「指導する」と ag-(「導く」)から成る語であり、「開拓者」(NIV)、「創設者」(ESV)、「源」(CSB)、「起源者」(NASB20)、「著者」(NASB95)、「指導者」(DBY)、あるいは本訳のように「大将／創始者」(KJV でも「Captain」)などと訳されてきました。いずれの訳語を用いるにしても、この呼称の背後にある根本的な点は同じです。すなわち、**私たちの救い**を成し遂げ、**私****たち**を救い出して永遠にご自身のものとするという点において、主イエスが第一であり、中心であるということです。要点は、イエス・キリストの人性と、十字架の勝利の結果として計画され、実際に成し遂げられた、私たちと主との結合にあります。というのも、主が人となられ、私たちのために死なれることによって、私たちとご自身とを結び合わせてくださったからこそ、私たちは今や永遠に主の一部となり、主が持つておられるすべて、また主がどのような方であるかを分かち合い、主によって栄光へと導かれているからです。

(22)しかしあなたがたが近づいているのは、[シナイ山ではなく]シオンの山、生ける神の都、天にあるエルサレム、[神のみ前に集められた]無数の[選ばれた]天使の祝会、(23)天に[その国民として]登録されている長子たちの教会、万民の審判者なる神、[その務めを終えてすでに]全うされた[信じる者たちの]義人の霊、(24)新しい契約の仲保者イエス、ならびに、[捧げられた]アベルの血よりも力強く語るそそがれた血(すなわち、私たちの罪を負われたキリストの御業)である。(ヘブル 12章 22-24 節)

わたしたちは喜び楽しみ、神をあがめまつろう。小羊の婚姻の時がきて、花嫁はその用意をしたからである。(黙示録 19 章 7 節)

十一節

実に、きよめるかたも、きよめられる者たちも、皆ひとりのかた[御父]から出ている。それゆえに主[キリスト]は、彼らを兄弟と呼ぶことを恥とされない。(ヘブル 2 章 11 節)

「聖さ」について:

「聖化」という語はラテン語に由来し、「聖さ」はゲルマン系の語です。ここで用いられているギリシヤ語の語根は ハグ(ἅγ-)であり(イスタンブールのハギア・ソフィアや、「聖人」の伝記を意味するハギオグラフィー[hagiography]に見られます)。したがって、「聖徒」と「聖化」、「清める」と「清められた」、「聖なる」と「聖さ」は、いずれもギリシヤ語、そして聖書全体において、同じ基本的な概念に結びついています。その意味するところは本質的に、神と、神に属する者たちが、悪、誤り、墮落、反逆といったすべてのものから分け隔てられている、ということです。

だから、あなたがたはこう祈りなさい、天にいますわれらの父よ、御名があがめられますように<聖なるものとされますように>。(マタイ 6 章 9 節)([ルカ 11 章 12 節](#))

「主の祈り」は、先にも述べたとおり、すでに確かなものとなっている事柄のために祈るよう、私たちに導いています。神はすでに、私たちに日ごとの糧を備えておられます。神はすでに、キリストの血によって、(私たちが他者を赦すかぎりにおいて)私たちの罪の赦しを備えておられます。神はすでに、私たちが神に従うなら、悪しき者、その手下たち、そしてそのたくらみからの解放を備えておられます。そして、神の「御国が来る」ことを妨げるものは何もなく、神の「御心が行われる」ことを止めるものも何もありません。ですから私たちは、これらのことが起こるように願うというよりも、むしろ、すでに与えられているこれらの祝福された現実を自分自身に思い起こさせるために祈っているのです。なぜなら、それらが実現することを妨げるものは、何一つ存在しないからです。

同じことは、私たちの父の「御名」についても言えます。「名」は、その人格そのものを表しています(参照:[マタイ 28 章 19 節](#)では、私たちが三位一体の「名に入る」洗礼を受ける、すなわち、イエス・キリストにあって父と御霊と一つとされる、と言われていいます)。そして、どのように考えても、神の評判が本当に損なわれることはあり得ません。も

第二章：御子の受肉の目的

IV. 節ごとの注解

十一節

し神の御名、すなわちその人格や評判が「聖とされていない」かのように見えることがあるとすれば、それは、天使と人間の歴史という短い期間において、被造物に与えられた自由意志が、多くの者たちに創造主への不敬をもたらしている、その間に限られています。しかし、そのことに対する報いは、やがて必ずもたらされます([ユダ 1 章 15 節](#))。これもまた、言うまでもなく、神のご計画の一部です。この計画が最終的に成し遂げられるとき、神がなさったすべてのことが、善であり、正しく、義であったことが明らかにされます。あらゆる偽りは退けられ、最後の裁きにおいて、「主が来られる。その方は、闇に隠されたことを明るみに出し、心の思いを明らかにされるのである」とあるとおり、完全に明白となるのです([第一コリント 4 章 5 節](#)・NKJV)。それまでは、神の聖さ、すなわちその聖別の完全さを保つために、父なる神は、ご自身の御座の場所を一時的に第三の天へと移しておられます。それは、私たちすべてが深く関わっているこの歴史、この争いが、あらかじめ定められた道筋に従って進み、麦と殻とをふるい分けるという目的を果たすためです。すなわち、神のかたちを与えられた自由意志によって、神の被造物一人ひとりが、自らの永遠の行き先を選び取るためなのです。²¹

また、箕を手にとって、打ち場の麦をふるい分け、麦は倉に納め、からは消えない火で焼き捨てるであろう」。(ルカ 3 章 17 節)

やがて来るその栄光の日、現在の天と現在の地が滅ぼされ、すべての悪が火によって徹底的に清められるとき、新しい天と新しい地には、ただ聖さだけが存在することになります。新しいエルサレムの門には、「汚れた者は決して入れない」のです([黙示録 21 章 27 節](#))。

「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな、全能者にして主なる神。昔いまし、今いまし、やがてきたるべき者」。(黙示録 4 章 8 節)

その時が来るまで、「聖化」という過程、すなわち神のご計画の働きは、救われた信者一人ひとりを通して、着実に前進しています。というのも、私たちは皆、イエス・キリストを信じたときに、「聖とされ」、「聖別され」、「聖なる者とされる」からです。イエス・キリストこそ、**真理を通して**私たちを「聖とする」方なのです。

(14) わたしは彼らに御言を与えましたが、世は彼らを憎みました。わたしが世のものでないように、彼らも世のものではないからです。(15) わたしがお願いす

²¹ 地上は、サタンの反逆以前において、父なる神の本来の「本拠地」でした。[サタンの反逆第 1 部「サタンの反逆と恵みからの墮落」](#)第二部「[天使の先史時代](#)」を参照してください。

るのは、彼らを世から取り去ることではなく、彼らを悪しき者から守って下さることです。(16)わたしが世のものではないように、彼らも世のものではありません。(17)真理によって彼らを聖別して下さい。あなたの御言は真理であります。(18)あなたがわたしを世につかわされたように、わたしも彼らを世につかわしました。(19)また彼らが真理によって聖別されるように、彼らのためわたし自身を聖別いたします。(ヨハネ 17 章 14-19 節)

「兄弟たち」について：

ここで用いられているギリシヤ語 アデルフォイ(ἀδελφοί/adelfhoi、「兄弟たち」)が、男性の信者だけでなく、女性の信者をも含んでいることは、言うまでもありません。これはギリシヤ語の統語上の特徴であり、男女が混在する集団を指す場合には男性形が用いられ、女性のみから成る純粋な女性集団に対してのみ女性形が用いられるからです。

「きよめるかたも、きよめられる者たちも、皆ひとりのかた[御父から出ている]」について：

ここで「なぜなら」と訳されているギリシヤ語の接続詞 ガル(γάρ) <それゆえに/口語訳>は、主が私たちを「ご自身の兄弟姉妹」と呼ぶことを喜ばれる理由を説明しています。イエスは、私たちの救いの創始者となるためには、また世に来て私たちを罪から救うためには、そして神のご計画を完成させるためには、私たちの一人とならなければなりません。主が人となられ、その人の体において私たちの罪を負われた、その大なる犠牲によって、私たちは今、主がそうであるのと同じように父に属する者となりました。それは、私たちが主に属しており、その血によって聖の領域へと移され、聖とされたからです。このようにして、私たち信じる者は、私たちの「兄」であるイエス・キリストの兄弟姉妹となりました。そしてそのような者として、私たちが贖い、清め、聖とされた方によって愛されています。私たちは今や、父なる神の家族の一員であり、教会、すなわちキリストのからだ、キリストの花嫁の一部なのです。

私たちは今、完全にイエス・キリストに属しています。一時的で世俗的、また罪に満ちたこの世が私たちに及ぼしていた支配は、完全に断ち切られました。原理的に、私たちは、主が聖であられるのと同じように、聖なる者とされているのです。

聖書に、「わたしが聖なる者であるから、あなたがたも聖なる者になるべきである」と書いてあるからである。(第一ペテロ 1 章 16 節) ([レビ記 11 章 44-45 節](#), [19 章 2 節](#); [20 章 7 節](#))

第二章：御子の受肉の目的

IV. 節ごとの注解

十一節

この箇所から読み取れるように、聖化もまた、救いと同様に、地位的(位置的)・経験的・究極的な側面を持っています。救いの時点における私たちの地位という点では、私たちはイエスに信仰を置いたとき、キリストの血によって聖とされ、俗なる領域から取り除かれ、神の主権のもとで聖なる領域へと移されました。しかし同時に、私たちはなおこの世にあり、汚れと罪を帯びたこの体にあって、日々の生活を送っています。そのため、聖書も、聖霊も、そして私たちの主イエス・キリストご自身も、私たちに対して、聖化において前進するように、すなわち、日ごとにますます聖なる者となり、考えること、行うこと、語ることのすべてにおいて、神の言葉の真理によって、いよいよ深く聖とされていくようにと呼びかけているのです([ヨハネ 17 章 14-19 節](#))。

したがって、聖化は、その経験的な段階においては、霊的成長とほぼ同義であると言えます。というのも、私たちが成長するにつれて、行動においては必然的に救い主にますます似た者となり、不信者のあり方からはますます離れていくからです。もちろん、天に至るこの地上の生において、私たちが完全に到達することは決してありません。しかし、「聖化を追い求めること」の重要性を、決して軽んじてはいけません([ヘブル 12 章 14 節](#))。やがて、私たちが復活において、純潔で、しみも傷もない完全なキリストの花嫁の一部として起こされるとき([エペソ 5 章 27 節](#))、その時点で、私たちは究極的に聖とされ、もはや罪深いものや聖でないものに支配されることは二度となくなるのです。

したがって、三つの側面における聖化は、信じる者に対する神のご計画の本質的な枠組みを成しています。すなわち、神の家族への加入(地位的)、この世にある間の霊的成長・前進・実りにおける忍耐(経験的)、そして、主の再臨のときに、完全なキリストの花嫁の一部として復活し、報いを受けること(究極的)です。このように、聖化はまた、神の計画全体の本質的な枠組みでもあります。それは、天の父が、現在の世からご自身のために一つの民を選び出し、その民を、永遠にわたって、ご自身と、御子であり私たちの主であり救い主であるイエス・キリストに属する者とするための、その過程なのです。

あなたがたの中には、以前はそんな人(つまり、罪びとたち)もいた。しかし、あなたがたは、主イエス・キリストの名によって、またわたしたちの神の霊によって、洗われ、**きよめられ**(すなわち、聖別され)、[信仰によって]義とされたのである。(第一コリント 6 章 11 節)

第二章：御子の受肉の目的

IV. 節ごとの注解

十二-十三節

「洗い」とは、私たちの贖いを指しています。すなわち、私たちが死から買い戻してくださったキリストの血によって、私たちの罪が洗い流されたことです。「義とされる」とは、その同じ犠牲による私たちの義認を指しており、御子への信仰ゆえに、神の御前で責められるところのない者と見なされることです。そして、「聖とされること」、すなわち聖化とは、この一時的で悪に満ちた世から取り分けられ、やがて来る完全で永遠の世界へと移されることを指しています。そこでは、来たるべきその大いなる日に、私たちは救い主と、また互いと共に、罪のない祝福のうちに永遠に生きることとなります。私たちは今、その祝福を地位としてすでに持っており、同時に、主が私たちに定められた聖化の基準にかなうように生きることで、主を敬おうと努めています。また、私たちは大きな期待をもって、「わたしが聖であるように、あなたがたも聖であれ」とあるとおり、永遠にそのようにされる日を待ち望んでいます。それは、「私たちの救いの創始者」の御前に集められ、主が私たちを導き、また私たちのための勝利の死によって買い取ってくださった、その「栄光」を余すところなく体験する日です。すなわち、私たちの主イエス・キリストにおいて成就する、神のご計画の完成なのです。

(15) 御子[イエス・キリスト]は、見えない神のかたちであって、すべての造られたものに先だって生れたかたである。(16) 万物は、天にあるものも地にあるものも、見えるものも見えないものも、位も主権も、支配も権威も、みな御子にあって造られたからである。これらいっさいのものは、御子によって造られ、御子のために造られたのである。(17) 彼は万物よりも先にあり、万物は彼にあって成り立っている。(18) そして自らは、そのからだなる教会のかしらである。彼は初めの者であり、死人の中から最初に生れたかたである。それは、ご自身がすべてのことにおいて第一の者となるためである。(19) 神は、御旨によって、御子[イエス・キリスト]のうちにすべての満ちみちた徳を宿らせ、(20) そして、その十字架の血によって平和をつくり、万物、すなわち、地にあるもの、天にあるものを、ことごとく、彼によってご自分と和解させて下さったのである。(コロサイ 1 章 15-20 節)

十二-十三節

(12) すなわち、<主は>「わたしは、御名をわたしの兄弟たちに告げ知らせ、教会の中で、あなたをほめ歌おう」(詩篇 22 篇 22 節)と言ひ、(13) また、「わたしは[すなわち、彼に応答する**私たち**もまた]、彼[父]により頼む」(イザヤ 8 章 17 節)、また、「見よ、わたしと、神がわたしに賜わった子ら[すなわち、彼と共にいる**私たち**]とは」(イザヤ 8 章 18 節)と言われた。(ヘブル 2 章 12-13 節)

第二章：御子の受肉の目的

IV. 節ごとの注解

十二-十三節

上に挙げた三つの旧約の引用(詩篇 22 篇 22 節; [イザヤ 8 章 17 節](#); [イザヤ 8 章 18 節](#))はいずれも、聖霊が預言的に、神の子が人として、すなわちメシヤとして世に來られ、私たちをご自身のものとするために來臨されることを前もって示している例です。第一の引用(詩篇 22 篇 22 節)では、イエスが、私たちの救いの創始者であり、教会の頭として、ご自身のものとされた私たちに、父なる神を示しておられる姿が描かれています。これは、主が初臨において行われたことでもあり(例:[ヨハネ 1 章 18 節](#), [17 章 26 節](#))、また、神の家族が新しいエルサレムのシオンの山に集い、父を賛美するたびごとに、永遠にわたって行われることでもあります。そして、この引用箇所が断言しており、イエスは、私たちと共に父を賛美し、私たちが一つとされる完全な計画を成就された父の栄光をたたえられるのです(参照:[第一コリント 15 章 28 節](#))。第二の旧約の引用([イザヤ 8 章 17 節](#))では、信じる者たちが、主ご自身の模範に従い、主がそうされたのと同じように、父に対して信仰、信頼、信念、従順、そして確信を置く姿が示されています。そして、私たちがそのように応答した後、第三の旧約の引用([イザヤ 8 章 18 節](#))において、私たちの救い主が、ご自身の教会である私たちを抱き寄せ、私たちをご自身と一つの者として正式に受け入れておられる姿が示されます。これこそが、この節全体が力強く宣べ伝えているメッセージです。すなわち、主が私たちと同じ者となられ、私たちを救ってくださったがゆえに、私たちは主の兄弟姉妹となり、主と共に父に受け入れられる賛美をささげる者とされました([詩篇 22 篇 22 節](#))。私たちは、主とその模範に従い、その結果として主に属する者となりました([イザヤ 8 章 17 節](#))。そして、主の犠牲と私たちの応答の結果として、私たちは永遠に、主の報いとして、「神がわたしに与えてくださった子ら」([イザヤ 8 章 18 節](#))として、完全に主のものとなったのです。

(48) イエスは知らせてくれた者に答えて言われた、「わたしの母とは、だれのことか。わたしの兄弟とは、だれのことか」。(49) そして、弟子たちの方に手をさし伸べて言われた、「ごらんなさい。ここにわたしの母、わたしの兄弟がいる。(50) 天にいますわたしの父のみこころを行う者はだれでも、わたしの兄弟、また姉妹、また母なのである」。(マタイ 12 章 48-50 節)

このようにして、私たちの救い主は、聖書が預言していたとおり、私たちをご自身の兄弟姉妹と呼ぶことを喜ばれます。すなわち、私たちをご自身の花嫁として愛しておられることを示し([詩篇 22 篇 22 節](#))、今や主に属する者となった私たちが、主に信頼を置いていることを語り([イザヤ 8 章 17 節](#))、さらに、私たちが永遠に共に一つとされている存在であることを描いているのです([イザヤ 8 章 18 節](#))。それは、完全な夫であるキリストと共にある、完全なキリストの花嫁としての私たちの姿を示しています。

第二章：御子の受肉の目的

IV. 節ごとの注解

十二-十三節

(25) 夫たる者よ。キリストが教会を愛してそのために[死に至るまで]ご自身をささげられたように、妻を愛しなさい。(26)キリストがそうなさったのは、水で洗うことにより、[主の]言葉によって、教会をきよめて聖なるものとするためであり、(27)また、しみも、しわも、そのたぐいのものがいっさいなく、清くて(すなわち、「聖別」された)傷のない栄光の姿の教会を、ご自分に迎えるためである。(エペソ 5 章 25-27 節)

花嫁の完成(そして神の家族の最後の要素である、花嫁の友である千年王国の信者たちの完成)は、神のご計画の究極の目標であり目的です。それは、十字架という手段によって成し遂げられました。その十字架によって、主に立ち返る私たちは、福音の真理を信じる時に聖とされ(そして復活において最終的に聖とされ)、その間の歩みにおいては、真理への私たちの応答を通して、段階的に聖とされていくのです。この世、すなわち現在のコスモスは悪に満ちています。しかし、神の完全なご計画の中で、聖とされつつある私たち——すなわち、聖なる者とされている私たち——は、この悪に満ちた環境から呼び出され、聖さの領域へと移されているのです。

(12) 光のうちにある聖徒たちの特権にあずかるに足る者とならせて下さった父なる神に、感謝することである。(13) 神は、わたしたちをやみの力から救い出して、その愛する御子の支配下に移して下さい。(コロサイ 1 章 12-13 節)

そして、私たちは、この悪からの分離が、今はまだ地位的にのみ真実であることを理解しており、また、悪に対するこの勝利が、現時点では、救われる信者が一人ずつ加えられ、信者一人ひとりが霊的前進を重ねていくという形で、徐々に現れているにすぎないことも理解しています。それでもなお、神のご計画の最終的な結果は、祝福に満ちたものとして避けることのできないものです。すなわち、「ただ義だけが住む」新しい天の下の新しい地へ、新しいエルサレムが下って来ることです([第二ペテロ 3 章 13 節](#); [黙示録 21 章 1-8 節](#))。その時、ご計画が完全にその道程を終えたとき、そこにあるのは、ただ聖さと平和と義と光と喜び、そして永遠の命だけです。それこそが、私たちが毎日祈り求めていることの、究極的な成就なのです。

(9) だから、あなたがたはこう祈りなさい、天にいますわれらの父よ、御名があがめられますように。(10) 御国がきますように。みこころが天に行われるとおり、地にも行われますように。(マタイ 6 章 9-10 節)

十四-十五節

(14)このように、子たち(すなわち、御父によってキリストに与えられた信者ら)は血と肉とに共にあずかっているのです、イエスもまた同様に、それらをそなえておられる(ただし、処女懐胎によって生まれ、罪を持たれなかった点においては同様ではありません)。それは、死の力を持つ者、すなわち悪魔を、ご自分の死によって滅ぼし、(15)死の恐怖のために一生涯、奴隷となっていた者たちを、[神への和解へと]解き放つためである。(ヘブル 2 章 14-15 節)

このように(Therefore)：

これは、父なる神が、ご自身の御子のために教会——すなわち、キリストの花嫁を形づくる兄弟姉妹の信者たちの集まり——を生み出す計画をすでに開始された以上、その計画を成就するために、イエスは人とならなければならなかった、という意味です。

子たち(These Children)：

これは、父なる神によってキリストに与えられた信者たち、すなわち教会を指しています([ヘブル 2 章 13 節](#))。彼らはキリストに属する者であり、神の御計画の中で、御子と結ばれる存在として与えられた人々です。

肉と血(Flesh and Blood)：

これは、人間を構成する二つの側面のうちの、身体的な部分を指しています。すべての人間は肉体を持つ存在ですが、それだけではありません。人はまた人の霊をもっており、この霊は、肉体の誕生の際、すなわち最初の息をした時に神によって与えられます([創世記 2 章 7 節](#)；[ヨブ記 33 章 4 節](#)；[伝道の書 12 章 7 節](#)；[イザヤ書 57 章 16 節](#)；[ゼカリヤ書 12 章 1 節](#)；[使徒行伝 17 章 25 節](#)；[ヘブル 1 章 6 節](#)、[10 章 5 節](#)、[10 章 7 節](#)など)。²² しかし、天使たちとは異なり、私たち人間の霊が宿っている「住まい」、すなわち肉体は、今の時代においては非常に弱く、壊れやすいものです。復活の時には、私たちの身体は永遠で朽ちることのないものに変えられます([ローマ 6 章 9 節](#)；[第一コリント 15 章 48~58 節](#)；[第一ヨハネ 3 章 2 節](#)；[黙示録 1 章 18 節](#))。しかし、エデンの園から人類が追放されて以来、私たち人間は、幼い頃から自然と悟るように、肉体の死に支配される存在となっています。これこそが、今の人間存在の**根本的な**問題であり、神学ではしばしば「究極の関心事」と呼ばれるものです。つまり、人間が

²² 聖書の基礎第 3 部 A: 人間論 (Anthropology) 第 II 章 4 節『人間の二分構造 (The Dichotomy of Man)』を参照してください。

第二章：御子の受肉の目的

IV. 節ごとの注解

十四-十五節

必ず死ぬ存在であるという事実です。この現実には、本来であれば、すべての人を神へと向かわせるはずのものです。なぜなら、肉体の死からも、その原因である罪からも、またその結果である裁きからも救い出すことができるのは、神おひとりしかおられないからです。²³

(24)この世界と、その中にある万物とを造った神は、天地の主であるのだから、手で造った宮などにはお住みにならない。(25)また、何か不足でもしておるかのよう、人の手によって仕えられる必要もない。神は、すべての人々に命と息と万物とを与え、(26)また、ひとりの人から、あらゆる民族を造り出して、地の全面に住まわせ、それぞれに時代を区分し、国土の境界を定めて下さったのである。(27)こうして、人々が熱心に追い求めて捜しさえすれば、神を見いだせるようにして下さった。事実、神はわれわれひとりびひとりから遠く離れておいでになるのではない。(28)われわれは神のうちに生き、動き、存在しているからである。あなたがたのある詩人たちも言ったように、『われわれも、確かにその子孫である』。(29)このように、われわれは神の子孫なのであるから、神たる者を、人間の技巧や空想で金や銀や石などに彫り付けたものと同じと、見なすべきではない。(30)神は、このような無知の時代を、これまでは見過ごしにされていたが、今はどこにおる人でも、みな悔い改めなければならないことを命じておられる。(31)神は、義をもってこの世界をさばくためその日を定め、お選びになったかたによってそれをなし遂げようとされている。すなわち、このかたを死人の中からよみがえらせ、その確証をすべての人に示されたのである」。(使徒行伝 17 章 24-31 節)

このミニストリーの読者であればよくご存じのとおり、神のご計画の進展という観点から見るなら、人類はそもそも、悪魔の反逆によって生じた問題を、解決するために創造されました。すなわち、悪魔とその配下の者たちを一人ひとり置き換えることによって、彼の離反により神の家族に生じた欠損を回復するためです²⁴[24]。サタンは、最初の人間である私たちの祖先を罪へと誘惑することによって、この過程を阻止しようとしていました。しかし、神の知恵において、この出来事は単に予見されていただけでなく、実は必要な出来事でもありました。神は、その比類なき憐れみによって、罪ある人類の代わり

²³ 例えば、P・ティリッヒ『信仰の力学 (The Dynamics of Faith)』(1957 年)全体を通して参照されたい

²⁴ [BB 2B「終末論 \(Eschatology\)」第 1 章「人類史に対する神のご計画 \(God's Plan for Human History\)」](#)、および [BB 3A「人間論 \(Anthropology\)」第 1 章「人間の目的 \(The Purpose of Man\)」](#)を参照してください。

第二章：御子の受肉の目的

IV. 節ごとの注解

十四-十五節

に死ぬための恵みの身代わりを備えられ、悔い改めと和解への道を、神のもとへ立ち返りたいと願うすべての者に開いてくださいました。そうして私たちは、神の子どもとなり、神の息子・娘となり、私たちのために、すなわち全人類のために死なれたお方の「兄弟姉妹」となることができるのです。このようにして神は、悪魔が神に対して投げかけてきた中傷が、すべて虚偽にすぎなかったことを、もはや反論の余地がないほど明確に示されました。神は常に、そして本質的に、完全に憐れみ深いお方であり、今もなお、その憐れみを受け取ろうとするすべての者に対して、変わることなくそうであられるのです。

あなたがたの神、主は恵みあり、あわれみある方であられるゆえ、あなたがたが彼に立ち返るならば、顔をあなたがたにそむけられることはありません。（歴代誌下 30 章 9 節後半）

私たちの目に映るこの世界は、騒がしく、めまぐるしく動いているように見えます。しかし、人生の表面的な出来事の下では、今まさに本当の戦いが続いており、それは人間の心の中で何が起きているかという一点に深く関わっています。すなわち、人がイエス・キリストを信じる信仰によって、死と滅びから救われるために主に立ち返るのか、それとも立ち返らないのかということです。また、信者として日々ますます主に従い、霊的成長を遂げることによって、報いを得つつイエス・キリストに栄光を帰するのか、それともそうしないのか、ということです。結局のところ、これらの根本的な選択に影響を与えない限り、他のすべてのことは最終的には取るに足らないものです。私たちは皆、この地上に、朽ちることしかできない「肉と血」にすぎない一時的な体をまもって置かれています。それは、こうした決断を下すためであり、そして信者の場合には、不滅の命を身にまとうあの栄光の日を待ち望むためなのです。

(22) 実に、被造物全体が、今に至るまで、共にうめき共に産みの苦しみを続けていることを、わたしたちは知っている。(23) それだけではなく、御霊の最初の実を持っているわたしたち自身も、心の内でうめきながら、子たる身分を授けられること、すなわち、からだのあがなわれることを待ち望んでいる。(24) わたしたちは、この望みによって救われているのである。(ローマ 8 章 22-24 節前半)

(50) 兄弟たちよ。わたしはこの事を言うておく。肉と血とは神の国を継ぐこと(すなわち、主とともに永遠に生きること)ができないし、朽ちるものは朽ちないものを継ぐことがない(つまり、永遠に生きるためには復活が必要なのです)。(51) ここで、あなたがたに奥義を告げよう。わたしたちすべては、眠り続けるのではな

第二章：御子の受肉の目的

IV. 節ごとの注解

十四-十五節

い。終りのラッパの響きと共に、またたく間に、一瞬にして変えられる。(52)というのは、ラッパが響いて、死人は朽ちない者によみがえらせられ、わたしたちは変えられるのである。(すなわち、主イエス・キリストの再臨の時にこれが起こります)(53)なぜなら、この朽ちるものは必ず朽ちないものを着、この死ぬものは必ず死なないものを着ることになるからである。(すなわち、主とともに永遠に生きるためです。)(54)この朽ちるものが朽ちないものを着、この死ぬものが死なないものを着るとき、聖書に書いてある言葉が成就するのである。(55)「死は勝利にのまれてしまった。死よ、おまえの勝利は、どこにあるのか。死よ、おまえのとげは、どこにあるのか」。(56)死のとげは罪[の性質](すなわち、私たちの罪を生み出すもの)である。罪の力は律法である。(すなわち、それは私たちの罪を明らかにする)(57)しかし感謝すべきことには、神はわたしたちの主イエス・キリストによって、わたしたちに勝利を賜ったのである。(第一コリント 15 章 50-57 節)

イエスもまた同様に、それらをそなえておられる：

イエス・キリストは神であり、父なる神および御霊と同等 (coequal) であり、永遠に同在し (coeternal)、同一本質 (consubstantial) を有しておられます。イエス・キリストが人間の性質を取らなければならない必然性は、ご自身にはまったくありませんでした。しかし、父なる神のご計画を御霊の力によって成し遂げるために、そして何よりも私たちを愛してくださったがゆえに、主は自ら進んでそれをお取りになりました。

人がその友のために自分の命を捨てること、これよりも大きな愛はない。(ヨハネ 15 章 13 節)

私たちの主が取られた人間の身体、すなわち人間の本性、肉体と霊は、私たちの罪を負って救うために絶対に必要なものとして受け入れられたものであり、その意味において完全に真実の人間性を持たれていました。イエス・キリストは完全に唯一無二の存在です。すなわち、人間の本性を持つ唯一の三位一体の位格であり、同時に、神の本性を持つ唯一の人間でもあります。イエス・キリストは、まさに神-人なのです。

また父祖たちも彼らのものであり、肉によればキリストもまた彼らから出られたのである。万物の上にはいます神は、永遠にほむべきかな、アマメン。(ローマ 9 章 5 節)

このように、イエス・キリストが「すべての上におられる神」であり、あらゆる点で真の神

第二章：御子の受肉の目的

IV. 節ごとの注解

十四-十五節

性を有しておられるのと同様に、同時に主は、アブラハムの子孫として生まれたメシヤ、すなわち真実の人間でもあります。主の神性という事実は、その人間性の真実さを少しも損なうものではありませんし、また、主が真の人間性を取られたという事実が、その神性を少しでも減じることはあり得ません。それは不可能だからです。ここで特に心に留めるべき重要な点は、イエス・キリストが、私たちが人間であるのと同じ意味で人間であられたということです。主の人間の身体は、私たちの身体と本質的にまったく同じであり、ただ一つの例外を除いては完全に同一でした。その例外とは、主には罪の性質がなかったという点です([イザヤ 53 章 9 節](#); [ヘブル 4 章 15 節](#), [7 章 26 節](#); [第一ペテロ 2 章 22 節](#); [第一ヨハネ 3 章 5 節](#))。

あなたがたのうち、だれがわたしに罪があると責めうるのか。(ヨハネ 8 章 46 節前半)

キリストは罪を犯さず、その口には偽りがなかった。(第一ペテロ 2 章 22 節)

神はわたしたちの罪のために、罪を知らないかたを罪とされた。それは、わたしたちが、彼にあって神の義となるためなのである。(第二コリント 5 章 21 節)

ここで述べられている最後の節が示しているとおおり、主が罪を負うお方となる資格を、神の正義において持つためには、罪がまったくないことが不可欠でした。完全な身代わりだけが受け入れられたのです([ヘブル 9 章 14 節](#); [第一ペテロ 1 章 19 節](#))。このことが、なぜイエス・キリストお一人だけが世の罪を負うことができたのかという大きな理由の一つです。主は、女から生まれたすべての人間の中で、ただお一人、罪なく生まれ、かつ一切の罪を犯されなかった方だからです。アダムとエバは、確かに罪のない状態で創造されましたが、罪に堕ちてしまいました。しかし、その子孫として生まれるすべての人間は、罪のうちに生まれ、「罪の性質」を持って生まれます。この事実は、私たちが誕生の時点ですでに神に対して霊的に死んでいることを意味し、同時に、生きている限り必ず罪を犯すことを確証しています([詩篇 51 篇 5 節](#); [ヨブ記 15 章 14-16 節](#); [マタイ 26 章 41 節](#); [エペソ 2 章 3 節](#); [ローマ 5 章 19 節](#), [7 章 17-20 節](#); [ガラテヤ 5 章 16-17 節](#))。²⁵

彼らがあなたに対して罪を犯すことがあって、——人は罪を犯さない者はないのです、—(列王記上 8 章 46 節前半) ([歴代誌下 6 章 36 節](#)前半)

²⁵ [BB 3B「罪論」第一部 2「罪の性質」](#)を参照してください。

善を行い、罪を犯さない正しい人は世にいない。(伝道の書 7 章 20 節)

すると、どうなるのか。わたしたち(イスラエル)には何かまざったところがあるのか。絶対にない。ユダヤ人もギリシヤ人も、ことごとく罪の下にあることを、わたしたちはすでに指摘した。(ローマ 3 章 9 節)

すなわち、すべての人は罪を犯したため、神の栄光を受けられなくなっており、(ローマ 3 章 23 節)

イエス・キリストだけが唯一の例外です。主は、父なる神によって御霊を通して、この世にまったく特別な仕方でもたらされました。それが処女懐胎です。²⁶

それゆえ、主はみずから一つのしるしをあなたがたに与えられる。見よ、おとめがみごもって男の子を産む。その名はインマヌエルとなえられる。(イザヤ 7 章 14 節)

「見よ、おとめがみごもって男の子を産むであろう。その名はインマヌエルと呼ばれるであろう」。これは、「神われらと共にいます」という意味である。(マタイ 1 章 23 節)

処女懐胎は絶対に必要でした。なぜなら、通常の生殖によらずに真の人間としてこの世に来ることによってのみ、主は罪の性質を持たずに生まれることができたからです。罪の性質は男性の系統を通して伝えられるからです。²⁷

このようなわけで、ひとりの人(すなわちアダム。その対型がキリスト)によって、罪がこの世にはいり、また罪によって死がはいってきたように(これは、アダムが自らの罪の性質を肉体的に子孫へと伝えた結果、普遍的な霊的死が生じたためです)、こうして、[明らかなように]すべての人が罪を犯したので、死が全人類にはいり込んだのである(つまり、普遍的な罪の行為という事実そのものが、普遍的な霊的死の存在を証明しているということです)。(ローマ 5 章 12 節)

²⁶ [BB 4A「キリストについての研究」I .5.f「受肉と処女降誕」](#)を参照してください。

²⁷ [BB 3B「罪論」第四部 6「背教と死に至る罪」](#)を参照してください。

第二章：御子の受肉の目的

IV. 節ごとの注解

十四-十五節

それは、死がひとりの人(すなわち最初のアダム)によってきたのだから、死人の復活もまた、ひとりの人(すなわちイエス・キリスト、最後のアダム)によってこななければならない。アダムにあってすべての人が死んでいるのと同じように、キリストにあってすべての人が生かされるのである。(第一コリント 15 章 21～22 節)

罪なく生まれることができたのはイエス・キリストだけであり、また、生涯を通して罪を犯さずにおられたのも主だけでした。それによって初めて、私たちの罪を負う完全で受け入れられる身代わりとなることができたのです。「他の人間はみな霊的に死んだ状態で生まれ、救いを必要としているのは不公平だ」と言うなら、それは創世記の最初の三章を無視することになります。アダムとエバは罪なく創造されましたが、それでも罪に堕ちました。そして私たちの誰一人としても、もし同じ状況に置かれていたなら、遅かれ早かれ同じことをしていたはずです。むしろ、エデンの園を繰り返さなくてよいようにしてくださったこと自体が、父なる神の大いなる憐れみなのです。なぜなら、イエス・キリストという言い尽くせないほど恵みに満ちた賜物によって、私たちははるかに優れたもの——決して墮ちることのない新しいエルサレムでの復活のいのちを与えられたからです。そこで私たちは、主イエスと天の父を顔と顔を合わせて見、永遠に至福のうちに生きるのです。これはすべての人に差し出されている約束ですが、受け取るのは信じる者だけです。

夜は、もはやない。あかりも太陽の光も、いらぬ。主なる神が彼らを照し、そして、彼らは世々限りなく支配する。(黙示録 22 章 5 節)

このような永遠を与えるために、主は全世界の罪のために死ななければなりません。そのためには、主が完全に罪のないお方である必要がありました。したがって、地上の生涯を通して完全さを保たなければならなかったのです。主は完全な子、完全な兄弟、完全な市民でなければなりません。また、十字架に至る前の完全な備えの道を歩み、試練を耐え抜き、カルバリで闇が訪れたときに全人類の罪の裁きを受けるための完全な奉仕を果たさねばなりません。そしてこれらすべてを、神としての力に頼ることなく行われました。それは、その経験が真に人間的でなければならず、そうであってこそ、その犠牲が受け入れられるからです。

(5)キリスト・イエスにあっていただいているのと同じ思いを、あなたがたの間でも互に生かしなさい。(6)キリストは、神のかたちであられたが、神と等しくあることを(すでに確実に所有していたため)固守すべき事とは思わず、(7)かえって、(すでに持つておられたこの同等の神性にもかかわらず)おのれをむなしうして僕

のかたちをとり、(すなわち)人間の姿になられた。その有様は人と異ならず、(8)おのれを低くして、死に至るまで、しかも(私たちすべてのための)十字架の死に至るまで従順であられた。(ピリピ 2 章 5-8 節)

今、イエス・キリストは第三の天において父なる神の右に座し、神として本来お持ちであった栄光、そして神のご計画全体の基礎となる勝利を成し遂げたがゆえに与えられた栄光に包まれておられます。しかし、最初の来臨においては、主は栄光なしに、また神としての助けを用いずに、すべてを成し遂げなければなりません。主は、私たちが日々戦っているのと同じ戦いを戦われました。ただし、一度も失敗することなく、完全にです。主が「肉と血を共有された」こと自体が大きな犠牲であり、さらにその目的であった十字架上での霊的な死は、計り知れない犠牲でした。それは驚くべきことであり、実に驚嘆すべきことです……そして、私たちの救いは、それに完全にかかっていたのです。

あなたがたは、わたしたちの主イエス・キリストの恵みを知っている。すなわち、主は(神であられて)富んでおられたのに、あなたがたのために(人となり、ケノーシス[自己制限]のもとに置かれたという意味で)貧しくなられた。それは、あなたがたが、彼の貧しさ(すなわち、私たちすべてのためのへりくだった生と、十字架での死)によって富む者になるため(すなわち、永遠のいのちを持つ者となるため)である。(第二コリント 8 章 9 節)

死の力を持つ者、すなわち悪魔を、ご自分の死によって滅ぼし：

私たちの救い主が私たちを救ってくださったその死とは、霊的な死です。それは、主がご自身の人としての霊を自ら吐き出されたときに起こった肉体の死ではありません([マタイ 27 章 50 節](#); [マルコ 15 章 37 節](#); [ルカ 23 章 46 節](#); 参照:[ヨハネ 10 章 17-18 節](#))。後者は、神のご計画における偉大な勝利がすでに成し遂げられた後に起こったものにすぎません。すなわち、主が闇の中で、私たちのすべての罪のために死なれ、一人ひとりのために、裁きの激しい代価を完全に支払われた後に起こったのです。

(28) その[すべての][すなわち、主の肉体的な苦しみと、世の罪のための霊的な死の]のち、イエスは**今や万事が終った**ことを知って、「わたしは、かわく」と言われた。それは、聖書[に記された救いの預言]が全うされるためであった。(29) そこに、酔いぶどう酒がいっぱい入れてある器がおいてあったので、人々は、このぶどう酒を含ませた海綿をヒソプの茎に結びつけて、イエスの口もとにさし出し

第二章：御子の受肉の目的

IV. 節ごとの注解

十四-十五節

た。(30)すると、イエスはそのぶどう酒を受けて、「[救いのための]すべてが終った」と言われ、首をたれて息をひきとられた。(ヨハネ 19 章 28-30 節)

罪のための贖い、すなわち、この贖いこそが、主が成し遂げられたことでした。それは、あらゆる時代のすべての人間の一つ一つの罪に対して下される神の義なる裁きを、完全に満足させるものであり、私たちの一人でも救われるために不可欠であったものです。これこそが成就であり、これこそが勝利であり、神の計画全体の土台となる岩でした。その岩は、岩ご自身によって、すなわち、唯一それを成し遂げることでできた、比類なき神人である方によって、実行され、勝ち取られ、据え置かれたのです。神は苦しむことができません。神は死ぬことができません。神は罪のための犠牲となることも、罪を贖うこともできませんし、完全に聖であられるがゆえに、罪と直接に接することさえできません。罪を負う者となるという役割を果たし得たのは、人間だけでした。それも、完全な人間だけです。罪ある人間である私たちは、神が私たちのために介入してくださらなければ、「来たるべき怒り」と、最後の裁きに必然的に伴う永遠の滅びに直面する運命にありました(第一テサロニケ 1 章 10 節; 参照: [マタイ 3 章 7 節](#); [ルカ 3 章 7 節](#))。しかし、言葉では言い尽くせないほどの福音の良い知らせとは、イエスが私たちのためにこの裁きを引き受けてくださった、ということです。すなわち、主は十字架において、ご自身の体に私たちのすべての罪を負い、私たちが行ってきた一切のことについて代わりに裁かれたのです([マタイ 26 章 26 節](#); [マルコ 14 章 22 節](#); [ルカ 22 章 19 節](#); [ヨハネ 6 章 51-59 節](#); [第一コリント 10 章 16-17 節](#), [11 章 23-25 節](#); [第二コリント 5 章 21 節](#); [エペソ 2 章 14-16 節](#); [コロサイ 2 章 9 節](#); [ヘブル 7 章 27 節](#), [10 章 5-10 節](#); [第一ペテロ 2 章 24 節](#))。

(21)あなたがたも、かつては悪い行いをして神から離れ、心の中で神に敵対していた。(22)しかし今では、**御子はその肉のからだにより、その死をとおして、あなたがたを神と和解させ、あなたがたを聖なる、傷のない、責められるところのない者として、みまえに立たせて下さったのである。**(コロサイ 1 章 21-22 節)

[ヘブル 2 章 14 節](#)の文脈で「死の力を持つ」者として描かれているのは、言うまでもなくサタンです。ただし、この表現はしばしば誤解されます。ここで用いられているのは、いわゆる主観的属格<ギリシヤ語文法用語>であり、「力が死を生み出す」という意味ではなく、死という事実が、その力を与えているという意味です。言い換えれば、エデンから追放された後、すべての人間が死すべき存在となったという事実そのものが、悪魔に付け入る余地を与えているのです。サタンは、主が許されないかぎり、私たちの誰一人をも死に至らせる力を持っていません(信者の場合、それが起こるのは「死に至

第二章：御子の受肉の目的

IV. 節ごとの注解

十四-十五節

る罪」という特別な状況に限られます。[第一コリント5章5節](#); [第一テモテ1章20節](#); [第一ヨハネ5章16節](#)。²⁸ しかしながら、サタンが実際に持っているのは、人間が本来抱いている死への**恐れ**を利用して、人類を操る機会です。すなわち、恵みによって救われ、来たるべき命について十分な確信を持つところまで霊的に成長していない人々に対して、その恐れを足がかりに働きかける余地を持っている、ということです。

このことは15節において、パウロが十字架以前の人類を「死への恐れによって、生涯にわたって奴隷となっていた」と描写していることで説明されています。もし墮落の後に、神による恵み深い介入がなかったなら、悪魔の人類に対する支配は完全なものとなっていたでしょう。永遠の命についての希望を持たない者にとって、死はすべての終わりであるがゆえに、人間が死を恐れるのは当然のことなのです。

(7)まことに人はだれも〔神の御手から〕自分をあがなうことはできない。そのいのちの価を神に払うことはできない。(9)とこしえに生きながらえて、墓を見ないためにそのいのちをあがなうには、あまりに価高くて、それを満足に払うことができないからである。(10)まことに賢い人も死に、愚かな者も、獣のような者も、ひとしく滅んで、その富を他人に残すことは人の見るところである。(詩編 49 篇 7-10 節)

だれか生きて死を見ず、その魂を陰府の力から救いうるものがあるでしょうか。(詩篇 89 篇 48 節)

(15)わたしは心に言った、「愚者に臨む事はわたしにも臨むのだ。それでどうしてわたしは賢いことがあるう」。わたしはまた心に言った、「これもまた空である」と。(16)そもそも、知者も愚者も同様に長く覚えられるものではない。きたるべき日には皆忘れられてしまうのである。知者が愚者と同じように死ぬのは、どうしたことであろう。(17)そこで、わたしは生きることをいとった。日の下に行われるわざは、わたしに悪しく見えたからである。皆空であって、風を捕えるようである。(伝道の書 2 章 15-17 節)

人生の後に何も望みがないとするなら、人生が空しいものであることは、誰の目にも明らかです。そして、私たち自身が死すべき存在であるというこの自覚と、神がご自身の被造物の壮大さを通して、すべての人に示しておられる自己啓示([ローマ 1 章 18-](#)

²⁸ [BB 3B「罪論」第四部 6「背教と死に至る罪」](#)を参照してください。

第二章：御子の受肉の目的

IV. 節ごとの注解

十四-十五節

[20 節](#))とが相まって、私たちが神へと導くためのものとされています([使徒行伝 17 章 23-31 節](#))。²⁹ そして、イエス・キリストなしには希望も助けもないという自分たちの状況を認め、それに応答するすべての人のために、神は福音を備えてくださいました。福音とは、死から逃れ、永遠の命への確かな希望をもって神の家族の一員とされるために、神ご自身が与えてくださった道なのです。

(1)わたしの言う意味は、こうである。相続人が子供である間は、全財産の持ち主でありながら、僕となんの差別もなく、(2)父親の定めた時期までは、管理人や後見人の監督の下に置かれているのである。(3)それと同じく、わたしたちも子供であった時には、いわゆるこの世のもろもろの霊力の下に、縛られていた者であった。(4)しかし、時の満ちるに及んで、神は御子を女から生れさせ、律法の下に生れさせて、おつかわしになった。(5)それは、律法の下にある者をあがない出すため、わたしたちに子たる身分を授けるためであった。(6)このように、あなたがたは子であるのだから、神はわたしたちの心の中に、「アバ、父よ」と呼ぶ御子の霊を送って下さったのである。(7)したがって、あなたがたはもはや僕ではなく、子である。子である以上、また神による相続人である。(8)神を知らなかった当時、**あなたがたは、本来神ならぬ神々の奴隷になっていた。**(ガラテヤ 4 章 1-8 節)

しかし、もし父なる神が、御子を遣わして私たちのすべての罪のために死なせてくださらなかったなら、私たちは皆、永遠の命へ至る唯一の道を愚かにも拒んだ不信者たちと、まったく同じ状況に置かれていたことでしょう([ヨハネ 14 章 6 節](#))。私たちも彼らと同じように、終わりのない「奴隷状態」にあり、この世と、この世の支配者である悪魔に仕える者となっていたはずです([ルカ 4 章 6 節](#); [ヨハネ 12 章 31 節](#), [14 章 30 節](#), [16 章 11 節](#); [エペソ 2 章 2 節](#); [第一ヨハネ 5 章 19 節](#))。救い主がいなければ、死という差し迫った現実には、私たち全員に、正気を保つために何らかの折り合いをつけることを強いるでしょう。その衝動、その力、その駆り立てるものこそが、最終的に、あらゆる宗教、あらゆる哲学、あらゆる世俗的イデオロギーの背後にあるものです。すなわち、女から生まれたすべての者に避けがたく定められている運命から、何とかして逃れたいという希望です。そして、これらすべての信条、体系、運動の背後には、悪しき者がいます。すなわち、神の御心ではなく自分の意志を行わせるために、人類を奴隷にするよう彼が築き上げた、この世の体制があるのです。³⁰

²⁹ [BB 4B「救済論」第二部 2「自然啓示」](#)を参照してください。

³⁰ [「サタンの反逆」第4部「サタンの世界システム」](#)参照ください。

第二章：御子の受肉の目的

IV. 節ごとの注解

十四-十五節

もし肉体の死が存在しなかったなら、不信者たちは、真理そのものである方を退けたときと同じように、悪魔や、悪魔が用意した真理の代用品に対しても、軽くあしらう態度を取りがちになっていたことでしょう。しかし、罪と死、そして避けることのできない裁きという現実には、どのような人間にとっても、何らかの満足のいく解決なしには耐えられない重荷です。実際のところ、罪と死に対する唯一の**真**の解決は、イエス・キリストだけです。しかし、神はこの人生において、神のかたちを持つ私たち一人ひとりが、自分の永遠の将来について真実な選択を行うことができるように、人の心を造られました。そのため人の心は、自分にとって受け入れがたい真理に対しては、それに代わる偽りを受け入れることによって、自らを頑なにすることができるようにも造られているのです。神を退け、イエス・キリストを退け、真理を退ける者は、必ず何らかのサタンの偽りを受け入れることとなります。この事実は、信者と不信者との間に見られる、埋めることのできないものの見方の違いを説明するうえで、大きな手がかりとなります。

しかし、もし救い主がおられなかったなら、私たちは皆、心を頑なにした不信者たちと同じ状況に置かれていたことでしょう。すなわち、死と、その先に待つものという恐ろしい現実には、何の希望もなく向き合わされ、そのために、「すべては大丈夫だ」と自分に言い聞かせるための、何らかの偽りの体系、あるいは心を麻痺させる偽りの教えを、必死に受け入れざるを得なくなっていたはずです。火の池に定められていながら、救いを得るためだと思い込んで、ある宗教や誤った世俗思想の偽りに頼り、その偽りを作り出した悪魔に仕えることで、与えられたわずかな日々を使い尽くそうとする不信者の奴隷状態ほど、残酷なものはありません。しかし、もし父なる神が御子を世に遣わしてくださらなかったなら、私たちもまた、いかなる希望も持たず、同じその奴隷状態のもとに置かれていたのです。

ほむべきかな、わたしたちの主イエス・キリストの父なる神。神は、その豊かなあわれみにより、イエス・キリストを死人の中からよみがえらせ、それにより、わたしたちを新たに生れさせて生ける望みをいだかせ、(第一ペテロ 1 章 3 節)

[ヘブル 2 章 14-15 節](#)の文脈がはっきり示しているとおおり、悪魔の「死の力」とは、神に信頼して死からの救いを求めることを選ばなかった大多数の人間が抱いている「死への恐れ」の中に、全面的に置かれています。解決のないままの死への恐れ(神による代替の道が退けられた後では)は、実に強力な操作の道具となります。神なしの死への恐れは、人類を奴隷状態に縛りつけておくための、悪魔の手段となっているのです。サタンの提示する「解決策」はすべて、必然的に罪を伴うものですから、ひとたび、

第二章：御子の受肉の目的

IV. 節ごとの注解

十四-十五節

死からの救いに対する唯一の希望としての神が退けられると、悪魔の代替案は、まるで流砂のように、その犠牲者を一步進むごとに、さらに深みへと沈ませていきます(ヨブ 18 章 14 節; イザヤ 14 章 17 節, 61 章 1 節; ルカ 4 章 16-21 節; ヨハネ 8 章 34 節; ローマ 6 章 16 節; 第一ヨハネ 3 章 8 節; 黙示録 1 章 5 節)。しかし、真理へと向き直ろうとするすべての人のために、父なる神は自由を差し出しておられます。それは、イエス・キリストの十字架を通して、ご自身と和解することなのです。

というのは、神がわたしたちに下さったのは、**臆する**霊ではなく、力と愛と慎みとの[御]霊なのである。(第二テモテ 1 章 7 節)

和解：

死への恐れは、人間の内に、この世での安全を確保しようとする強い衝動を生み出します。すなわち、欠乏への恐れや、死につながりかねない危険への恐れです。また同時に、宗教を生み出す原動力ともなります。もともとそれらは、永遠の安全を約束すると称しながら、実際には偽りの約束にすぎません。いわゆる「サタンの世界体制」の多くは、人間がどうしても振り払うことのできない肉体の死への自覚を根拠として成り立ち、またその自覚から力を得ています。死からの唯一の真の解決であるイエス・キリストから背を向ける者たちにとって、悪魔の偽りの解決策を受け入れるようになることは、避けられない結果です。しかし、真理と命へ至る唯一の道である方、すなわちイエス・キリストへと向き直る者たちのために(ヨハネ 14 章 6 節)、神は平和を備えておられます。

(14)キリストはわたしたちの**平和**であって、[ユダヤ人と異邦人の]二つのものを一つにし、**敵意**という隔ての中垣を取り除き、ご自分の肉によって、(15)数々の規定から成っている戒めの律法を廃棄したのである。それは、彼[ご自身の体]にあって、二つのものをひとりの新しい人に造りかえて[この]平和をきたらせ、(16)十字架によって、二つのものを一つのからだとして神と**和解**させ、**敵意**を十字架にかけて滅ぼしてしまったのである。(17)それから彼は、こられた上で(初臨において)、[神から]遠く離れているあなたがたに**平和**を宣べ伝え、また近くにいる者たちにも**平和**を宣べ伝えられたのである。(18)というのは、彼によって、わたしたち両方の者が一つの御霊の中であって、父のみもとに**近づく**ことができるからである。(エペソ 2 章 14-18 節)

和解とは**平和**です：それは、神と人との間の平和であり、すなわち、イエス・キリストにおいて神が差し出しておられる、平和の申し出を受け入れることを望む人々との間

第二章：御子の受肉の目的

IV. 節ごとの注解

十四-十五節

に成立する平和です。³¹ 罪は、私たちを神から隔てていた障壁、すなわち「隔ての壁」となっていました。しかし、イエス・キリストは、その壁を十字架という「木」において、ご自身のからだにすべての罪を負われることによって打ち壊されました([1ペテロ2章24節](#))。聖なる神は、その本質において罪と相容れないお方です。しかし今や、罪という障害は取り除かれました。そのため神は、平和の福音を通して、それを受け入れようとするすべての人に、和解を提供しておられるのです。

神は、わたしたちを責めて不利におとしいる証書(すなわち、個人的な罪の記録)を、その規定もろともぬり消し、これを[障害として]取り除いて、[二つの間の和解ができるように]十字架につけてしまわれた。(コロサイ 2章 14節)

和解の教理は、悪魔の反逆に端を発して生じた宇宙的な対立の全体を、包括的かつ要約的に明らかにするものです。³²

(19)神は、御旨によって、御子のうちにすべての満ちみちた[神の]徳を宿らせ、(20)そして、その十字架の血によって**平和**をつくり、万物、すなわち、**地にあるもの、天にあるものを、ことごとく、**彼によってご自分と**和解**させて下さったのである。(コロサイ 1章 19-20節)

サタンの反逆は、反逆した天使たちに代わる存在として人類が創造されることにつながりました。さらに、サタンが人類を誘惑し、私たちの最初の両親を罪へと引き込んだことによって、神と人との間に敵意が生じました。しかし神は、イエス・キリストという賜物を恵みによって備えてくださいました。このキリストにおける罪の赦しを通して、人類は再び神と和解することが可能となったのです。そして、信じる者たちがこの平和の申し出を受け入れることによって、墮落した天使たちは教会によって一対一で置き換えられます。このようにして、歴史すなわち神のご計画が完全にその歩みを終えるとき、十字架において、私たちの愛する主であり救い主であるイエス・キリストによって勝ち取られた勝利を通して、神の創造は完成と調和を回復するのです。

(23)ただ、各自はそれぞれの順序に従わねばならない。最初はキリスト、次に、主の来臨(すなわち、再臨)に際してキリストに属する者たち、(24)それから終末となって、その時に、キリストはすべての君たち、すべての権威と権力とを打

³¹ [BB 4A:「イエス・キリストについての研究」II.9.「和解\(Reconciliation\)」](#)を参照してください。

³² [『サタンの反逆』](#)シリーズでは、これらの問題が主として詳しく扱われています(参照)。

第二章：御子の受肉の目的

IV. 節ごとの注解

十四-十五節

ち滅ぼして、国を父なる神に渡されるのである。(25)なぜなら、キリストはあらゆる敵をその足もとに置く時まで、支配を続けることになっているからである。(26)**最後の敵として滅ぼされるのが、死である。**(第一コリント 15 章 23-26 節)

十字架によって、二つのもの(すなわち、ユダヤ人と異邦人の信者)を一つのからだとして神と和解させ、(神と人との間の)**敵意を十字架にかけて滅ぼしてしまった**のである。(エペソ 2 章 16 節)

(54)この朽ちるもの[体]が朽ちないもの[体]を着、この死ぬものが死なないものを着るとき、聖書に書いてある言葉が成就するのである。(55)「**死は勝利にのまれてしまった。**(イザヤ 25 章 8 節) 死よ、おまえの勝利は、どこにあるのか。(ホセア 13 章 14 節) 死よ、おまえのとげは、どこにあるのか」。(56)死のとげは罪[の性質](すなわち、罪を生み出すもの)である。罪の力は律法(すなわち、私たちの罪を明らかにするもの)である。(57)しかし感謝すべきことには、神はわたしたちの主イエス・キリストによって、わたしたちに勝利を賜ったのである。(第一コリント 15 章 54-57 節)

そして今や、わたしたちの救主キリスト・イエスの出現によって明らかにされた恵み[救い]によるのである。キリストは**死を滅ぼし**、福音によっていのちと不死とを明らかに示されたのである。(第二テモテ 1 章 10 節)

人の目から涙を全くぬぐいにとって下さる。**もはや、死もなく**、悲しみも、叫びも、痛みもない。先のものが、すでに過ぎ去ったからである」。(黙示録 21 章 4 節)

死は罪の結果です。私たちの救い主イエス・キリストは、十字架における霊的な死によって人類のあらゆる罪のために死なれ、罪によって築かれた敵意という隔ての壁を取り除くことによって、「死そのものを滅ぼされました」。私たちがこの福音という「良き知らせ」に応じて、主イエスとその御業を受け入れるとき、私たちは天の父なる神と和解させられるのです。

このむすこが**死んでいたのに生き返り**、いなくなっていたのに見つかったのだから』。(ルカ 15 章 24 節前半)

あなたがたは再び**恐れ**をいだかせる**奴隷**の霊を受けたのではなく、子たる身分を授ける霊を受けたのである。その霊によって、わたしたちは「アバ、父よ」と

第二章：御子の受肉の目的

IV. 節ごとの注解

十四-十五節

呼ぶのである。(ローマ 8 章 15 節)

このように、あなたがたは子であるのだから、神はわたしたちの心の中に、「アバ、父よ」と呼ぶ御子の霊を送って下さったのである。(ガラテヤ 4 章 6 節)

もはや私たちは死を恐れて生きる必要はありません。死はもはや私たちの救い主に對して何の支配権も持っておらず(ローマ 6 章 9 節)、私たちもまた、神の定めの中に、主が復活されたのと同じように復活させられるという確かな確信を持っています(例: [第一ヨハネ 3 章 2 節](#))。私たちはかつて神の敵でしたが、十字架によって神と和解させられ、今では、私たちを兄弟姉妹と呼んでくださる救い主と同じように、神を「父」と呼ぶ者となったのです([ヘブル 2 章 11-12 節](#))。

(8)しかし、まだ罪人であった時、わたしたちのためにキリストが死んで下さったことによって、神はわたしたちに対する愛を示されたのである。(9)わたしたちは、キリストの血によって[信仰により]今は義とされているのだから、なおさら、彼によって神の[来るべき]怒りから救われるであろう。(10)もし、わたしたちが敵であった時でさえ、御子の死によって神との**和解を受けた**とすれば、**和解を受けている**今は、なおさら、彼のいのちによって救われるであろう。(11)そればかりではなく、わたしたちは、今や[父との新しい関係にある]**和解を得させて**下さったわたしたちの主イエス・キリストによって、神を喜ぶのである。(ローマ 5 章 8-11 節)

私たちは神の恵みを受けた者として、キリストの血によって天の御父と和解させられ、神の平安を経験しています。新約聖書における「平和」は、ギリシャ語の エイレネー(eirēnē) であり、これは人名の「イレーネー」の語源でもあります、「争いや不安から解放された状態」を意味します。しかし、新約聖書の著者たちは、この平和という概念を、ヘブル語の同義語である シャローム(shalom) から切り離して考えることはありませんでした。シャロームとは、単に問題や困難がないという意味にとどまらず、完全さ、満ち足りた状態、幸福、安らぎ、静けさを含む、より豊かな意味を持つ言葉です。今日のイスラエルでも親しみを込めた挨拶として用いられているシャロームは、「欠けるところのない完全な状態」を意味しています。私たちはかつて、この世にあって迷い、希望を持たずに生きていました。しかし、十字架を通して、私たちは再び神の栄光ある平安のうちに連れ戻されました。イエス・キリストご自身が、私たちの平和だからです([エペソ 2 章 14 節](#))。これこそが、「和解」という教理の本質です。

第二章：御子の受肉の目的

IV. 節ごとの注解

十六節

すなわち、罪のゆえに神と私たちとの間に存在していたあらゆる敵意が、キリストの犠牲によって完全に取り除かれ、その結果、私たちは御子を通して、御霊によって、御父との完全さと平安に満ちた関係へと回復されたのです([イザヤ 53 章 5 節](#); [ローマ 5 章 1-2 節](#), [8-11 節](#); [コリント第二 5 章 18-20 節](#); [コロサイ 1 章 19-23 節](#), [2 章 14 節](#); [エペソ 2 章 14-18 節](#), [3 章 12 節](#); [テモテ第一 2 章 4-6 節](#); [ヘブル 4 章 16 節](#); [ペテロ 第一 3 章 18 節](#))。

わたしは**平安**をあなたがたに残して行く。わたしの**平安**をあなたがたに与える。わたしが与えるのは、世が与えるようなものとは異なる。あなたがたは心を騒がせるな、またおじけるな。(ヨハネ 14 章 27 節)

(1)このように、わたしたちは、信仰によって義とされたのだから、わたしたちの主イエス・キリストにより、[父なる]神に対して**平和**を得ている。(2)わたしたちは、さらに彼により、いま立っているこの恵みに信仰によって導き入れられ、そして、神の栄光にあずかる希望をもって(すなわち、待ち望んで)喜んでいる。(ローマ 5 章 1-2 節)

十六節

確かに、彼は天使たちを助けることはしないで、(すなわち、人類を信じて:[ローマ 4 章 1 節](#); [ガラテヤ 3 章 7-10 節](#), [11-14 節](#))アブラハムの子孫を助けられた。(ヘブル 2 章 16 節)

サタンの反乱の過程において、天使たちのうちの一部、実に全体の三分の一にあたる者たちが、自らの意志によって神から離反しました。³³ 残る三分の二、すなわち選ばれた天使たちは、終始一貫して主への忠誠を捨てることはありませんでした。おそらく非常に長い期間にわたって、天使たちは豊富な知識を与えられたうえで、自分たちの永遠の行き先について決断を下したのです。反逆した集団は、神との和解を望むことは決してなく、忠実であり続けた集団は、そもそも和解を必要としませんでした。

人間の置かれた状況は、天使たちのそれとはまったく異なっていました。

³³ この節で扱われている出来事についての詳細な解説は、以下を参照してください。

サタンの反乱(反逆)シリーズ:SR 1「サタンの反逆と恵みからの墮落」,SR 2「創世記のギャップ」,SR 3「人間の目的・創造・墮落」

第二章：御子の受肉の目的

IV. 節ごとの注解

十六節

悪魔が神に対して引き起こした争いという観点から見れば、私たち人間は、その反乱を最終的に解決するために創造された存在です。すなわち、サタンが主に向けて行ったすべての冒涇が、完全な嘘であったことを実証するためです。もし悪しき者とその従者たちが、悔い改めて、宇宙の神に対する本来の従順と敬意の立場に戻ろうとしていたならば、サタンの主張とは正反対に、神はそのための道を必ず備えられたはずでした。そのことは、罪ある人類のために和解の機会を与えるため、父なる神がご自身の独り子を犠牲にされたという、言葉では言い尽くせないほど驚くべき出来事によって、疑いようもなく示されています。さらにその和解を実現するために、御子ご自身が、すべての人間の一つ一つの罪のために霊的な死を受けることを進んで引き受けられたことにも、その真実がはっきりと表れています。

見よ、彼はそのしもべをさえ頼みとせず、その天使をも誤れる者とみなされる。(ヨブ 4 章 18 節)

それから、左にいる人々にも言うであろう、『のろわれた者どもよ、わたしを離れて、悪魔とその使たちとのために[すでに]用意されている永遠の火にはいつてしまえ。(マタイ 25 章 41 節)

さばきについてと言ったのは、この世の君がさばかれるからである。(ヨハネ 16 章 11 節)

サタンは自分の追従者たちに対して、全能の神に反逆することは狂気的な自殺行為ではないと保証しました。すなわち彼は、反逆者たちの同意が得られないかぎり、神には被造世界の完全な回復と調和の再建を成し遂げる手段が存在しないのだ、という誤った確信を彼らの心に植え付けたのです。しかし墮落した天使たちの大きな驚きとなったのは、実際には裁きが下ったという事実でした(神がご自身と忠実な御使いたちを第三の天に退かせた後、しばらくの間、悪しき者とその配下が地上で支配権を行使する猶予期間が与えられていましたが)。その裁きは、宇宙全体が完全な暗黒に覆われ、原初の深淵に沈められるという形で到来し、すべての生命が滅ぼされ、被造世界から光が完全に奪い去られる結果となったのです。

(1) まず初めに、神は天と地を創造された。

(2) **しかし**、地は荒れ果て、破壊された状態となり、深淵の面には闇があり、神の霊が水の表を覆うように動いておられた。(創世記 1 章 1-2 節/イクシス訳)

第二章：御子の受肉の目的

IV. 節ごとの注解

十六節

神の王国の最初の都が壊滅したことは、悪しき者とその天使たちにとって予期されていなかった裁きを象徴していましたが、それと同様に、宇宙の再創造と、地が人の住める状態へと回復されたこともまた、反逆者たちに下された神の裁きが正しかったことを、神ご自身が恵みによって示す舞台となりました。同時にそれは、彼らに代わる存在が立てられる場ともなったのです。自らの選択によって失われたその地位を、代わって担うことになったのが人間だったのです。

(26) 神はまた言われた、「われわれのかたちに、われわれにかたどって人を造り、これに海の魚と、空の鳥と、家畜と、地のすべての獣と、地のすべての這うものとを治めさせよう」。(27) 神は自分のかたちに人を創造された。すなわち、神のかたちに創造し、男と女とに創造された。(28) 神は彼らを祝福して言われた、「生めよ、ふえよ、地に満ちよ、地を従わせよ。また海の魚と、空の鳥と、地に動くすべての生き物とを治めよ」。(創世記 1 章 26-28 節)

悪魔は、これらの予想外の展開を分析するのにほとんど時間をかけませんでした。このまま何の妨げもなく進めば、自分とその配下を置き換えるに足るだけの人類が、やがて必ず生み出されることになるからです。そこでサタンは反撃に出ますが、その企ては一見すると非常に巧妙に思えるものの、実際には神のご計画の中に完全に取り込まれてしまいました。その結果として、人類史は私たちが知っている形で動き出し、墮落した人類のすべての罪が贖われなければ和解は成り立たない、という道筋が確定したのです。そして、まさにこの「和解」こそが、直前の節で述べられている事柄であり、父なる神が、ひとり子であり、私たちの救い主であるイエス・キリストの死を通して、私たちに備えてくださったものです。さらに、その和解の機会を実際に受け入れようとする人間が存在すること、そしてその機会そのものを可能にしたイエス・キリストの犠牲とが相まって、天にいるすべての者にも地にいるすべての者にも、サタンの耳ざわりのよい約束には何ひとつ実体がなく、ただの偽りにすぎなかったことが明らかに示されたのです。

あなたがたは自分の父、すなわち、悪魔から出てきた者であって、その父の欲望どおりを行おうと思っている。彼は初めから、人殺しであって、真理に立つ者ではない。彼のうちには真理がないからである。彼が偽りを言うとき、いつも自分の本音をはいているのである。彼は偽り者であり、偽りの父であるからだ。(ヨハネ 8 章 44 節)

天使たちは、そもそも十字架による憐れみ深い介入を必要としなかったか、あるいは

第二章：御子の受肉の目的

IV. 節ごとの注解

十六節

は、そのような和解や平和の申し出に関心を示さなかったかのいずれかでした。しかし、私たち人間は違います。私たちは皆、その救いを必要としていました。そして人類の歴史の中で、神ご自身からしか与えられ得ないその和解、その救い、その「助け」を、心から感謝しつつ進んで受け取ってきた者たちが、確かに存在してきたのです。

人の子がきたのは、**失われたものを**尋ね出して救うためである」。(ルカ 19 章 10 節)

(1)さてあなたがたは、先には自分の罪過と罪とによって[靈的に]死んでいた者であって、(2)かつてはそれらの中で、この世のならわしに従い、空中の権をもつ君、すなわち、不従順の子らの中に今も働いている靈[私たちを取り巻いている(すなわち、悪靈)]に従って、歩いていたのである。(3)また、わたしたちもみな、かつては彼らの中にいて、肉の欲に従って日を過ごし、肉とその思い(すなわち、罪の性質)との欲するままを行い、ほかの人々と同じく、生れながらの怒りの子<「**生まれながら御怒りを受けるべき子**」-新改訳Ⅲ>であった。(4)しかるに、あわれみに富む神は、わたしたちを愛して下さったその大きな愛をもって、(5)罪過によって死んでいたわたしたちを、キリストと共に生かし——あなたがたの救われたのは、恵みによるのである——(エペソ 2 章 1-5 節)

(21)あなたがたも、かつては悪い行いをして神から**離れ**、心の中で神に敵対していた。(22)しかし今では、御子はその肉のからだにより、その死をとおして、あなたがたを神と和解させ、あなたがたを聖なる、傷のない、責められるところのない者として、みまえに立たせて下さったのである。(コロサイ 1 章 21-22 節)

神が助けておられるのは天使ではなく、私たち信者です。なぜなら、助けを本当に必要としているのは私たちであり、しかもキリストを信じる者たちは、その助けを進んで受け入れる意思を示してきたからです。したがって、この節は、天使に対するグノーシス主義的な執着という問題に、強い強調をもって終止符を打っています。グノーシス主義者たちは、物事を完全に逆さまにしまいました。彼らは、天使と戦うことで神を助けようしますが、実際には、私たちが関わっているこの天的な争い全体は、神が私たちを助け、その過程でサタンの嘘を打ち砕く、ということにこそ本質があります。

第二章：御子の受肉の目的

IV. 節ごとの注解

十七節

なお、この箇所が、ヘブル人への手紙の中で天使に直接言及する最後の部分であり、次に現れるのは、ほぼ終わり近くの[ヘブル人への手紙 12 章 22 節](#)と[13 章 2 節](#)だけです。ここでパウロは、これまでこの書簡全体で積み上げてきた論証を背景に、グノーシス主義を完全に否定し、その関係者たちを決定的に退けています。そしてこの後は、エルサレムの教会における、より大きな問題である律法主義に焦点を移していきます。ここで「より大きな問題」と言うのは、どちらがより危険かという意味ではありません。グノーシス主義も律法主義も、いずれも信仰に対して極めて有害だからです。そうではなく、エルサレム出身のキリスト者共同体において、律法への逆戻りがほぼ全体に広がっていた、という意味において、より大きな問題だった、ということなのです。

十七節

**そこで、イエスは、神のみまえにあわれみ深い忠実な大祭司となって、民の罪を
あがなうために、あらゆる点において兄弟たちと同じようにならねばならなかつ
た。(ヘブル 2 章 17 節)**

そこで：

すなわち、天使ではなく人間を助けるため——それこそが、本来ご自身が神であられるイエス・キリストが、人とならなければならなかった理由です(神であることをやめたのではなく、神であると同時に人となられたのです)。この驚くべき自己犠牲は、主が世のすべての罪を負うために不可欠でした。神は「いのち」そのものであり、死ぬことはできません。また、身体を持たない神は、身体において罪を負い、犠牲としてそれを贖うことができません。罪を負うことができるのは、真の人間だけです。しかもそれは、あらゆる点で完全で、「傷も汚れもない小羊」——十字架を予表していた動物の犠牲が要求したとおり(キリストの無罪性を示しています：[第一ペテロ 1 章 19 節](#))——でなければ、私たちの罪のためのいけにえとして父なる神に受け入れられることはありません。したがって、人の身体を取ること、完全で罪のない生涯を生きること、人類史上もっとも過酷な人生に課された数々の要求をすべて満たすこと、他の誰であつても心折れ、ついには命を落としたであろう虐待や反対を受けても、使命の遂行を断念しなかつたこと、そして何よりも、それを最後までやり遂げること——すなわち、闇の中で、あらゆる時代のすべての人間の罪一つ一つについて裁きを受けること——これらすべてを通してのみ、主は私たちの罪を完全に贖うことがおできになったのです。

(6)「あなたは、いけにえや供え物を喜ばれなかつた。その代わりに、あなたは

第二章：御子の受肉の目的

IV. 節ごとの注解

十七節

わたしの耳を刺し通された(すなわち『わたしに身体を与え、進んで仕えるしるしを付けられた』こと;[出エジプト記 21 章 5-6 節](#); [申命記 15 章 16-17 節](#)参照)。あなたは、全焼のいけにえも罪のいけにえも求められなかった。(7) そのとき、わたしは言った。『見よ、わたしは来ました(すなわち、まことの犠牲としてこの世に来ました)。書の巻物には、わたしについて書いてあります。(8) わが神よ、あなたのみこころを行うことを、わたしは喜びとします。あなたの律法は、わたしの内なるところにあります。』(詩篇 40 篇 6-8 節/イクシス) ([ヘブル 10 章 5-10 節](#)参照)

あらゆる点において：

イエス・キリストは、完全に人間であり、今もなおそうです。主の人性は、私たちの人性と本質的に同一です。主がこの世に来るために自ら進んで受け取られた肉体も、肉体の誕生の時に与えられた人間の霊も、私たちのものとまったく同じでした。ただ一つの例外は、処女懐胎によって生まれたがゆえに、最初の両親が罪を犯したときに入ってしまった、その後すべての人類に受け継がれることになった罪の性質を、主は持つておられなかったという点です(参照:[ヨハネ 8 章 46 節](#))。

この大祭司は、わたしたちの弱さを思いやることのできないようなかたではない。罪は犯されなかったが、すべてのことについて、わたしたちと同じように試練に会われたのである。(ヘブル 4 章 15 節)

イエスは、罪のない方として生まれ、しかも人類史上もつとも過酷な人生を歩まれたにもかかわらず、その生涯を通して一度も罪を犯されませんでした。しかもそれは、ご自身の神性の力に頼ってのことではありませんでした(もしそうであったなら、主の犠牲は真に人間としての犠牲ではなくなってしまう)³⁴。そうではなく、私たちが助けを受けることができるのと同じように、聖霊の助けによって、神のことばの真理に応答することによって、主はこの完全な歩みを成し遂げられたのです。

その上に主の霊がとどまる。これは知恵と悟りの霊、深慮と才能の霊、主を知る知識と主を恐れる霊である。(イザヤ 11 章 2 節)

これは預言者イザヤの言った言葉が、成就するためである、「見よ、わたしが選んだ僕、わたしの心にかなう、愛する者。わたしは彼にわたしの霊を授け、そして彼は正義を異邦人に宣べ伝えるであろう。(マタイ 12 章 17-18 節)

³⁴ [BB 4A「イエス・キリストについての研究」.5.e「位格的結合とケノーシス」](#)を参照してください。

第二章：御子の受肉の目的

IV. 節ごとの注解

十七節

(34) 神がおつかわしになったかたは、神の言葉を語る。神は聖霊を限りなく賜うからである。(35) 父は御子を愛して、万物をその手にお与えになった。(ヨハネ 3 章 34-35 節) (参照、ヨハネ 6 章 63 節)

(6) キリストは、神のかたちであられたが、神と等しくあることを[どうしても]固守すべき事とは思わず、(7) かえって、[すでに持つておられた神と同等の神性があるにもかかわらず]おのれをむなうして僕のかたちをとり、[そして]人間の姿になられた。その有様は人と異ならず、(8) おのれを低くして、死に至るまで、しかも十字架の死に至るまで従順であられた。(ピリピ 2 章 6-8 節)

あわれみ深い忠実な大祭司:

これは、ヘブル書の中でキリストの「祭司職」について初めて語られる箇所です。この教理はきわめて重要であり、のちにパウロが語っていく、十字架におけるキリストの勝利によって律法が置き換えられたという教え全体の土台となるものです。祭司とは、神によって選ばれ、人間に対して神を代表する者のことです。つまり、神と人との間に立つ仲介者(媒介者)であり、神との特別な関係ゆえに、神からの言葉を授かり、それを神の民に伝える役割を担います。

あなた[モーセ]はどうぞ近く進んで行って、われわれの神、主が言われることをみな聞き、われわれの神、主があなたにお告げになることをすべてわれわれに告げてください。われわれは聞いて行きます』。(申命記 5 章 27 節) ([出エジプト記 20 章 18~19 節](#)参照)

しかし、それ以外のすべての人間の祭司たちは、自分自身の罪のためにも、また民の罪のためにも、動物のいけにえをささげなければ神に近づくことができませんでした([ヘブル書 5 章 3 節](#), [7 章 27 節](#))。それらのいけにえは、やがて来る十字架の犠牲を指し示す「型」にすぎず、罪を実際に取り除く力は持っていませんでした。本当に罪を取り除くことができたのは、私たちの完全な大祭司が自らささげた、ただ一つの犠牲——十字架の犠牲だけです。では、それを成し遂げることができたのは誰だったのでしょ

うか。それは、完全な忠実さをもって生き、完全ないけにえとなり得た方だけです。では、それを実際に行おうとされたのは誰だったのでしょか。それは、完全な憐れみを持つお方だけでした。

(6)わたしたちがまだ弱かったころ、キリストは、時いたって、不信心な者たちのために死んで下さったのである。(7)正しい人のために死ぬ者は、ほとんどいないであろう。善人のためには、進んで死ぬ者もあるいはいるであろう。(8)しかし、まだ罪人であった時、わたしたちのためにキリストが死んで下さったことによって、神はわたしたちに対する愛を示されたのである。(ローマ 5 章 6～8 節)

罪をあがなう (Expiate the Sins)：

「罪を贖う (expiate)」とは、神学では 宥め (propitiation)、また 贖罪 (atonement) とも呼ばれ、人間と神との関係において、罪という問題を取り除くことを意味します。整理して言うなら、贖罪 (expiation / propitiation / atonement) は、私たちの罪の代価を支払うこと、贖い (redemption) は、罪の奴隷状態から私たちを買い戻すこと、和解 (reconciliation) は、その結果として神との関係が回復されることを指します。ただし、これはすべて キリストの犠牲を自ら進んで受け入れる人々に対して成り立つものです。³⁵ここで使われているギリシヤ語ヒラスコマイ $\text{i}\lambda\alpha\sigma\kappa\omicron\mu\alpha\iota$ (ilaskomai) は、文字どおりには「なだめる」「宥める」という意味を持ちます。その考え方の中心にあるのは、十字架における御子の犠牲によって、父なる神が満足し、その犠牲を受け入れられたということです。すなわち、その犠牲は 神にとって受け入れ可能なものと認められたのです。この語は、旧約聖書のヘブル語 כַּפָּר (kaphar) を訳す際に用いられる語根でもあります。この kaphar から、「贖罪の日 (Day of Atonement)」という表現が生まれました。さらに、この語根は 契約の箱の「贖罪所 (施恩座、mercy seat)」を指す言葉とも関係しています。それは、ケルビムに挟まれた金の覆いであり、贖罪の日にささげられたいけにえの血が注がれた場所です。この情景は、父なる神の聖さを守るケルビムたちが、流された血を見下ろし、それを是認している姿を象徴的に示しています。したがって、私たちの罪を贖う (expiate) とは、それらの罪が 完全に、永遠に取り除かれ、もはや 救いを妨げる問題や障害として二度と取り上げられない状態にされることを意味します。なぜなら、父なる神が その犠牲を完全に受け入れられたからです。これこそが、私たちの愛する主であり救い主であるイエス・キリストの生涯全体、そしてその祭司職の究極的な目的でした。そして、そのことを決定的に示したのが、十字架上での次の御言葉です。

すると、イエスはそのぶどう酒を受けて、「[今や](救いのわざの) **すべてが終わった(テテレストイ)**」と言われ、首をたれて息をひきとられた。(ヨハネ 19 章 30 節)

³⁵ [BB 4A .II.「イエス・キリストの救済の御業」](#)および [BB 4B 第 III 部「救われるとはどういうことか」](#)を参照してください。

十八節

主ご自身、試練を受けて苦しまれたからこそ、試練の中にある者たちを助けることができるのである。(ヘブル 2 章 18 節)

私たちの主は、苦難に満ちた生涯を歩まれました。「悲しみの人で、病を知っていた方」([イザヤ 53 章 3 節](#))であられたのです。主はその使命を完全に成し遂げるため、常に御父に完全に献身していなければなりません。ほんの一度たりとも、気を緩めることは許されませんでした。主は、真理によって完全に成長し、その真理によって完全に生きる必要がありました。それは時折そうするというのではなく、あらゆる瞬間においてそうでなければならなかったのです。主もまた、私たちが直面するのと同じ悩みや試練を経験されましたが、それに加えて、完全な御子として、完全な兄弟として、完全な市民として、またご自身が生きられたユダヤ社会の一員として、常に完全であるという重い責任を負っておられました。さらに主は、委ねられた「諸々の奉仕の中でも最大の奉仕」、すなわち十字架へと至る苦難の道行きに備えるため、すべての瞬間を最大限に用いなければなりません。そしてその十字架において、霊的な死を遂げ、御血によってこの世のすべての罪を洗い清められたのです。主が地上の生涯全体を通して背負われた重荷に、かつて近づいた者も、その後現れた者も、誰一人としていません。実際、誰にもそれは不可能でしたし、暗闇が訪れたあの時、十字架に至るまで主が耐え抜かれた苦難、そして全人類の罪のために代価を支払われたその試練に、耐え得る者は他に存在しませんでした。苦しみについて本当に知っておられる方がいるとすれば、それは私たちの主イエス・キリストです。主は悪魔からの試みに遭われ([マタイ 4 章 1-11 節](#); [マルコ 1 章 12-13 節](#); [ルカ 4 章 1-13 節](#))、また誕生の日から人としての霊を御父にお返しになる瞬間に至るまで、置かれた厳しい状況そのものによっても試みられ続けました。そして、あらゆる時代に生きたすべての人間の罪一つひとつを負い、それらのために裁きを受けることが、主にとって何を意味したのかについて、私たちは正直なところ、ほんのかすかな一端を思い描くことができるに過ぎません。

わが神、わが神、なにゆえわたしを捨てられるのですか。(詩篇 22 篇 1 節前半)

イエスは、私たちが赦されるために見捨てられ、私たちに代わって裁かれ、この世の罪を取り除くために死なれました。私たちが永遠のいのちを得ることができるよう、主は私たちの代わりに死を受けられたのです。

第二章：御子の受肉の目的

IV. 節ごとの注解

十八節

ここにこそ愛があります。それは、私たちが神を愛したということではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のための宥め(なだめ)の供え物として御子を遣わされた、ということです。(第一ヨハネ 4 章 10 節)

私たちの主の人性があらゆる点で真実のものであったのと同様に、主の受けられた苦しみもまた、完全に真実のものでした。そして主が私たちと同じように試され、誘惑を受けられたからこそ、仲保者として([ガラテヤ 3 章 20 節](#); [第一テモテ 2 章 5-6 節](#); [ヘブル 8 章 6 節](#), [9 章 15 節](#), [12 章 24 節](#))また執り成し手として([ローマ 8 章 34 節](#); [第一ヨハネ 2 章 1-2 節](#))、私たちを完全に思いやることができになるのです。主イエスは、私たちが今まさに通り抜けているこの人生のつぼを、実際にご自身で通過されたお方です。ただし、罪を犯すことなく、しかも私たちの想像をはるかに超える深さと重さにおいてそれを耐え忍ばれました。そしてその歩みは、十字架において頂点に達し、そこで主は私たちを罪から贖い、死の力から解放してくださいました。それは、私たちが永遠に主と共にいることができるようにするためでした。

(1)「あなたがたは、心を騒がせないがよい。神[御父]を信じ、またわたしを信じなさい。(2)わたしの父の家には、すまいがたくさんある。もしなかったならば、わたしはそう言うておいたであろう。あなたがたのために、場所を用意しに行くのだから。(3)そして、行って、場所の用意ができたならば、またきて、あなたがたをわたしのところに迎えよう。わたしのおる所にあなたがたもおらせるためである。(ヨハネ 14 章 1-3 節)

私たちが痛みの中にあるとき、苦しみを味わうとき、悲しみに沈むとき、喪失を経験するとき、また重圧の下に置かれるときには、どうか決して忘れないでください。私たちの救い主は、これらすべてが一時的なものとなるようにするため、私たちの経験する苦しみをはるかに超える苦難を耐え忍ばれたのです([イザヤ 52 章 13-15 節](#), [53 章 1-12 節](#); [詩篇 22 篇 1-31 節](#))。主は、この悪魔の支配する世界において私たちが直面し、耐え忍んでいる苦悩を、誰よりもよくご存じです。そして主は、それらと同じ苦しみを実際に経験し、耐え抜かれたお方として、いつでも私たちを助けるためにそばに立っていてくださいます。

恐れてはならない、わたしはあなたと共にいる。驚いてはならない、わたしはあなたの神である。わたしはあなたを強くし、あなたを助け、わが勝利の右の手をもって、あなたをささえる。(イザヤ 41 章 10 節)

第二章：御子の受肉の目的

IV. 節ごとの注解

十八節

その日には、あなたがたがわたしに問うことは、何もないであろう。よくよくあなたがたに言うておく。あなたがたが父に求めるものはなんでも、わたしの名によって下さるであろう。(ヨハネ 16 章 23 節)

あなたがたは、実に、そうするようにと召されたのである。キリストも、あなたがたのために苦しみを受け、御足の跡を踏み従うようにと、模範を残されたのである。(第一ペテロ 2 章 21 節)

第三章：モーセにまさるイエス…

IV. 節ごとの注解

十七-十九節